

明治3年(1870)

〔稿本表紙〕

明治三年
二月 忠義公史料稿本(初稿)二

〔稿本にて補正〕

五五七 箱館府判事井上長秋樺太海岸巡航中所在
ヲ失ヒタルヲ愍ミ遺族ニ金八百兩ヲ賜フ

二月三日

朝廷ニ於テハ、箱館府判事井上長秋見石、一昨戊辰ノ歳箱館在勤中樺太海岸巡航中、帰路遂ニ所在ヲ失ヒタルヲ愍ミ、金八百兩ヲ其遺族ニ賜フ、

五五七ノ一
二月三日文己

島津鹿兒島藩知事

其藩士井上石見儀、一昨戊辰歳箱館在勤中、海岸巡覽之為メ乘艦出帆致候処、全不慮之儀モ可有之哉、今以所在不相知趣、不便之事ニ被 思食候、依之別紙目録之通、其妻子へ下賜候事、

〔米〕
「庚午二月三日」

目録金八百兩

五五七ノ二

鹿兒島県士族

井上石見

戊辰二月十二日

一函館裁判所在勤被仰付候事、

同月廿日

一制度事務局判事加勢被仰付候事、

全年三月四日

一徴士制度事務局権判事被仰付候事、

同月廿七日

一制度事務局権判事被免、権弁事被仰付候事、

全年四月十二日

一徴士内国事務局権判事被仰付、箱館裁判所在勤可有之

事、

一 弁事・権判事被免候事、

全年閏四月五日

一 徴士・参与職・内国事務局判事被仰付候事、

同月廿三日

一 叙従五位下、

同月廿四日

一 箱館府判事被仰付候事、

全年十二月十九日

一 徴士箱館府判事被免候事、

己巳年六月二日

一 戊辰正月参謀之命ヲ奉、伏見之役大坂出張大儀ニ被思

食、依為其慰勞目錄之通下賜候事、

【参照一】

井上石見事蹟

略上

〔正徳〕

▲藤井良節の弟井上石見先生は、長秋と号し、国史に
通し、和歌に巧な勤王家であつた、藩主島津侯の産土
神である諏訪大明神（市長田町鎮座）の神職を勤め、か
の嘉永の継嗣問題の起つた際に、世子齊彬公擁護派の
志士中の一人として識られ、脱藩筑前ニ奔り、藩主黒

田長薄公に我藩の事情を訴へ、以テ時難を拯つた井上
出雲守（後藤井良節）は、石見先生の家兄である略下

▲人物と交友、石見先生の人となりは、容貌魁偉、気

宇宏濶、思慮周密の人であつた、夙に尊王憂国の志を

懐いて、高崎五六・高崎佐太郎（男爵正風）・大野四

郎助・柴山愛次郎・橋口壮助・橋口傳藏（以上二人は寺田屋廻難士なり）

の如き藩の同志と名節を砥礪シ、共に国事に尽さんこ

とを誓つて、万延元年京都に祇役した際には、勤王家

文豪家として名を馳て居た、梁川星巖や田中河内介の

如き勤王志士と往来、親交を結んで、国事に奔走努力

しつゝあつた、

▲山階宮へ奉仕、尋で文久二年島津左府公が御上京に

際し、石見先生は拔擢せられて国事係となつて居る、

斯くて先生は京都で栗田宮様や山階宮様を始め、堂上・

諸侯及び志士の間に奔走されたが、特に当時京神の中

心人物であつた岩倉富研公（具視卿）と薩藩有志との

楔子となつて、王事に尽瘁した事蹟の如きは、最も顕

彰すべきものであるが、夫等の関涉で遂ニ先生は、山

階宮様の御傍に奉仕さるゝ身とはなられた、

▲略上主上陛下には、万機を親裁シ玉ふ御事となつて、

大政官を九條閣白邸に置き、神祇事務・内国事務・陸海軍事務・会計事務・刑法事務・制度事務の分科を定めになつた、これ明治元年正月十三日の事である、此時薩藩士で新政府に登用された人物は、小松帶刀(清廉)・西郷吉之助(隆盛)・大久保市蔵(利通)・岩下方平・吉井幸輔(友実)・町田民部(久成)・五代才助(友厚)・寺島陶蔵(宗則)・井上石見の九十二過ぎなかつた^{○以下略}

此の月先生には、任に函館に赴き先づ蝦夷各地の風土産物を調査され、更に八月樺太に航し、其沿岸を巡視、帰航中に先生の踪跡を失つた、其踪跡を失つた原因は、今以て詳ならぬである、朝廷には其不幸を憐み玉ひて、明治三年二月特に金八百両を遺族に賜つた^{○以下略}

其後未亡人品子刀自へは、終身年金參百円を授け玉はつた^{○以下略}

▲一生面を開かん、石見先生が自ら請うて、任に蝦夷不毛荒寥の地に赴かれたるは、立派な理由が存する様である、某の日先生が或人に赤心を布いて語らるゝ処に拠ると、

維新の鴻業は、我が西郷・大久保の諸先輩に於て之

を翼賛し、然かも空前の偉勲を奏されたから、吾々後進者たるものは、宜しく一生面を開拓して、国家に貢献する所がなくてはならぬ云々、

^略○上 先生の家に蔵せるところの其意見書、日記及び書柬の如き史料の大部分は、明治十年の丁丑兵燹の為に烏有に帰して、先生の詳伝を編纂することの出来ぬのは遺憾千万の至りである、今僅に搜り獲た蝦夷開拓に関する先生の史料中より、其意見書の全文を読み上げやう、

蝦夷地開拓建言書(明治元年三月)

万事本源に不着眼は其末起ること難し、国家富強の本は、四民各職業を尽すにあり、就中農は国の本なるゆゑに、其本業を尽さしむるの道立ざれば、国土の疲弊補ひがたし、農を起すの本は、地を拓き、人民を増殖するにあり、人民を増殖するの本は、事を簡易にして、夫役を省略し、器械を以て民力を扶くるにあり、西洋諸国も蒸気器械を發明し、民力國中に余りあり、故に自然拓地育民の業を起し、或は万里の外に数千人を出し、開港交易の大利を計るに至る、我国近年内外多事、昼夜東西の夫役幾十万といふことを知らず、是等の民

力を補ふの道立たざるときは、田野の荒廢に及ぶは又自然の理也、蝦夷開拓のことは、北陸の大事勿論不可忽の要務なれば、其手を下すの道、さまざま緩急の術あるべけれども、畢竟又内地の民を移さざれば、成功遂げ難き事なれば、第一内国旧地の荒廢せざる様夫役を省略し、器械を製造して人民を生ずるの策、今日の急務と奉存候事、

三月

井上石見

同上（明治元年三月廿五日）

箱館に裁判所御取建相成候ても、奥蝦夷は程遠き事故、何れ別段參謀の内にも御遣はし相成度、人撰の事は容易に難申上候得共、近年岡本久平其地を経歴いたし候ゆゑ、此人など御用ひ可然と奉存候、

井上石見

▲策問に答申す、明治元年三月廿五日午の刻、上議事所に於て、三職及び徴士の面々列座して、蝦夷地開拓の事を議したが、其際副総裁岩倉具視卿が策問した箇条書に対する石見先生の答申書、

蝦夷地開拓につき再度建言書（明治元年四月）

蝦夷開拓の事につき、器械を製造して人力を省略する

の策急務と奉存候旨、言上仕候処、其策如何と、更に御下問を蒙り、不顧愚計兼て書取の俣奉呈上候、

蒸氣器械は俄に製し難ければ、先づ水車の一事を以て考ふるに、中等の車にても六十臼を舂く、故に一曰一人の勞に代ふれば、六十人に當るの理なり、我國民の大数大凡四千万人とするときは、一日二十万石を食す（一人一日米五合の割）、一人にて五斗づゝ舂くにして、一日四十万人に及ぶ、誠に右の四十万人に雇錢を与ふると見るときは、幾多の失費なるや、其外酒造等に用ふる所の米穀を加ふるときは、弥莫大の事なるべし、国財の本を計るには遠く爰に眼を着けされは、天下の富強は為し得ざることは必然なり、仮令は井中に梯子を下し、水を汲しむる家あらん、誰か是を見て愚とし、何故に井戸車を用ひさるやと怪しみ問はさることを得んや、世人かゝる一家の小費ハ悟り易く、顯然たる国土の洪費を厭はざるは歎かはしき事なれば、人皆一家の雇夫を見る如く、一国の人民を愛惜し、追々器械を以て成し得る限りを極め、無益に人力を費さざる様、遠大に思慮を尽さは、国家富強をなすこと、又何ぞ難からんや、

右愚意の概略に御座候、然る処是迄一家生業の爲に、水車を管まんと願ふ者有之候ても、地所等の故障に事寄せ、賄路を得されは許さざるもの有之哉に承はり候、右等の者は、天下の大益茲に出ることを知らざるは勿論に候得共、以来右に不限願意の筋は、公私輕重御勤弁の上、国家有益の事は速に御差許に相成度、尤も下の願を不被待、官府の御計ひにて十分御手を被着候はゞ、此上もなき御事と奉存候、謹言啓白、

四月

井上石見

△右建言の如く、人工を省き、困財を殖するの於策、朝廷に御採用可被為在候、是のみに不限、總て皇基を固くする経綸の策は、御施行可遊思食に候、上下一同深く相心得、願意の筋有之者は、無懸念可申上様被仰出候事以下略

【参照】

具視蝦夷地開拓ノ事宜ヲ策問スル事

三月二十五日明治元年、具視議定・参与ヲ朝堂ニ会シテ、

蝦夷地開拓ノ事宜ヲ策問ス、其文ニ曰ク、

第一条、箱館裁判所被取建候事、

第二条、同所総督・副総督・参謀人撰之事、

第三条、蝦夷名目被改、南北二道被立置テハ如何、

晃親王・鷹司輔熙・中御門經之・萬里小路博房・松平

慶永・鍋島直正・蜂須賀茂韶・十時攝津・毛受鹿之助、

大久保一藏・木戸準一郎・神山左多衛・溝口孤雲・荒

尾駿河・井上石見・小原二兵衛・青山小三郎等皆答テ

曰ク、人材ヲ登用シテ其任ニ当ラシム、是ニ於テ具視

ハ衆説ニ從フテ、先ツ人撰ヲナスコトヲ決定シ、而ル

後ニ裁判所ヲ置キ、漸次開拓ニ着手ノ順序ヲ立ツヘシ

ト陳告ス、

五五八 府藩県ノ公廨ヲ改メテ庁ト称ス

二月三日

府・藩・県ノ公廨ヲ改メテ庁ト称シメ、更ニ諸願伺届等

ニハ、自今弁官御伝達所ト記サシム、

二月三日家記

府・藩・県公廨自今總テ何府何藩何県庁ト可称事、

但支配地下方ヨリ差出候諸願伺届等ハ、某御役所ト

認メ不苦候事、

是迄諸願伺届等ニ、弁官御役所ト相認差出候分、向後
弁官御伝達所ト可称事、

五五九 京都諸藩邸荒蕪ノモノノ処分等ニ付キ達

ス

二月五日

京都諸藩邸不用ノモノノ処分ヲ定メシメ、且ツ列藩華族
隱居有位ノ輩、未タ參朝セサル者ヲシテ朝覲セシム、仍
テ自今華族元服ノ輩ノ染齒掃眉ヲ停止ス、

五五九ノ一
二月五日辛丑

御布告写

京都ニ有之候諸藩之邸宅地所、近来往々荒蕪ニ相成候
場所不少趣、右ハ全ク地力ヲ廃棄シ候儀ニ付、不用之
向ハ桑茶等植付、地力ヲ尽様可致、不及其儀分ハ、売
払候軟、又ハ上地致候軟、孰レトモ取極、早々京都府
へ可申出事、

但拝借地之分ハ返上可致事、

五五九ノ二
列藩華族隱居有位之輩、御一新以来未タ參

朝不致向ハ、來三月中 朝覲可致旨被 仰出候事、

但極老參覲難相叶輩ハ、其旨可申出候、尤精々輕装

ニテ可罷出事、

五五九ノ三

華族自今元服之輩、齒ヲ染メ、眉ヲ掃候儀、停止被

仰出候事、

五六〇 長州兵士騷擾ニ付慰問視察トシテ西郷隆

盛以下数人ヲ遣ス

二月七日

長州ニテハ、兵制改革解隊ノ事ヨリ、兵士間ニ騷擾起リ
シニヨリ、時機ヲ見テハ討伐兵ヲ発遣スヘキモ、先ツ慰
問視察トシテ、西郷隆盛以下数人ヲ遣ス、時ニ長州出京
ノ兵歸藩、事已ニ平定ニ歸ス、仍テ西郷等ハ十六日歸藩
ス、

五六〇ノ一

同日十三日西郷吉之助・村田新八・大山彌助・中村

半次郎ヲ引見シテ厚遇シ、各々物ヲ贈リ勞ヲ慰ス、

西郷等ハ昨十二日山口ニ入りシナラン、十二日・十〇下

三日西郷ヲ其旅宿ニ訪ヒシコト木戸日記ニ見ユ、略
略 十四日〇二日西郷隆盛等山口ヲ去ル十六日鹿児島〇下

略^{○上} 西郷隆盛ハ、同行六七人ト軍艦ニ乗シ、中ノ關ニ至ル、時ニ木戸孝允軍隊ト共ニ行進ノ途中之ヲ聞キ、其脱隊トノ調停ヲ謀ルノ拳ニ出テンコトヲ恐レ、行テ之ヲ訪フ、西郷等既ニ去レリ、既ニシテ復々中ノ關ニ帰ル、孝允之ヲ訪ヒ談スル所アリ、

按スルニ、木戸日記ニ、木戸ハ十日西郷等來着ノ報ヲ得テ、直チニ中ノ關ニ至レハ、西郷等昨霄既ニ馬關ニ赴クト聞クトアレハ、西郷等ノ中ノ關着ハ九日ノ事ナラン、木戸ハ西郷ノ調停ノ策ニ出シコトヲ恐レ、之ヲ謝絶セントシタルナリ、十日ノ木戸日記ニ曰ク、

〔頭註〕「藩吏三浦秀介、山口ヨリ脱シ來ルナリ」

宮市本陣ヨリ三浦[○]三[○]來ル、君上征討ノ御命令被仰出シコトヲ聞、不覚感激ス、西郷等中ノ關ニ着艦セシ由ヲ告、直ニ中ノ關ニ至ル、于時昨霄已ニ馬關ニ至ルト云、兵隊ヲ不誘、西郷等六七士而已ト、依テ余大ニ周旋ノ策アランコトヲ恐レ、一軍艦ヲ馳セ、余等ノ心事ヲ欲訴、龍口ニ至ル、一隻ノ軍艦ナシ、大ニ失望、不凶戸田龜之助ニ逢ヒ、余之見ヲ談ス、彼亦大ニ余之意ヲ知ル、依テ西郷等ヲ追ヒ、自然周旋之事アラハ誓テ止ルコト

〔頭註〕「海軍教授戸倉八ナルヘシ」
ヲ諾シテ去、戸倉モ亦隨行ス、今日ニ當リ万一周旋ニヨリ正邪ヲ不判ハ、終ニ國家維持之目的毫モ無之、余之苦心尤甚シ、

西郷等ノ一旦馬關ニ廻航セシ事情未ダ詳ナラス、木戸日記ニ依ルニ、既ニシテ西郷等再ビ中ノ關ニ來着セル報ニ接シ、途中ヨリ更ニ中ノ關ニ赴ク、翌十一日西郷等上陸シ、木戸ハ杉・野村(素介)ト共ニ之ヲ訪ヘリ、而シテ木戸ハ江良口ヨリ軍隊ト共ニ行進ノ約アリ、中ノ關ヨリ馬ニ乗り、軍後ヲ追ヒ、直チニ江良口ヨリ山口ニ入レリ^{戸田ハ西郷等ト相逢シ、}
テ過ハザリシヲラシ

又按スルニ、木戸日記ニ依ルニ、木戸ハ十日中ノ關ヨリ十二字過宮市本陣ニ至リ、杉・野村等ニ逢フ^{杉孫七郎、野村素介、ナリ、二人ハ、徳・若二藩兵催促ノ為メ、其前山口ヲ脱出シ、山間ヲ闊行シ、此時二藩兵ト此処ニ來リシナリ、木戸日記ハ日ノ條ニ、杉富海ヨリ來リ、本山沖ニテ相逢ヒ、共ニ乙丑艦ニ乗ルトアレハ、野村ト共ニ右田口ニ至リ戰山口脱出ハ其以前ナルヲ知ルヘシ}、野村ト共ニ右田口ニ至リ戰況ヲ視察シ、宮市本陣ニ帰ル、同日義軍江良峠ヲ奪ヒ、勝阪千切関門ノ先ニ出テ、將ニ明日ヲ以テ小郡口ニ貫進セントシ、一軍拳テ競フ、会々西郷等再ビ津ノ國屋ニ着ストノ報アリ、木戸ハ直チニ之ニ赴ク、杉同処ニ在リ、西郷等未タ上陸セス、杉ト[○]二[○]屋ニ宿ス、十一日朝野村來ル、三人共ニ西郷等ヲ訪フ、而シテ木

五六〇ノ三
〇二月七日
卯發

戸ハ江良口ニ進ムノ約アリ、因テ貞永ノ馬ニ乗り、直チニ江良口ヨリ鴻城ニ入ル、賊悉ク散シ、又謝罪者多シトアリ略

五六〇ノ一
大久保利通日記

四日〇二

略上 今日、横山正太郎・岸良眞二郎両士、神戸丸乗船ニテ從長州報知之為帰藩、実ニ内輪大混動大事ノ次第ニ候、桂家へ参リ談合ス、出殿、人数為救応被差出候筋治定、拙等モ木戸へ談合ノ次第モ有之、傍觀イタシ、信義不相立候ニ付、則踏込候処ニ決定イタシ候、

五日略

六日

今朝橋口與一郎子入来、長州へ人数差出ノコト、(隆盛)西郷等一応御使者相勤候上下、御治定ノ由承候、

十七日

今日得能子入来、西郷子等帰藩ノ由承、昼后同伴同人宅へ参候、長州事件モ先干戈モ治リ、諸隊降伏ニ及候由〇以下略

山口藩隊卒沸騰ニ及ヒ、処置方之儀伺出候ニ付、不得已節ハ、臨機之取計可致旨被仰出候、就テハ万一右之徒、脱走ニ可及モ難測条、兼テ無油断取締可致候、此段相達候事、

五六〇ノ四
寺師宗道日記

二月五日 晴

東 京 府
京 都 府
大 阪 府
兵 庫 府
神 奈 川 府
各 通
倉 敷 府
濱 田 府
堺 府
日 田 府
長 崎 府
四 国 九 州 中 国 筋
五 畿 内 諸 藩

〔前文二三行省略カ〕
長州国乱起り候ニ付、此方より御加勢として、一大隊

出兵相成候由咄也〔是日出発ニ至ラス〕
〔七日ニ出発ス〕

〔同六日省略カ〕
同 七日 晴天

〔前文一行省略カ〕
略 此節長州国乱ニ付、西郷吉之介と大山彌介之兩人、

一先ツ差越、彼方模様次第兵隊被差出と之事之由、同

席より伊勢仲左衛門被差越候内達有之、一大隊大砲一

座之由也〔後文省略カ〕

同 八日 晴

〔前文省略カ〕
此節長州一条咄承候、彼之奇兵隊、干城隊と云城下兵

と之入組より起り候由、右は初め長州より朝廷江願出

ニ、先年来浮浪之輩多候故、是を扶持する事難成候付、

豊後之日田郡を被下候様、左候ハ、右之徒戦功等ニ

宛可申と之願候由、然処 朝廷より其浮浪之者共は

朝廷江差出候様被仰渡候処、右之所処事有時は抱へ、

事治る時ニ至て捨候事と憤り候由、又奇兵隊を本地江

返付候事より恩賞之不公平より起り、旁紛擾成立候よ

し也、木戸準一郎杯ハ、首級を差出候様頻りニ迫り、

小倉方へ逃除キ候由、当分山口之城ヲ取囲ミ、出入ヲ

差塞キ、干城隊ヲ城へも不入、〔藩吏ヲ指ス〕 姦徒の首ヲ不出内は囲

ヲ不解と之事故、大ニ城ニは大膳ヲ始メ困窮之由、先

比大久保一蔵下りニ立寄候処、御国軍艦ヲ借用いたし

度願出候由、右之事情共相聞得候処、朝敵同然ニ付、

此方〔本藩ヲ指ス〕より出兵打付ケ可然議論ニて、昨日西郷吉之

介・大山彌助差越候由、尤御使者之筋ニて三田尻より

山口へ通り之手筈之由、其上和順取計相成候由、若不

聞時は、直ニ出兵打方相成候議論決之由、是ニ付ては段

々議論も有之事也〔以下スリキレ〕

〔九日から十五日まで省略カ〕

同 十六日 晴

〔前略カ〕
曉比船入港、号砲数発、定て長州之音到来ならん、西

郷吉州・大山彌介・中村半次郎之輩帰リシならん、

同 十八日 晴

〔前略カ〕
此節出兵之郷々御暇ニ付帰り之由、愈長州平和ニ相成

候由也〔按スルニ、長州教授兵予備ノ為メ、各郷常備兵ヲ城下ニ召集セシナラン〕

【参照】

二月七日 癸

山口藩伺書写

去冬兵制改革一条ヨリ隊卒沸騰、鎮撫相加候得共、弥

我意申募候ニ付、此上ハ干戈ヲ以テ処置不仕候テハ、

平定之目的難相立、誠ニ以奉恐入候得共、臨機之取計

仕候テモ不苦候哉、此段奉伺候、以上、

二月

山口藩知事

弁官御中

御沙汰書写

山口藩知事

伺出之趣、不容易事件ニ付、不得已勢ニ至リ候ハ、
臨機之処置可致旨 御沙汰候事、

兵部省

山口藩徴兵一大隊、依願被差下候間、此段可相達事、

同上

山口藩兵隊帰藩ニ付、運用船一艘御貸渡相成候間、早
々取計可申事

【参照一】

山口藩兵隊内証ノ事

二月七日山口藩知事毛利廣封、藩内暴徒猖獗ナルヲ以
テ、之ヲ討センコトヲ太政官ニ稟候ス、其文ニ曰ク、
本文は参照一ノ同文にて削除
而シテ廣封ハ、東京守備ノ山口藩徴兵一大隊ヲ、拜借
センコトヲ請フ、朝議之ヲ許シ、兵部省ニ命シ、官船
ニ載セテ山口藩ニ赴援セシメ、京都・東京・大坂ノ三

府、兵庫・神奈川・倉敷・濱田・堺・日田・長崎ノ七
県、及四国・九州・中国・五畿内ノ諸藩ニ令シテ、

暴徒ノ奔竄スルモノヲ収捕セシム、十二日勅シテ、大
納言徳大寺實則ヲ宣撫使ト為シ、山口藩ニ赴カシメ給

フ、中弁土方久元・弾正少弼吉井徳春・巖谷修之ニ隨
従ス、十九日、乗艦品川湾ヲ発シ、二十二日兵庫港ニ達

ス、会々山口藩佐々木源蔵暴徒鎮定ノ由ヲ、太政官ニ稟
報セント欲シ、此地ニ来ル有リ、實則乃チ源蔵ヲ本宮ニ

召シ、具サニ其事情ヲ聞ク、二十九日實則山口ニ抵ル、
廣封ニ曉諭シテ、鬪藩協和ヲ謀ラシム、其文ニ曰ク、

山口藩知事

其藩脱隊卒驕恣暴戾ノ挙動有之候ニ付、為宣撫下向
候処、既ニ臨機不得止干戈之処置ニ及、速ニ鎮定候
趣、帰京之上可及奏聞候、尤巨魁之者共ハ相当之処
置可致候、猶追々悔悟帰正之輩ハ、撫馭之道ヲ尽シ、

一藩協和、国民安堵候様可致事、

二月

宣撫使

又廣封ニ命シテ兵隊ヲ精選シ、緩急ノ用ニ備ヘシム、
其文ニ曰ク、

山口藩

今般脱隊卒暴挙事件鎮定之上ハ、去冬御沙汰有之候兵

隊之儀、弥以精選シ、緩急之御用相立候様可致事、

二月

宣撫使

三月三日實則山口ヲ發シ、九日東京ニ還リ復命ス、

五六二

○二月十二日申

御沙汰書写

為宣撫使山口藩へ下向被 仰付候事、

徳大寺大納言

吉井彈正少弼

五六一 宣撫使徳大寺實則ヲ山口藩ニ差遣ス

二月十二日

大納言徳大寺實則ヲ宣撫使ト為シ、山口藩ニ差遣ス、中

弁土方久元高知藩士・彈正少弼吉井徳春鹿兒島藩士等之ニ從フ、

五六一ノ一

鹿兒島県士族

吉井藤原友實

幸輔
徳春

○中略

庚午年二月十二日

一徳大寺大納言為宣撫使山口藩へ被差向候ニ付、出張被

仰付候事、

同年三月十七日

一山口藩へ出張為慰勞、絹一匹・金二万匹下賜候事、下略

五六二
○二月十二日申

御沙汰書写

為宣撫使山口藩へ下向被 仰付候事、

徳大寺大納言

吉井彈正少弼

徳大寺大納言、為宣撫使山口藩へ被差向候ニ付、出張
被 仰付候事、

巖谷大史

為宣撫使徳大寺大納言山口藩へ下向ニ付、隨從被 仰
付候事、

○二月十三日酉己

土方中弁

徳大寺大納言、為宣撫使山口藩へ被差向候ニ付、附添
被 仰付候事、

井上権少史

宣撫使隨從申付候事、

五六一ノ三

吉井友實日記

同月○二五日

○中略

大久保長藩ヨリ発スル所ノ書状到来、

○中略

同月六日

川村来ル、長州諸隊混雑ニ付テノ故ナリ、

○中略

村田平右衛門本日長州へ赴クトノコトニテ来訪、

山口藩ヨリ混雑ノ御届有之候事、

薩兵一大隊兵庫へ出張ノ命下ル、

○中略

岩倉卿御来臨、副島モ来ル、山口藩へ 勅使御下向一

条、並草葬御所置不可然儀等申上ル、

○中略

同月十一日

大久保山口ヨリ發送ノ書翰到着、

○中略

同月十二日

徳大寺大納言殿山口藩へ為宣撫使被差向候ニ付、出張

被 仰付、

大君のミことかしこみ周防なる

あらきその道こへむとそおもふ

同月十三日

神田邸へ行キ、出兵ノ儀ヲ談ス、

黒田嘉右衛門着府、

○中略

同月十五日

徳大寺公へ参上ス、土方中弁モ来ル、

同月十六日

廣澤ヲ訪問ス、

夜中副島ヲ訪問ス、

○中略

同月十八日

今朝ヨリ長州へ出張ノ賦ニテ、十字出發ノ所、風強ク

シテ乗船シ難ク、為メニ延引ス、副島・佐々木両參議

暇乞トシテ来訪、

同月十九日

正午十二字品川拔錨、此夜風強シ、

同月廿日

順行、

同月廿一日

今夜二字兵庫着船、直ニ税所ニ面会ス、

同月廿二日

山口藩佐久間正之助出東ノ途、当港^{兵庫}滞在ニ付、直ニ
入来、去ル九日・十日兩日戦争、諸隊敗走、既ニ及鎮
定候段届出ル、依テ四五日当港滞在ニ決ス、
林半七急行ニテ帰国、
東京へ形行御届申上ル、

○中路

同月廿四日

徳大寺殿始布引ノ滝ニ赴ク、

同月廿五日

御忌日ニ付、楠公ノ廟ニ参拜、
御国元知政事並大久保、在西京岩下・中路等へ各書翰
ヲ發送ス、

綱三カ別荘ニ徳公始諸士ト遊フ、囲碁・狂歌等様々ノ
興アリ、徳公

夕霧かすみこめたり海原や

と有けれハ、不取敢短句を付る

紀路も淡路も見へんはかりに

同月廿六日

十二字当港出船、

同月廿七日

豫州風早浦ニテ損所出来進ヲ止ム、

同月廿八日

十二字防州三田尻ニ着ス、知事公ヨリ使者来ル、木戸
モ来訪、今度ノ事件逐一演述、
宍戸親基来訪、

同月廿九日

八字三田尻発駕、佐波山峠小休、三終宿ニ於テ午餐ス、
此所迄從二位殿其外出迎、三時山口ニ着ス、
知事ヨリ檜崎殿衛使者ニ来ル、又勝木禮蔵使者ニテ酒
肴ヲ贈ラル、

本陣山田太郎へ宿ス、今夜木戸来ル、

同三十日

徳公ノ本宮へ出頭ス、知事ヨリ今般ノ次第逐一言ス、
末藩一同来リ謁ス、

杉孫七郎へ面会、隊卒千三百人余ハ、寛典ニ被処度旨
申入ル、尤ノ事ニ付、則政府ニテ評議ニ可及トノ事也、
夕剋林半七来テ寛典ニ決シタリ、一人半口ヲ与へ、明
日直ニ赦シ帰ストノ段承ル、

三月朔日

大神宮へ参拜、

知事へ御礼ニ罷越ス、明倫館ニ入り、柏村へ面会シ、

諸生中ノ礼ヲ述フ、

今日寛裕ノ典ヲ行ハル、

○中略

同月三日

八字山口ヲ発シ、宮市天満宮へ参詣、夜ニ入り三田尻

へ着ス、

同月四日

三田尻出船、器械損シ徳山へ繋船ス、

同月五日

未明出船、

同月六日

正午十二時兵庫へ着ス、税所へ一泊、

同月七日

飛脚船ヲレコニヤン号へ転乗ス、夕字出船、幸蔵・長

八兩人ヲ従へ、余ハ皆外船へ乗ル、

同月八日

遠州洋航海、

同月九日

朝六時横濱へ着ク、十字頭馬車ニテ横濱ヲ発シ、三字
頃帰宿ス、

同月十日

参朝ス、御学問所ニ

出御、防長ノ事情被

聞食上候事、昼ヨリ弾台へ出テ、

婦着ノ御届申上ル、

○上略

御絹 壹疋

金 貳万匹

右長州行ニ付下賜ル、但坊城殿御取次也、

五六一ノ四

○上略近侍内藤順太ニ、朝廷ニ呈出スベキ公及ビ支藩

知事連署ノ平定報告書ヲ携へ東上セシム、会々此^{○十七日}

日朝廷ニ於テハ、俄ニ徳大寺大納言ヲ宣撫使トシテ下

向ヲ命シ、土方中弁・吉井弾正少弼以下随行、明日東

京ヲ発ス○下略

五六一ノ五

○上略 是より先き山口藩兵制を改正す、旧奇兵・振武・

健武等の諸隊兵服せず、嘯聚乱を作す、藩知事藩兵を

以て、之を討せんと請ふ、又た、山口藩徴兵一大隊をして赴援せしむ、同十日叛兵藩庁を囲む、藩兵撃て之を破り、巨魁三十人を捕ふ、余は皆降る、藩知事をして其巨魁を戮し、逃亡を輯捕し、且つ自新者^{（新也）}を安撫せしむ^{（以下略ス）}

消印可致事、

五六三 鹿兒島藩並触下落々印受領書ヲ鹿兒島藩公用人ヨリ提出ス

二月十五日

鹿兒島藩並触下落々印受領書ヲ鹿兒島藩公用人ヨリ提出ス、

五六二 府藩県ヲシテ其駅程諸関勘合等ニ用ル印鑑ヲ彫刻セシム

二月十二日

府藩県ヲシテ、其駅程諸関勘合等ニ用ル印鑑ヲ彫刻セシム、

○二月十二日 申戌

御布告写

府藩県ニ於テ駅程諸勘合其他小事件々相用候印鑑

何府	何藩	何県
方一寸	方一寸	方一寸
五	五	五
分	分	分

右之通彫刻可致事、

但是迄藩印定寸ヲ以テ、藩ニ於テ彫刻致シ候分ハ、

右ハ当藩並触下落印御渡、追テ知藩事ヨリ御請可申上候迄、先不取敢私共ヨリ一紙ヲ以、御請奉申上候、以上、

鹿兒島藩
 啟原藩
 高鍋藩
 延岡藩
 飢肥藩
 佐土原藩

鹿兒島藩

二月十五日

小野半左衛門

留守官

御伝達所

五六四 島津忠義寧姫トノ婚姻ヲ藩内ニ達ス

二月十五日

忠義公寧姫君トノ婚姻ヲ達ス、

五六四ノ一
一從四位様

寧姫様、来ル十五日 御婚姻被為整筈候条、向々江可

致通達候、

明治三年二月

知政所

一從四位様

寧姫様、今十五日 御婚姻被為濟候付、嶋津珍彦殿一列

並二等官以上、明後十七日四ツ時登 城、家令江相付、

從四位様 從三位様江御祝儀可被申上候、

右外略ス、

但改服、

明治三年二月十五日

知政所

一寧姫様御事 御婚姻御当日より

御前様と可奉称候、左候て御順之儀は是迄之通、
一十月晦日

右御誕生日之事候間、御祝日にて休日ニ被建置候、

但小ノ月は廿九日 御正日、

右之通向々江可致通達候、左候て中山王御承知、佐土
原江為知申越候様、琉球館聞役並佐土原飯屋守江可申
渡候、

但諸島江も申渡、生産奉行江可申渡候、

明治三年二月

知政所

五六四ノ二

島津氏正統系図

女子

寧姫 忠義後夫人

○嘉永六年癸丑十月晦日生ル、母ハ同上 実母同上
田宮安衛姫

○明治二年己巳六月六日、為 近衛前左大臣忠熙公養

女

○十二年五月二十四日逝、神号綾御衣裏寧姫命

五六四ノ三

嶋津鹿兒島藩知事

近衛正二位養女、其方妻ニ縁組致度願之通、被聞食届

候事、

三月

太政官

五六四ノ四

近衛家櫻木御殿奥日記明治三年三月十三日

一 寧姫様御事、二月十五日御日柄宜敷、御スルト御

婚礼御整へ遊ハシ候由、御目出度御吹聴被為御進、右

御婚礼済ニ付、

從四位様・寧姫様ヨリ大御所様へ、

金貳千疋 御着代

色純子 式本 御目出度被為上、

右同断ニ付、

良雅院様へ金 三百疋

紬縞 一反

信君様へ金 三百疋

色純子 一反

コナタ御文御書入ニテ被為進、

右同断ニ付、

紬縞 一反ツ、 小塩

金 五百疋ツ、 玉橋

花嶋

歌島江

金五両ヲ大御所様惣御附中江、右御婚礼済ニ付被下候、

一包煙草 小塩・玉橋始三人江

一 寧姫様ヨリ寒中御尋トシテ被下候、

一 寧姫様ヨリ年始ニ付、御干着七枚ツ、

小塩・玉橋始三人江

一 御同所様ヨリ御干着七枚ツ、被下候事、

御祐筆間江

一 寧姫様ヨリ大御所様江御書二箱被為上、

一 從一位様御事、此度御辞職御願之通、正二位様ト是ヨ

リ称セラレ候事、御吹聴申參ル、

右薩州江

近衛家櫻木御殿奥日記明治三年四月五日 晴

一 留主官ヨリ御用召ニ付、御參宮、御名代ニ

御所様御參、御養女島津へ御縁組御願之通リ仰出サレ

候、

五六四ノ五

近衛家御用部屋日記明治三年三月廿日

一 京都府留主官伝達所江如左御願、尤參朝可被願之処、

御所勞氣以使被願上旨申加、御使表詰中、

島津從四位忠義江忠熙養女縁組仕度奉願候也、

聞食届候事、

月 一日

近衛正二位忠熙

三月

太政官

留守官

御中

明治三年四月五日

嶋津從四位忠義へ、忠熙養女縁組仕度奉願候也、
三月廿日
近衛正二位忠熙

一 巳半刻留守江御参

留守官

大殿御召ニ付御名代也

如左被 仰出、夫ヨリ櫻木御殿江御成、

御中

御帰館子刻、

近衛正二位

嶋津鹿兒島藩知事

其方養女、島津鹿兒島藩知事妻ニ縁組致度願之趣、

近衛正二位養女、其方妻ニ縁組致度願ノ趣、被 聞食

被 聞食届候事、

届候事、

太政官

庚午三月晦日

一 右ニ付薩州家老江以奉書為御知、並当地在京役江御用

願書欠

人中ヨリ為心得申達ス、

一 薩州在京役参上、今日別紙之通被 仰出候ニ付、早速

近衛正二位

国表江申遣ス、藩知事承知之上、表立為御知被申上へ

其方養女、島津鹿兒島藩知事妻ニ縁組致シ度願之趣、

夕候へ共、先不取敢御届之旨申出ル、

被 聞食届候事、

庚午三月晦日

島津鹿兒島藩知事

近衛正二位養女、其方妻ニ縁組致度願之通、被

五六五 藩庁米穀輸出方改正ノ手續ヲ達ス

二月十九日

藩庁米穀輸出方改正ノ手續ヲ達ス、

一諸色方之儀は、会計奉行並会計局調役、又は諸財掛出納奉行出席被仰付置、左候て米穀等自他領積出等ニ付ては、詰検事より現物相改、届先江送状差出来候得共、以来は諸色方掛検事之儀は詰ニ不及、番所詰検事より取扱被仰付、送状之儀は、右出納奉行並会計局調役之間より取扱、左候て検事之儀は致証印、時々差通候様可被仰付哉と評議仕候、以上、

二月十九日

会計局

右之通被仰付候条、可承向江可申渡候、

二月

知政所

五六六 藩庁漢方医院ヲ旧製薬方跡へ設ケ侍医ニ

其総括ヲ委ス

二月二十日

藩庁漢方医院ヲ旧製薬方跡へ設ケ、侍医ヲシテ其総括ヲ

委セシム、

一医院之儀、去夏より一応被廃置候処、此節 思召之訳

被為 在、改て元御製薬方跡江漢方医院被召建、都講

以下被召入、官等等之儀、旧医院ニ準し、総括之儀、侍医江被仰付候間、繰廻致出席、嚴重学則課程相立、教導行届候様、屹と其詮相立候様被仰達候条、侍医江申渡、可承向江可申渡候、

明治三年二月廿日

知政所

五六七 朝廷各藩常備兵編制規則ヲ定ム

二月二十日

朝廷ニ於テハ、各藩常備兵編制規則ヲ定ム、

第十四 二月二十日(兵部省) 各藩

兵制ハ天下ニ無之テハ、不相叶ハ勿論之儀ニ付、先般兵学寮被設置、近々各藩江モ入寮被差許、一定之制式ニ相帰候様、御運ヒ相成候得共、即今常備之処、編隊員数別紙之通り御規則被相定候、此段相達候事、
(別紙) 定

一步兵隊

六十名ヲ以テ一小隊トス、二小队ヲ以テ一中隊トス、

五中隊ヲ以テ一大隊トス、則十小隊、

但嚮導以上諸有司右定員之外タリ、

一砲兵隊野戰
山用

砲二門ヲ以テ一分隊トス、三分隊ヲ以テ一隊トス、則

砲六門、

一兵士年齢ハ、拾八歳ヨリ三十七歳迄タルヘキ事、

但是迄之隊士中、三十七歳以上ト雖、其人ニヨリ強

壯之者ハ格別之事、

一練兵式之儀ハ、先ツ是迄相用來候式ニテ不苦候事、

一石高老万石ニ付、一小隊之割合ヲ以テ可相定候事、

一士族・卒族之外、新ニ兵隊取立候義被相禁候、若万石

一小隊之割合ニ不足候ハ、其旨兵部省江伺出、差図

ヲ受可取計事、

【参照一】

第百十六 二月二十日 (兵部省)

諸県

兵制之儀ニ付、別紙之通各藩江布告致候間、県兵モ当

今有合之分編隊員数等、右ニ準シ改正可有之候、尤新

ニ兵員取立候儀ハ、先般モ御布告相成候通被禁候、且

又有合之分減少之儀ハ、可爲勝手候事(別紙ハ第百
十五ニ同)

【参照二】

寺師宗道日記三月晦日

○上略 朝廷兵制相立、一小隊は六十人ニ相定候由、日

本流之取捨折衷法有之由也○下略

五六八 府藩県外償ニ付布告

二月二十二日

朝廷ニテハ、府藩県ニ令シテ、外国ヨリ金銀借入レ、若クハ将来定品ヲ抵当トシテ、物品ヲ購求スルヲ禁ス、

○二月廿二日辰戌

御布告写

府藩県ニ於テ、會計融通之為、外国ヨリ金銀借用之儀ハ勿論、外国之器械・船艦等買入ニ付、其歳入又ハ物産類、都テ未定将来之品ヲ引当ニ致シ相求候儀、決テ不相成候事、

但農商之輩互市ニ付、互ニ手附金等請取渡致候儀ハ、

官府ニ關係不致、本文之趣トハ自ら差別有之間、

右ト混淆不致様相心得可申候事、

五六九 藩庁糺明局ニ笞刑ノ科条ヲ置ク

二月二十二日

藩庁ニテハ、糺明局ニ答刑ノ科条ヲ置ク、
一 検事兩人

右は今般答刑之科目被召建、検事検使ニテ其刑相施候
様被仰付候付、時々当局より問合次第、右通検事勤方
有之候様、監察局江被仰渡置度御座候、以上、

午二月廿二日

糺明局

右之通被仰付候条、監察総裁江可申渡候、

二月

知政所

五七〇 島津久光・忠義ノ賞典及位禄奉還ニ対シ

岩倉具視ヨリ諭達

二月二十二日

久光・忠義兩公ノ賞典及位禄奉還ニ対シ、岩倉大納言具
ヨリ諭達、

前略、過日来御内談賞典・位禄返献云々、今一応示談
申入度、乍御苦劳明早朝鳥渡来会有之度存候、仍早々
如此候也、

二月廿二日

薩摩邸

黒田嘉納殿

早々要用

岩倉大納言

五七一 島津久光・忠義ヨリ朝廷ニ金米献上ニ付

其員額ヲ公用人ヨリ稟申ス

二月二十三日

久光・忠義兩公ヨリ朝廷ニ対シ、金米献上ノ上表アルヲ
以テ、其員額ヲ公用人ヨリ稟申、

写

覚

一 高拾壹万七千七百六拾四石

内

壹万三千五百拾四石

右昨巳年ヨリ三ヶ年ノ間拝領之株

一金拾六万九千七百九拾九兩壹分三朱

永六拾二文五分

内

五万三千九百六拾九兩三分三朱

永三拾七文五分

二月二十五日

右昨巳年十二月、六万七千七百六拾四石之所務
米代三步一、又ハ半方御下渡相成筈候処、其俵
大藏省へ御預願置候、

大久保利通伝勅ノ目的ヲ達セスシテ、帰京ノ途ニ就ク、
五七二ノ
大久保利通日記

廿五日

九千百拾四両貳朱

右今日献上仕候、

拾万六千七百拾五両壹歩貳朱

永貳拾五文

右昨年御渡高残リ貳朱之所務米代ニテ、当年兩

度ニ御下渡之積、

但貳歩五厘、壹石九兩貳歩ノ相場

右之通御座候間、為御見合此段申上候、以上、

候、

留別

午二月廿三日

鹿兒島藩公用人

田中清之進

廿六日

弁官

御伝達所

廿七日

五七二 大久保利通伝勅ノ目的ヲ達セスシテ帰京

ノ途ニ就ク

廿八日

今日迄モ滞船故、郡山子・得能子・黒田子等一同上陸、
同所風景頗美、

滿城春色落花香 嬌々鶯声对夕陽
多少別魂誰得識 風前楊柳万条長

七字開帆候処、天氣模樣不宜、久志浦へ碇泊、

早朝当所出帆、今晚四字過長崎へ入津、

廿九日

今早朝上陸、山田屋店へ旅宿、得能子同宿、野村子・

川上・森岡(昌純)・中井・東郷子等見舞有之、屋前

步行近陽亭ヨリ藤屋ト云茶店へ參ル、同所数子ノ催ニ

依テ也、風景最宜シク、各把杯愉快ヲ尽シ候、暮過引

取候、

即吟数子ニ示ス

酒滿高楼玉顏新 桃紅李白十分春

浮萍相合心如水 已欲夕陽興味真

三十日

今日ハ旅宿(野村(林八、後宗七))知事、其余郡山老、

川上・東郷・中井・黒田子等一会及酒興候、

三月

朔日

今日迄モ天気不宜、解纜不調候、今日ハ清人高榮・憑

繞兩人ノ面人相招、席面一覽面白候、川上・東郷・中

井^カノ数子モ入来、

二日

屋后ヨリ笠野店(熊吉)へ差越及逗留、最得能・川上

同行、佳人モ来ル、

三日

風雨不止、川上子入来、

四日

得能子・川上氏同道福田屋へ差越洋料理給候、

五日

今日迄モ天下^下不宜、終日不出、

偶作

春深連日雨紛々 半嶺欲晴半嶺雲

一睡醒來猶未暮 故山何処望難分

又

黃鳥曉來和雨啼 落花朵々委新泥

濕雲晴処半嶺頭 古寺依山麥隴青

今夕川上子入来、離杯相催シ、貞子終夜談話及徹夜、

六日

今朝森岡子入来、八字ヨリ咸通丸(藩ノ汽船)へ乗船、

十字発艦、天氣平穩、入夜航海ス、平戸瀬戸ヲ過ル、

已ニ日没ノ時也、

七日

天氣如昨日、今朝七字比過馬關田ノ浦ニ碇泊、三字比

解纜、海上平和也、

船中戯作

舟上偶然夢又長 白雲蒼海望茫茫

醉余戲喫香柚子 忽憶瓊江紅砂糖

得能子へ示一笑ヲ催、紅糖ノ事実大ニ有故也、

八日

航海今晚二字比着神戸、得能子同道上陸、訪税所旅館、

九日

郡山氏等暫時上陸有之、直ニ上船ニテ便船聞合候処、

今夕五時ヨリ米堅商船出帆ノ由、仍テ一日逗留、四字

得能同道到布引亭、榮女出相接、庭前桜梨花如雪戲、

賦与榮女、

東風未和播州灘 雲影離々春猶寒

閑苑桜桃三尺雪 清香馥郁玉欄干

直ニ乗船、五字開帆、此船火輪船ニテ不大動運速矣、

十日

終日航海、不出紀州領、

十一日

今夕十一字比横濱着港、

十二日

發足馬車ニテ通行、梅邸ニテ昼飯給へ、四字比東京旅宿へ帰着、吉井・田中・黒田嘉子(清綱)等入来、

十三日

就所勞不參、副島子・黒田子・得能子・内田子入来、

今夕川村子入来、

十四日

不參、黒田嘉子入来、昼后副島子へ立寄、晚景ヨリ岩

倉公へ參殿、種々御示談有之、尤ニ丸公御猶予願ノ復

命申上候、且見込御尋ニ付、主上御輔佐ノコト根本

タル旨云々、今日ハ天職ヲ御尽シ、随テ右大臣・大納

言其余諸省、各其職掌ヲ尽スヲ以テ云々申上候、

十五日

不參、條公へ參殿、岩倉公同様申上候、

一今夕得能入来一泊、

十六日

黒田子入来、午后ヨリ得能子同道汐留ヨリ乗船、向島

花見イタシ、大七楼へ登リ一日ノ遊興ヲ尽シ候、

十七日

今朝副島子へ立寄參朝イタシ候、於御前復命イタシ候、

三字退出、

一江東子入來、今夕副島子へ参り、山田淺右衛門參、刀看定共有之、

五七二ノ一

三月十五日、參議大久保利通鹿兒島藩ヨリ帰り、公ニ

謁シ藩情ヲ陳ス、

客年十二月利通ノ 内旨ヲ奉シテ東京ヲ發スルヤ、

木戸孝允ト大阪ニ会話シ、本年正月十五日山口藩ニ

過リ、毛利敬親父子ニ謁シ約スル所アリ、翌日海ニ

航シ、十九日鹿兒島ニ抵リ、島津久光ニ謁シ、召命

ヲ伝へ、東京ノ事情ヲ述へ、併せて其意見ヲ陳ス、

又藩庁要路桂右衛門等ノ諸士ニ対シ、政府ノ内情分

裂シ、天下ノ形勢一定セス、是時ニ方リ薩・長二老

侯 輦下ニ拜趨シ、二藩協同ノ力ヲ以テ、根本ヲ固

クスルニ非サレハ、 朝廷前途ノ事大ニ憂慮スヘキ

アルヲ論ス、諸士亦大ニ之ヲ然リトシ、共ニ屢久光

父子ニ説キ、速ニ召命ニ趨カンコトヲ勸ム、然レト

モ當時久光ノ意見 朝廷ト方針ヲ異ニシ、從テ藩政

改革ノ如キ、亦心ニ釈然タル能ハス、是ヲ以テ敢テ

利通等ノ議ヲ容レハ、疾ト称シテ上京猶予ノ事ヲ奏

請セシム、利通遂ニ強ユル能ハス、二月二十六日鹿

兒島ヲ發シ、長崎・神戸ヲ經、三月十二日東京ニ帰ル、此日公ノ第二來リ使命ヲ復ス、

【参照一】

大久保市藏様

大山格之助

要書御親拆

乍憚愚慮之件々左ニ奉至願候間、万々一御採用共相成候ハ、生涯之本意不過之候、

劣生事

三五年來天下變換之時ニ當リ、不容易重命を蒙り、四方江奔走、引続キ一昨春來之兵革中、伏見より大坂中國路奥羽迄出張、終て帰国、後重職を蒙り、既ニ一ケ年來奉職罷在候所、追々治定ニ至リ候得共、兎角治事局今日之事、大小共寺院同様之取扱向而已ニて、愉快ナル活道無之、悉死物之事件なれば、十分心志を練り候ても、有限職掌故、乍不届大海より小溝江入り候心持なれば、勞して功なしとも可申、亦退んとすれば西郷杯之鳥之間似スル杯と笑を受候外無之、浮憂此事ニ御座候、又徒に於して乍壯健日ヲ空スル之理無之、今哉天下至治と申内悉皆平鎮ニ至らず候得は、乍不及天下ニ突出、今一層之精業を尽し度、呉々至願ニ御座候、

仰希は今以鎮靜ニ不至、下民沸騰、間々小争等有之、尤苦情深キ所奥羽・北越、其他中・九辺之内衆人難洗之処ヲ治め、万民其所を得せしめ度至願ニ御座候間、若御没量被下、随分堪任と御見込も候ハ、如何様共御賢慮ヲ以、至極下官江御引居被下候様、只管奉至願候、尤

本官之処は勿論、素志ニ無御座候間、其段ハ宜敷御承知可被下候、此程より縷々參上之上、御直ニ御依頼之候賦処、既ニ明日 御発足候哉ニ拝承、乍恐以書取此段及至願候条、何卒御領掌之程奉願上候、恐々頓首、再拜、

二月廿二日

大山頓首

大久保君

尚以至願之趣、万一御採用をも被下候ハ、第一御藩之方御都合も御尽力被下度、此件々容易ニ六ヶ敷奉頼候、

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

【参照二】

廿三日^{○明治二}
年二月

中略

一知政所へ出席、

一今日糺明局・監察局被召建、

監察局總裁

大山格之介

糺明局總裁

橋口與一郎

へ被仰付候、監察・糺明奉行数名被仰付候^{○以下}

【参照三】

明治三年二月廿三日

一午二月二十三日方大久保市蔵上京イタシ候由、当月初方着ニテ候、何等ノ事カ不相知候得共、二ノ丸公へ上京ヲ進メ候ヨシ、シカレトモ合点不被致ヤウニ候、

【参照四】

^{○上}同日^{○二}五日、上利通ヲ召見シ、鹿兒島藩ニ派遣ヲ命

シ給フ、具視旨ヲ伝ヘテ曰ク、前キニ久光ヲ徵スト雖、病ヲ以テ未タ至ラス、国家前途ノ事、痛ク宸慮ヲ勞シ給フ、卿宜ク藩国ニ還リ、久光ヲ既諭シ、明春ヲ以テ必ス東上セシメ、且隆盛亦久光ニ随從シ、東上センコトニ尽力スヘシ、利通命ヲ奉ス、孝允・利通既ニ其藩国ニ還ル、是歳二月ニ至リ、山口藩内訌アリ、具視之ヲ聞キ、前ニ利通・孝允ト相謀ル所ノ事ヲ停格センコ

ト憂フ、既ニシテ山口藩鎮定ス、具視心始メテ安ソス、乃チ書ヲ利通ニ遣リテ機事ヲ言ヒ、且其帰京ヲ促ス、其文ニ曰ク、

春暖之砌益御機嫌能被為涉、御同然奉謹賀候、中宮御方ニモ御同様総て御平穩候間、御安心之様存候、随て其御父子卿ニモ弥御安泰御奉職欣然候、貴所ニモ御壯健御在滞ト珍重存候、少生ニモ無事勤仕候間、乍憚御放念可給候、

一先日備後殿御兄弟寛拜、其砌御伝言次第、尚亦小生書状御一見被下候事と存候、長州變動実ニ意外之義、於当府中も一時ハ種々風聞、附ては議論不少、彼是苦心候得共、速ニ鎮定先々安心候、則為

宣撫使徳大寺卿・土方中弁・吉井少弼等被差立候、二月十九日品海揚錠之所、於兵庫表最早戦争相濟、平定相成候由承知被致候得共、前議之通山口參向暫時之間滞在、当月五日六日比ニハ復命哉ノ旨ニ候、西郷氏早速馬關へ出張之由、不相替御進退感喜此事ニ候、

一東西京共先々無事、草莽云々風聞も候へ共、格別之事無之旨ニ候、貧民之所ハ何レも苦心罷在候得共、

凶年之末如何ントモ致し方無之候、併今日之所ニテハ強て之事も無之候、惣体表面之所ハ平穩候得共、内外議論多ク、殊に民^(民部、大憲)・藏物議不少、是計リハ頗懸念候、

一両国両老卿・西郷氏・足下・木戸等出府ノコト、屈指御待申居候、実ハ副嶋等申談シ、大事ハ何分御出府上ト相心得、日々小事而已運ヒ罷在候仕合、深く御推察、呉々早々御復命有之度候間、西郷氏出府如何ニ哉、素リ御骨折トハ存候得共、益天下人望之帰する所ニ候へハ、一度ハ是非廟堂上ニ御立ニ相成候様、血涙懇禱仕候、

一條公始百官何レも無事、今日迄ハ一向替り候事も無之候、先日ハ副嶋江御書一見、西京彈府止刑始末、長州隊卒混雑一件、至る所大事出来、御困り有之由、扱々氣毒令遠察候、止刑一件も此比刑官ニテ取調中ニ候、存外輕律哉ノ旨内々伝声候、

一各国耶蘇談判も格別之事無之、粗相濟申候、一足下ニハ尤無御助才存候得共、諸君子トハ先達て御出府之事勿論と存候、必ニ月中御沙汰候得共、何分兩所共前条之通り手聞取候事ニ付、三月上旬中ニハ

必々御出府と存候得共、能キ便宜有之候旨黒田ヨリ

承候ニ付、行違可相成哉と存候得共、一筆申入候、

一兵部省ノ事も元より御大事、勝も御催促相成申候、

黒田ニも尤足下同行帰府之事と存候、

一黒田嘉納御使一件、彼是苦心候得共、先々即時ハ御

申立之通相成候、乍去是ハ御出府ノ上厚ク御談し申

度存候、

右早々如此候也、

三月二日

具視

参議大久保殿

尚々副嶋不相替心配励勤候、併此比ハ少々持病氣

ニ候、尤当分之事ニ候也、

五七三 上野景範布哇国へ邦人引戻ノ為メ派遣慰

勞トシテ絹一匹下賜セラル

二月二十五日

先キニ上野景範介敬布哇国へ邦人引戻ノ為メ派遣中ノ勞ヲ

慰セラレ、絹一匹下賜セラル、

鹿兒島県士族

上野景範

敬介

弘化元年甲辰十一月生

○中略

同○明治二年九月

一御国人為召還、当官ヲ以布哇国へ為使節被差遣候事、

同月廿五日

一叙正七位、

同三庚午年二月廿五日

一帰朝、

一旧冬布哇国へ御国人引戻之為メ使節ニ被差遣候処、

都合能取捌帰国致候ニ付、御絹一匹下賜候事、

同月

一鉄道造営事務総理被仰付候事、○以下略ス、

五七四 諸官員並宮・華族ノ家士及諸藩士等、在留

地ニ係ル訴訟ニ付呼出方ヲ定ム

二月二十七日

朝廷ニテハ、諸官員並宮・華族ノ家士及諸藩士等、在留

地ニ係ル訴訟ニ付呼出方ヲ定ム、

第三百十 二月二十七日(布) (太政官)

諸官員並宮・華族之家士及諸藩士等、府藩臬管轄地ニ在留之向キ、其府藩臬支配下へ相係リ候公事出入有之節、以來其府藩臬ヨリ其主宰へ一応掛合之上、本人直ニ呼出シ取扱候間、為心得相達候事、

但諸官員奏任以上ハ家来、判任以下ハ本人呼出之事、

第三百十三 二月晦日(太政官)

過日公事出入ノ儀、御布告相成候処、御取消相成、別紙ノ通更ニ被 仰出候、仍テ申入候也、

(別紙)

諸官員並宮・華族ノ家士及諸藩士等、府藩臬管轄地ニ在留ノ向キ、其府藩臬支配下へ相係リ候公事出入有之節、以來其府藩臬ヨリ本人直ニ呼出取扱候間、為心得相達候事、

但諸官員奏任以上家来、判任以下本人呼出ノ事、

五七五 諸藩版籍調書ノ内石高・人口・兵員等ヲ至

急開申セシム

二月二十九日

諸藩版籍調書ノ内、石高・人口・兵員等ヲ至急開申セシム、

第三百十五 二月二十九日(兵部省) 諸藩

昨已十月中太政官へ届出相成候版籍調書之内、別紙之件々於當省至急入用候間、来月下浣ヲ限り雛形之通可届出候事、

(別紙)

一 現石高 幾万石

一 人口 幾万人

内士族 幾人

但男 幾人

女 幾人

卒族 幾人

但男 幾人

女 幾人

庶人 幾人

但男 幾人

女 幾人

一 当今常備兵員

步兵 幾隊

砲兵 幾隊

騎兵 幾隊

大砲何斤 幾挺

但彈藥幾發添

小銃何名 幾挺

但彈藥幾發添

月 何藩

五七六 宮・華族等ノ名目ヲ以テ金銀ヲ貸附スル

者ヲ申禁ス

二月晦日

宮・華族等ノ名目ヲ以テ金銀ヲ貸附スル者ヲ申禁ス、

第百五十一 二月晦日(布)(太政官)

宮・華族其他名目ヲ以、金銀貸附候儀不相成旨、兼テ

御布告之趣モ有之候処、今以テ内密取扱候向モ有之哉

ニ相聞へ、以之外之事ニ候、向後右様之者於有之ハ、

糺之上屹度可被及 御沙汰候条、心得違無之様可致旨、

更ニ被 仰出候事、

五七七 高知藩知事山内豊範、鹿兒島ニ来リ三策

ヲ立テ、天朝ヲ輔翼センコトヲ發表ス

二月三十日

高知藩知事山内豊範鹿兒島ニ来リ、三策ヲ立テ、薩・長・

土三藩ノ盟約ヲナシ、共ニ天朝ヲ輔翼センコトヲ發表ス、

五七七ノ一 明治三年庚午二月二十八日、豊範ハ大参事小南五郎右

衛門・少参事谷守部・大属弘田正助等上下四十余人ヲ

從へ、軍艦胡蝶丸ニ搭シテ、海路高知ヲ発シ、鹿兒島

ニ航ス、同二十九日豊範上陸、鹿兒島藩知事嶋津忠義

ニ会シ、国事ニ就テ謀ル所アリ、越エテ三月二日高知

ニ帰着ス、豊範鹿兒島藩ニ提議スル所ノ文書口演要領

ハ左ノ如シ、

此度卒然罷出候儀ハ余之儀ニテモ無御座、天下之事ニ

御座候、弊藩已ニ三ツノ拙策ヲ相立居申候処、今日ノ

勢其下策ニ出候外有御座間敷ト愚考仕候、尊藩へ御依

頼仕御示教相願申度、自今更ニ御同盟仕、天朝ヲ奉輔

翼、上策ノ地位ニ相連度意中ニ御座候、万事無御隔意

被仰聞度奉存候、

一大ニ朝權ヲ張テ、天下ヲシテ威服セシメ、仮令大國強

藩ト雖モ、其議ノ出ル所ヲ不知カ如クナラシメン、是

策ノ上也、

一天下内外ノ病日ヲ逐テ不可救ノ勢アリ、外ニ不破時ハ必ス内ニ破ルヘシ、輔相ノ識見ヲ以テ、寧外ヲ破リ内ヲ整ルニ不如ノ大決断ヲ行ン、是策ノ中也、

一薩・長・土三藩盟約ヲ堅シ、私ヲ去リ、公ニ就キ、朝廷ヲ輔翼シ、國脈ヲ維持ス、是策ノ下也、

又

中興之事不可止矣、其事ノ成否亦予メ不可議矣、唯至誠所尽アツテ、而後始テ其機如何ヲ云フヘキナリ、

王政復古、朝權今日ノ如ニ至ラシメ、名義灼然、大體ノ存スルモノ全ク尊藩ノ力ニ依ル、是其尊藩既ニ尽ス所アツテ、大政漸ク振フナリ、然ニ大政漸ク振テ其実未振モノアリ、列藩漸ク服シテ猶未服モノアリ、或ハ

封建ヲ唱ヘ、或ハ郡県ヲ難ス、或ハ邪宗ノ病アリ、或ハ北門ノ患アリ、喋々囁々、遂ニ紛然浮浪無頼ノ徒其間ニ遊説シ、廟議亦之力為ニ動揺ノ程、或ハ保元平治ノ昔ニ至ン、是豈可不察哉、因テ想フ、尊藩尽ス所已尽セリト雖未盡モノアラン欤、弊藩亦随テ責ナシトセス、若尊藩已ニ尽ス所ヲ以テ足レリトセハ、敢テ論スル所ニ非ス、若既ニ尽シテ猶未タ尽サル所アリトセ

ハ、請フ、更ニ尽スヘキノ道ヲ論セン、唯弊藩微力驥

尾ニ附テ其志ヲ伸ン耳、今日尽ス所アルヲ知テ、傍觀機ヲ得テ動カント欲スル者、朝權已ニ立ツ、其非ヲ鳴サス、自ラ其分ヲ守リ、斃レテ後止ント欲スル者ト、

正邪固リ弁ヲ待タザルナリ、病已ニ心血ヲ破リ、葉汁不可下ノ日ニ至リ、慷慨死ヲ俟ハ、万不得止ノ道ナリ、

弊藩力不足ト雖モ、啄ヲ天下ニ容ル已ニ久シ、其尽スヘキハ則チ尽シ、其救フヘキハ則チ救フ、故ニ嚮ニ三策ヲ立テ、上中下ヲ分ツ、顧フニ今日ノ事不得止シテ、

其下策ヨリ始ム、以テ尊藩ノ垂示ヲ仰ク、翼クハ同心協力シ、隗ヨリ始メハ他日有志ノ藩益興起スル所アラシ、其尽スヘキヲ尽シテ、敢テ遺憾莫ラシメ、而後事ノ成否其機如何ヲ云フヘキ耳、

明治三庚午二月

山内少将

右ニ対スル鹿兒島藩知事ノ返答覺書

一三件之御建策、専ラ天下ノ御為深切之御計謀御忠誠ニ付テハ、感服之至ニ奉存候、第一・第二ノ策ハ、既ニ朝廷御政体ニモ致確定居候事ニテ、戊辰三月御誓文ニ基キ、広ク天下ノ公論ニ決スヘキ不容易事件、唯今御

同意ト申ニハ難至、第三案固ヨリ御同意ノ事ニ候条、
自今以後猶皇國之御為ニ、御互ニ戮力斡旋可仕候、万
事無隔意可申候旨、御懇諭此段御答申上候略下

五七七ノ一

寺師宗道日記二月

同世日 雨天

(前文略カ)

一昨日方土佐藩知事蒸氣船より鹿府鹿兒島ヲ指スへ御出相成候

由、細事不知、集成館江は御出之由、今朝蒸氣船式艘
相見得候由、定て彼之船ならんと噂也、上下人数四拾
人計之由也、客屋へ御出相成候由、

五七七ノ三

道島正亮日記

三年二月廿四日方土州ノ太守イマタ若輩ニテ候ヨシ英船ヨリ被差越

候由、是モ子細不相分候得共、

太守公へ上京ヲ進メ、三四ヶ国イヒヤハセ、上京ノ賦
リヤニ候、慥成事ハ不相知候、

五七八 藩庁軍夫使役ヲ三町人及諸所中宿ノ家来

下人ヨリ召募スルコトヲ達ス

是月(二月)

藩庁、軍夫使役ヲ三町人及諸所中宿ノ家来・下人ヨリ召
募スルコトヲ達ス、

一出軍之節是迄在夫召連來候得共、當時諸在疲勞之折柄、

苦情も可有之候付、以來 御城下大隊被差出候節は、

御当地三町人共其外諸所中宿家来・下人等を以、用弁

申付候条、軍務局計ニテ渡世等不差支壯健之者相撰ひ、

兼て予備夫卒組立置、右之内より可召建候、万一右夫

数ニ不引足節は、在夫より被召付候、右ニ付ては、主

取夫相立置、平日も嚴重取締可申付候、此旨民事總裁

並軍務總裁江申渡、向々江も可申渡候、

明治三年二月

知政所

五七九 藩庁中郷ヲ東郷ニ合併ス

是月(二月)

藩庁ニテハ中郷ヲ東郷ニ合併セシム、

一中郷之儀、全体東郷之内ニテ中古分郷相成居候処、家

部人体も相少、常備兵編制も難相整候付、以前之通東

郷江合併被仰付候旨、被 仰達候条、地頭江申渡、可

承向江も可申渡候、

明治三年二月

知政所

五八〇 藩庁銅錢ノ輸出ヲ禁制シ其取締方ヲ嚴達

ス

是月(二月)

藩庁ニテハ、銅錢ノ輸出ヲ禁制シ、其取締方ヲ嚴達ス、一銅錢他邦江差出候儀不相成、米穀類其外御領内不足之品他領より買入、代銅錢引渡候分は他国出御免被仰付候条、夫迄も聊緩之儀無之様と之趣共、去ル子丑年細々被仰渡趣有之候処、至此比ニ銅錢海陸より他領江抜出候哉ニ相聞得、御藩内銅錢扠底相成候ては、一統不弁利は勿論、第一今日之活計令難渋候間、心得違無之様、局頭又は主人等より猶又可被申渡候、左候て御当地之儀は、生産奉行並下町津畑御番所詰候事・諸色方掛候事、外城之儀は地頭並同副役、且御番所有之郷々は詰候事等より嚴重取締いたし、万一無免許銅錢拔出候者見当候ハ、右品取揚之上届申出候ハ、其者江被成下、致拔錢候者は御沙汰ニ可被及、尤取締向等ニ

付、尔後届申出候儀は、其向々より会計局江可被申出

候事、

明治三年二月

会計局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

二月

知政所

五八一 藩庁両丸奥口番所ヲ内務局口番所ト改称

ス

是月(二月)

藩庁ニテハ、両御丸奥口番所ヲ内務局口番所ト改称ス、一両御丸奥口番所之儀、以来内務局口番所と唱被相替候条、向々江可申渡候、

明治三年二月

知政所

五八二 藩庁米穀輸出ヲ禁制シ其取締方ヲ達ス

是月(二月)

藩庁米穀輸出ヲ禁制シ、其取締方ヲ達ス、一拔米取締之儀は、追々仰渡相成通候処、当年は諸国一

同別て米無多事折柄、直成之儀、他藩ニ引競候得は、過分之行違ニ付、抜米之懸念不少候付、一漕取締行届候様可心懸候、依ては抜米見当次第形行申出候者江は、為褒美其石数都て可被下候条、見当候者は、早速津畑番所詰検事並地頭副役、又ハ其郷番所詰検事江可申出候事、

右之通御当地は勿論、外城諸所津畑江札相掛候様被仰付度候事、

二月

會計局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

明治三年二月

知政所

五八三 藩庁大工頭ノ職ニ就クモノハ、一代軍艦

方准士等ヲ命スルコトヲ達ス

是月(二月)

藩庁、大工頭ノ職ニ就クモノハ、一代軍艦方准士等ヲ命セラル、コトヲ達ス、

一、一等大工頭

右士族以下江、右勤方被仰付候節は、一代軍艦方附士

被仰付候、

一、二等大工頭 一、三等大工頭

右附士以下之者江、右勤被仰付候節は、一代軍艦方附士被仰付候、

一、一等より三等迄大工頭之儀、御軍艦乗付ニ限り被相定、其余は都て被廢候、

但是迄一等より三等迄大工頭にて、生産方並商船江

相勤來候者共、尚又吟味之上一等より三等迄等級

ニ応シ大工頭助申付候、

右之通御軍艦乗付大工頭等、応等級御取扱被仰付候条、

軍務局江申渡、可承向江も可申渡候、

二月

知政所

五八四 藩庁島津廣兼ノ軍務総裁ヲ解ク

是月(二月)

藩庁ニテハ、諏訪廣兼ノ軍務総裁ヲ解ク、

諏訪廣兼

軍務局総裁ヲ御免被仰付候、可承向々へ可申達候、

二月

知政所

明治3年(1870)

〔稿本表紙〕

明治三年
三月 忠義公史料稿本(初稿)三

〔稿本にて補正〕

五八五 佐多ノ岬ニ仮燈明台ヲ設置ス

三月朔日

朝廷ニテハ、佐多ノ岬ニ仮燈明台ヲ設置ス、

第百六十五 三月朔日

航海者ヘノ布告

一九州極南ノ地佐多ノ岬ヘ、一個ノ仮燈明ヲ設置セシコ

トヲ茲ニ布告ス、

一此地ヘ永久ノ本燈明ヲ設置セラル、マテハ、此仮燈明

ヲ、毎夜日没ヨリ日出ニ至ルマテ点照ス、

一佐多ノ岬ハ北緯三十度五十九分ノ地ニシテ、グリーンニ
ツチノ偏東百三十度四十五分ノ地ニ当レリ、

一此燈明ハ海面ヲ抜クコト二百九十フート凡我ニ十九丈ニシテ、
其光線十八マイル凡我八里十五丁四十五間ニ達ス、

一此燈明ハ北十五度、西ノ方位並北七十度、東ノ方位ヘ
ハ其光ヲ達セスシテ、二百七十五度ニ海ノ方ヲ輝照ス、
右方位聊相違無シ、

千八百七十年四月一日

於横濱燈明台製造局

日本政府建築方

(R. Henry Brunton)

アール・ヘンリー・ブランドン

【参照一】

コノ日東京ニテハ、燈明台建造ノ為メ、英人ブランドン
来月中旬比、ソンプライス船ニテ佐多岬ニ到着スヘキニ
ヨリ、諸事便宜ヲ与フベキヲ達セラル(御国元往復留)
明治二年五月二日ノ年表ニ採録、

【参照二】

午正月廿五日

弁官

外務省

御中

庚午正月

在神奈川

別紙神奈川県より懸合之趣に付ては、不開港場へ外国

權知事

船相廻候義は、公用之外は不相成義之処、燈明台用器

大参事

械差廻し方、本より我公用に有之、遅々いたし候ては

外務省

差支候而已ニ無之、御不益も不少事ニ付、軍艦へ託し

御中

打廻し候義は別段之訳ニ付、燈明掛へ御差許相成候様

いたし度、且御沙汰済之上は、早々鹿兒島藩へ御達有

五八六 留守次官兼京都府權知事岩下方平ヲ罷ム

之度、此段相伺申候、以上、

三月二日

庚午正月廿五日

指令欠

留守次官兼京都府權知事岩下方平左二・左次右衛門ヲ罷ム、
鹿兒島県士族

【参照三】

今般薩州佐田岬(多)へ燈明台御取建ニ付、右必用鉄蝶番・

岩下方平

銚之類至急差送申度、然るに御国地西南隅之事故、幸

左	次右衛門
二	

之船便も差当り無之、去迎も不差遣候ては組旁礮と差

○上略

支候趣、其義ニ付フラントンへ英国公使申聞候ニは、

同明二年己巳五月十五日

英軍艦便にて届方いたし候ハ、容易ニ可有之、尤上乘

一是迄ノ職務被免、留守次官被仰付候事、

士官懸之内卷人被差遣可然旨談之由、フラントンより

○中略

燈明台掛江申聞候趣、同懸りより申立候、右御軍艦ニ

同三年庚午正月八日全廿六日受

候へハ、不開港船繋り之義ニ付、差支有無一応及御問

一兼任京都府權知事、

合候間、否哉至急御報有之度、此段申入候也、

同年二月八日

一御用有之、至急東京へ可罷出事、

同年三月十二日

一依願免本官並兼官、

○下略

留守次官

二年五月十五日任、同七月八日罷官、同月廿七日東任 岩下方平鹿兒島士左次右衛門 三年三月二日罷、

【参照】

御鑑札壹枚

右ハ九門為通行岩下左二へ御渡被置候処、今般免職被

仰付候付、返上仕候、以上、

鹿兒島藩

四月八日

小野半左衛門

留守官

御伝達所

【参照】

九門為通行岩下左二へ御渡被置候御鑑札ノ儀、同人取調候処、先達テ惣御引替ノ節、壹枚御渡相成候儀、相違無御座段申出候間、此段申上候、以上、

鹿兒島藩

四月十日

小野半左衛門

留守官

御伝達所

五八七 銀台二分金引替期限後レノ分ヲシテ急ニ

引替方ヲ達ス

三月二日

朝廷ニテハ、銀台二分金引替期限後レノ分ヲシテ、急ニ引替方ヲ布達ス、

○三月二日辰戌

御布告写

先般悪金引替之道被為立、銀台二分金之分ハ、百兩ニ付先金札三拾兩ニ御引替被成下、追て総員數銘々持分巨細御取調之上、猶御詮議之品も可有之、自然蓄置又は姦曲之所業於有之ハ、当人ハ勿論、地方官之可為落度候条、去巳年限引替候様、同年十月中被 仰出候処、僻遠之地御布令遲達之向ハ、未タ引替残りも有之、其他銘々持分申立、不行届之向も不少候ニ付、格別之訳を以て、期限後れ之分モ前同様御引替可相成条得其意、

巳十月御布令之趣を以て、早々引替濟相成候様、府藩
県ニ於て可取計事、

聽許セラル、

別紙四通、於東京被 仰渡候段申来候条、此旨向々江
致通達、諸郷江も可申渡旨、地頭江可申渡候、

五八八 諸藩蔵屋敷出張所等総テ其地方官庁ノ指

揮ニ従ハシム

三月

知政所

(外二通ハ二月ノ達ニ付略ス)

三月二日

島津久光

島津忠義

各地諸藩蔵屋敷出張所等、総テ其地方官庁ノ指揮ニ従ハ
シム、

御賞典を以被
仰出候

【第百六十七】三月二日 (太政官)

一従来諸藩便利ヲ以テ、各地へ蔵屋敷或ハ出張所等構置

御位階御辞退、御高並御金御返献之儀、別紙式通之通
御願立相成候処、別紙三通之通被仰渡候段申来候条、

候処、藩ニ寄其地方官庁へ対シ、不都合之応接ニ及候
向モ有之哉ニ相聞へ候、総テ管内之儀ハ、其地方官庁

此旨奉承知候様向々江可申渡候、

三月

知政所

之指揮ニ従ヒ、心得違無之様可致候事、

五八九 島津久光・忠義官位辞退並賞典ノ金祿返

上ノ件ヲ聽許ス

御賞典ニ付従三位

宣下候処、数度之辞退無余儀被

思食、願之通被

聞召届候事、

三月四日

先キニ久光・忠義両公、官位辞退並賞典ノ金祿返上ノ件、

〔頭註〕以下朱書ハ内閣記録藏本「公文録鹿兒島藩伺」ニ依リ訂正
明治三年三月四日
〔朱〕年月日削除

島津鹿兒島藩知事

〔朱〕
「庚午」三月「四日」
〔朱で削除〕
「太政官」

〔頭註朱〕「以下朱書ハ内閣記録課蔵本「公文録鹿兒島藩伺」ニ依リ訂正」
明治三年三月四日
〔朱で年月日削除〕
島津從二位

御賞典ニ付從二位

宣下候処、數度之辭退無余儀被

思食、願之通被 聞召届候事、

〔朱〕
「庚午」三月「四日」
〔朱で削除〕
「太政官」

〔頭註朱〕「以下朱書ハ内閣記録課蔵本「公文録鹿兒島藩伺」ニ依リ訂正」
明治三年三月四日
〔朱で年月日削除〕
島津從三位

島津鹿兒島藩知事

国家多事之後御用度之欠乏之苦慮し、金穀献納致度申

立之趣、全ク至誠之所致神妙之至被

思食候、依之言上之通被 聞食届候事、

〔朱〕
「庚午」三月「四日」
〔朱で削除〕
「太政官」

〔朱〕
「申立書欠」

〔参照〕

前略、兼テ御内談一件過日申入候、二日御尋之上御沙汰可相成之処、公用人一応引取返答之趣ニテ、同日夕

方更ニ返答ニ付、今日之御運ヒニ相成候、尤始終ハ兼テ申述候通ニ付、御安心之様ト存候、大久保氏へ之書状其藩邸へ頼候処、去月十五日発足無相違旨、御布告之通り候ハ、山口ニテ隙取候哉ト存候ニ付、御序ニ御返シ可給候、將此間出会タル鹿兒島藩士今井某（市兵衛）帰国迄一応出度申候、明早朝入来之様乍御面働御伝頼申候、早々如此候也、

三月四日 岩倉大納言

黒田嘉納殿

不勞貴答

五九〇 藩庁諸座付屋敷払下等ノ処分方ヲ達ス

三月四日

藩庁ニテ、民事局ノ議ニ賛同シ、諸座付屋敷払下等ノ処分方ヲ達ス、

一諸座付屋敷之儀、御物屋敷ニテ夫々御借地被仰付置候処、右之内士族居住いたし候屋敷多々有之、是迄御物明屋敷之場ニテ被召置候処、追々居形之俵代銀上納申受被仰付度願出、第一名実ニ不叶儀御座候間、右体之

屋敷は此涯返屋敷ニ不及、居屋敷ニ申受被仰付度、左候て自然差支之儀有之候ハ、追々御取揚屋敷等有之節々、返屋敷被成下候様被仰渡度、此段申出候、

午三月

民事局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

三月四日

知政所

五九一 藩庁荘内郷ノ内五箇村ノ士族ヲ梶山郷ニ

編入ス

三月七日

藩庁ニテハ、荘内郷ノ内五箇村ノ士族ヲ梶山郷ニ編入セシム、

下荘内之内

一安久村

一後久村

一北田部村

一鷺巢村

一寺柱村

右五ヶ村之儀、御吟味之訳有之、士族之儀は兼て梶山

士族被仰付旨被

仰達候条、民事總裁地頭江申渡、可承向江も可申渡候、

三月七日

知政所

五九二 藩庁桐野利秋へ大隊長ヲ命ス

三月八日

藩庁ニテハ、桐野利秋中村半次郎へ大隊長ヲ命ス、

一大隊長

中村半次郎

右之通被 仰付候条、向々江可申渡候、

三月八日

知政所

五九三 長州藩士古谷新作外三人ヲ薩藩ニ遣シ砲

術ヲ練習セシム

三月七日

長州藩士古谷新作外三人ヲ薩藩ニ遣シ、砲術ヲ練習セシム、

○上七日明治三年三月、曩ニ騷擾ノ際帰国セシ四人中古谷新作・

三浦又右衛門・高田真作・嶋田範次郎ニ、再ビ鹿児島

ニ赴キ砲術練習ヲ命シ云々○以下略

五九四 諸藩守衛・取締兵員並隊長姓名等ヲ開申

セシム

三月九日

朝廷ニテハ、諸藩守衛・御取締兵員並隊長姓名等ヲ開申セシム、

〔第百八十六〕三月九日(兵部省)

諸藩

諸門諸見附守衛並市中区別取締等相勸居候藩々ハ、守衛・取締両条ニ書分ケ、兵員並隊長姓名・兵式等委細ニ相認メ、来ル十二日限り当省江可申出候、此段相達候事、

但守衛不相勸候共、当所滞在之兵有之藩々ハ、本文ニ准シ可申出、滞在無之候ハ、其段モ可申出候事、

五九五 諸官員・宮・華族邸宅、府県出張所・藩邸・

社寺止宿人姓名ヲ京都府ニ上申セシム

三月九日

朝廷ニテハ、諸官員・宮・華族邸宅、府県出張所・藩邸・社寺止宿人姓名等ヲ京都府ニ開申セシム、

〔第百八十七〕三月九日(留守官)

一諸官員・宮・華族以下邸宅並府県出張所・藩邸・社家・寺院等へ、他所ヨリ止宿人有之節ハ、来去共逐一当府へ可届出事、

但家来末々迄モ同様其主人々々ヨリ可届出事、

一諸官員・宮・華族以下社寺家来末々迄、姓名・居所等巨細書記シ、当府へ可届出事、

一府県出張所並藩邸詰合之者家来末々迄、姓名等書記シ、当府へ可届出事、

三月九日

京都府

右之通京都府ヨリ申出候間、此旨相達候事、

【参照】

〔第百六十五〕九月五日(留守官)

諸官員・宮・華族以下家来末々ニ至ル迄、姓名・居所等巨細書記シ、京都府へ可届出旨先般相達置候处、自今不及其儀候事、

但市中住居之向宿所届ハ、從來之通同府へ可差出事、

五九六 島津忠義使者ヲ遣シ三條實美並岩倉具視

ニ物ヲ献ス

三月十一日

忠義公使者二人ヲ遣ハシ、三條輔相並ニ岩倉大納言ニ物

ヲ献ス、

五九六ノ一

〔朱〕二軸物桐白箱入、羽二重袷風呂敷へ包

一軸物 岳飛石摺 一

〔朱〕二鯛前条同斬

一鯛

一折

三條輔相様

右江御口上、愈御勇健被成御座珍重御儀奉存候、旧冬

御当府滞在中ハ、万端御丁寧被成下忝奉存候、御礼以

使者申上候付、目録之通進上之仕候、

三月十一日

右御使隈元敬一郎相動候事、

五九六ノ二

一御刀

一腰

〔朱〕二御刀、御短刀共桐白木箱入、羽二重袷黄袷袋入、鞘書付

一御短刀 西蓮 一腰

〔朱〕二鯛三枚居ヲ二枚、白木横台へ載ルナリ

一鯛

一折

岩倉大納言様

右へ御口上愈御勇健被成御座、珍重御儀奉存候、旧冬

御当府滞在中ハ、万端御丁寧被成下、其上出立前ニハ

被召寄、種々御饗応重畳忝奉存候、御礼以使者申上候

付、目録之通進上之仕候、

三月十一日

右御使益山八右衛門相動候処、御取次曰井民治ニ

テ候、

五九七 鹿兒島藩兵交代ニ付、外国船ヲ以歸藩セ

シムヘキヲ沙汰ス

三月十三日

鹿兒島藩兵交代ニ付、外国船ヲ以テ歸藩セシムヘキ御沙

汰書兵部省ニ達ス、依テ廿七日大山巖七左ノ・野津鎮雄七左ノ

一大隊東京着、同廿八日種田左門ノ一大隊出發、四月二

日歸着ス、

五九七ノ一

○三月十三日己卯

御沙汰書写

兵部省

鹿兒島藩徵兵交代ニ付、外国船ヲ以テ差送可申事、

五九七ノ二

一此節東京江為交代被差出候ニ大隊並砲二座之大隊初諸

役々迄も、一統明後十五日四ツ時、於 御対面所御盃

頂戴被仰付候条、大隊長江申渡、向々江も可申渡候、

但附士以下之儀は於軍務局御酒頂戴被仰付候、

三月十三日

知政所

五九七ノ三
一一番・四番大隊

一三番・四番砲隊

右は当分東京江相詰居候兵隊為交代、近々船都合次第被差出候条、軍務局江申渡、可承向江も可申渡候、

三月

知政所

五九七ノ四
平野不二比古履歴

略
○上

同年明治三年三月、徴兵ヲ解カレ帰藩ヲ命セラレ、同十四

日東京ヲ出發シ、神奈川ヨリ乗船シ、同十五日横濱ヲ

抜錨、同十九日鹿兒島ニ帰ル下略

五九七ノ五

吉井三峰日記
友夷

同月明治三年三月十二日

篠原・池上等帰国ニ付、饑別ス、今日大久保參議帰府

ニ付訪フ、鹿兒島ノ事情具ニ聞ク、黒田先ニ帰ル、

同月廿六日

納言・參議等右大臣殿ノ第二會議シ、帰途岩公・徳公・

副島・大久保等入来、囲碁、交代ノ兵隊御国ヨリ着府、

同月廿七日

黒田少弼・内田少弁任官、

大山弥介・野津一大隊着府、

同月廿八日

彈例一条ニ付、謹慎ノ御達ヲ被ル、

種子田左門一大隊、今日出立帰国、

五九七ノ六

大久保利通日記

廿七日月三

一今朝九字參朝、

御評議如例、今日前件民部彈台ノ人員へ被仰付候、明

日薩兵隊(御親兵交代)就發足、事情申合候為、退出ヨ

リ御邸江參、吉井・黒田・川村一同、種子田子・村田(左門)
(三介)

子・大野子等へ御元報知大略申合候、七時帰、今夜

(餘感)
西郷へ一封相認、

廿八日以下略ス

五九七ノ七

寺師宗道日記

三月晦日

略上 東京三番大隊は廿八日舟江乗付之由也、然は朔日

二日方着相成候賦之由略ス以下

四月二日

今曉四ツ過比砲声相凶相聞得、東京下り船着ス、則孫一郎始子共等迎て下町津畑江出ル、頓て正右衛門・英之丞帰着候、皆一同元氣也、

五九七ノ八

午三月十一日

外務省

御中

徴兵交代被

仰付、就ては鹿兒島藩まで外国船差廻し方、兵部省申立之儀、全御用辺之義ニ付、御聞届可被成と存候也、

庚午三月十一日

兵部申立書欠、

午三月十二日

弁官

御中

外務省

徴兵交代被 仰付候、就ては鹿兒島藩迄外国船差廻し

方は、全ク御用辺之儀ニ付、聞届可然旨御申越之趣承知致し候、然ル処右ニては明了不致候ニ付、若シ御聞届可相成義ニも候ハ、其段兵部省へ御沙汰相成候上、当省へも御達有之様致し度候也、

庚午三月十二日

五九七ノ九

兵部省

鹿兒島藩徴兵交代ニ付、外国船ヲ以テ差送可申事、

三月

太政官

午三月十三日

外務省

別紙之通兵部省江御達ニ相成候条、於其省取計可申事、

三月

太政官

五九八 藩庁ヨリ慰問使トシテ野津平左衛門・町

田七左衛門ヲ山口藩ニ遣ス

三月十四日

藩庁ヨリ慰問使トシテ、野津平左衛門・町田七左衛門ノ
兩人ヲ山口藩ニ遣ス、

十四日^{三月}、公鹿兒島藩ノ慰問使野津平左衛門・町田七
左衛門ヲ延見ス^{略下}

五九九 黒田清隆ヲ從五位ニ叙ス

三月十四日

黒田清隆^{了介}ヲ從五位ニ叙ス、

開拓使士族元鹿兒島

黒田源清隆

了介

○中略

同年^{明治二年}十一月廿三日

一任兵部大丞、

同三庚午年三月十四日

一叙從五位、

○以下略ス

六〇〇 川村純義ヲ從五位ニ叙ス

三月十四日

川村純義^{了介}ヲ從五位ニ叙ス、

鹿兒島県士族

川村純義

了介

天保十一年庚子正月生

明治二年己巳十一月廿三日

一任兵部大丞、

同三年庚午正月廿日

一伺ノ通謹慎被仰付候事、

同月廿一日

一謹慎被免候事、

同年三月十四日

一叙從五位、

○以下略ス

六〇一 集議院開院ニ付キ、諸藩議員ヲ四月ニ上

京セシム

三月十四日

集議院開院ニ付、諸藩議員ヲシテ四月ニ上京セシム、

【第百九十九】三月十四日（布）（太政官）

一 集議院開院被 仰出候ニ付、諸藩議員來ル四月中可能

出事、

【参照】

三月十四日（弁官口達）

一 昨年中差出候議員之内ニハ、藩政ニ預カラサル者、

或ハ東京定住藩庁之事務ヲ取扱サル者等有之趣、右

ハ藩論御採聴之御趣意貫徹不致、不都合之事ニ候、

此度議院御開相成候ニ付テハ、兼テ被 仰出候通、

藩政向篤ト相心得候者ヲ撰挙シ、藩論洞徹、実地適

用之議事相立候様厚相心得可申候事、

【第百八十二】九月十日（沙）（太政官） 集議院

閉院被 仰出候事、

【第百八十三】九月十日（沙）（太政官） 議員

今般藩制被 仰出候ニ付テハ、一同帰藩被 仰付候事、

但藩制至重之事ニ付、本文之通ニ候条、前日御下問

度量之儀ハ、帰藩之上以書面可申上事、

六〇二 本藩士前田十郎左衛門並徳島藩士伊月一

郎ニ、航海見習ノ為英國軍艦乗組ヲ命ス

三月十四日

本藩士前田十郎左衛門、徳島藩士伊月一郎ト共ニ航海見

習ノ為メ、英國水師提督（Whitman）ノ軍艦ニ乗組ヲ命

セラル、

六〇二ノ一
〇三月十四日 辰庚

御沙汰書写

兵部省

鹿兒島藩前田十郎左衛門・徳島藩伊月一郎儀、航海見

習之為メ、英國水師提督軍艦へ、乗組被 仰付候条、

此旨可相達事、

鹿兒島藩

其藩士前田十郎左衛門儀、別紙之通被 仰付候条、此

旨相達候事、

徳島藩

其藩士伊月一郎儀、別紙之通被 仰付候条、此旨相達

候事、

六〇二ノ一
○三月十五日
巳辛

英吉利水師提督へ 勅語

此度地球周覽ノ国命ヲ奉シ、遠洋渡来、今日面会ニ及ヒ、其壯健無恙ヲ悦ヒ、併テ盛業偉功ヲ立ルヲ祝ス、殊ニ我国海軍生徒ニ名其艦へ乗組、航海見習ノ事ヲ託ス、許諾ノ段満足セリ、

同公使へ 勅語

貴国帝王安全ニシテ、公使モ亦壯健、無恙職ニ在ル、深ク喜悅スル所ナリ、

【参照一】

吉井三峰日記
友実

同月明治三十六日

(美則) (伊達宗城) (松平慶永) (博野)
徳大寺殿・宇和島公・越前春嶽公・宮内卿萬里小路殿

等ト英国軍艦ヲ訪問ス、端舟調練等号令甚厳ニシテ感心ス、

十七日以下略ス

【参照二】

巳十一月四日

弁官

御中

外務省

別紙之通、英国公使より書簡差出候ニ付、即写ヲ以此段御届申候、

十一月四日

以手紙致啓上候、世界一同^{周カ}之為、強艦六七艘発航致候処、右船来年第二月下旬ニは、日本江到着可致積ニ有之候、右は日本人軍艦運用等之件ニ相学候ニは、最好機会ニ可有之、右船々日本ニ到着せば已ニ式万里之航海を経候事ニ有之候、尤軍艦之儀は風雨遠近を論せず、常ニ海上ニ浮ひ在れハ、強ち蒸氣耳を頼むへからず、帆前ニても航海致し候義ニ有之候、日本船ハ纔カ蝦夷地迄航するとも、大ニ困難之様見受申候、右ハ全く日本人航海之術を尊まさるより起り候儀、明白ニ有之候、然るに日本は環海之国なれハ、航海之学ハ最肝要なるを以て、貴国政府にて、日本人ニ其術を練磨せしむる事專一なるを御悟り相成候様、希望此事ニ御座候、然りと雖も航海之術ハ、留心して引続き稽古致さざれば、船中之件々並航海術共全備難相成儀ニ御座候、右英国

政府之命ニ依リ可得貴意如斯御座候、以上、

英国全權公使

千八百六十九年十一月九日 ハルリー・パークス

澤從三位清原宣嘉

閣下

弁官

御中

外務省申立書無之二付此ニ編ス、

英国軍艦へ海軍生徒為乗組、航海見習之事被 仰出候
処、右は明後十五日英水師提督へ勅諭之筈ニ付、今日
中ニ右人名御調出可有之候也、

三月十三日

弁官

兵部省

鹿兒島士族工藤十郎儀、洋行致シ度旨ニテ、同藩公務
人願ニ付、外務省ヨリ申立之趣モ有之、委細被 仰付
候趣承知致候、就ては得と鹿兒島藩其筋之者へ相尋申
候処、如何様十郎儀ハ先年モ三ヶ年程亞国被罷越居候
得共、差て学術上達モ不致ニ付、折角朝廷ヨリ御達シ
相成候人、空敷御失費相成候ては、不相濟ニ付、此者
儀ハ御止メニテ、当時海軍所へ入塾罷在候鹿兒島藩前
田十郎左衛門ト申者、御遣シ相成度候、同人義は是迄
開成所ニ入塾書生中一等之者ニテ、未成年モ二十内外、
頗ル見込ニ有之人物ニ御座候、尚鹿兒島藩其筋之人江
も聞合候処、同人義ナレハ上達ハ受合可申上旨申出も
仕、旁之儀ニ御座候間、是非此者御遣シ相成候様仕度、
此段御尋ニ付、御答旁申進候也、

英国軍艦江生徒乗組人撰差出候様致承知候、右は過刻
人名御達申上候条、此段御答申進候也、

三月十三日

兵部省

弁官

御中

昨日申入候測量英艦乗組之儀、再応申入候趣至急御答
有之度候也、

三月十四日

弁官

兵部省

二月

兵部省

御中

別紙姓名之儀、昨日弁官御中江増田少丞ヨリ差出候処、御戻ニ相成候ニ付、尚又岩倉公江差出候処、御留守ニ付、御同断応接方原保太郎江支出置候、仍テ御答申進候也、

三月十四日

兵部省

弁官

御中

別紙

測量英艦乗込人撰

鹿兒島藩

徳島藩

前田十郎左衛門

伊月一郎

兵部省

鹿兒島藩前田十郎左衛門・徳島藩伊月一郎儀、航海見習之為メ、英国水師提督軍艦へ乗組被仰付候条、此段相達候事、

庚午三月十四日

太政官

別紙之通

御沙汰相成候条、為御心得此旨相達候事、

庚午三月十四日

太政官

外務省

午三月

鹿兒島藩

前田十郎左衛門

徳島藩

伊月一郎

右英国水師提督世界周覽軍艦江乗組被仰付候ニ付、一ケ年之見込ヲ以、御手当金御渡シ可有之候也、

庚午三月十四日

弁官

大蔵省

追テ老人一ケ年千五百兩ツ、位之見込、外務省ヨリ申出候得共、尚是迄之例行御考合可有之、本人直ニ御省へ受取ニ罷出可申、尤明後十六日乗組候儀ニ付、為御心得申加置候也、

英艦乗組航海旅費之儀ニ付、過刻御申越有之、仍テ再

応大蔵省被相達置候間、即刻本人同省為請取可出張、
此段至急申入候也、

三月十五日

弁官

兵部省

追テ大蔵省之書面返却候也、

昨日御達申入候英艦乗込航海ニ付、旅費之儀、右ハ昨日当官ヨリ御沙汰ニ相成候事ニ付、尤其省ヨリ御渡可有之、再応此段御達申入候也、

三月十五日

弁官

大蔵省

英艦乗組航海旅費之儀、尚御達之趣承知いたし候、右は昨日御達ニ恣人一ヶ年千五百両ツ、と有之候得共、得と評議いたし候処、兩人へ千五百両ニテ相当と存候間、右ニテ御異存も無之候ハ、請取之者罷出候様御達有之度、此段再及御答候也、

三月十五日

大蔵省

弁官

御中

英艦乗組航海旅費之儀ニ付、書面之趣承知候、右は是迄御掘耕助始追々外国へ被遣候節之目的ヲ以、不都合無之候ハ、素ヨリ当官ニ於テ多少之異存ハ無之候得共、何分今日英国水師提督へ、

御直ニ

勅諭モ被為在候程之儀、左スレハ御宛行乏少忤些細之事ニテ、畢力至竟

御国威ニ係ル儀ニ候ハスヤ、其辺篤ト御承知、外務省へ御打合可有之、尤モ一人一年千五百両ツ、之旨、御達申入候、右ハ同省ヨリ取調出之儀ニ付、至当之処至急御取究可有之、於当官多少之儀ハ、御省御見込通異存無之候、此段御答候也、

三月十五日

弁官

大蔵省

御中

六〇三 大風ニヨル藩財政困難ノタメ、各所造営

費ノ節約並東京駐在徴兵ノ半減ヲ布達ス

三月十九日

三島・沖永良部島昨年数度ノ大風ニテ、砂糖産出高減少シ、且ツ外糖輸入ノ為メ価格低下シ、歳入非常ノ減少ヲ来シタルニヨリ、各所造営ノ費ヲ節シ、更ニ東京駐在ノ徴兵ヲモ半減センコトノ会計局ノ議ニ賛同シ、之ヲ藩内ニ布達ス、

一三嶋・沖永良部嶋之儀、昨年数度之大風ニテ、黍作別て相痛候哉ニ相聞得居候処、今般平運丸大嶋より大坂直乗之節、内之浦江致汐繫、在番より之御用封差出、黍作格外致痛損、近年千万斤余之出来砂糖ニ候処、当年は五百三拾万斤程之出来ニテ候段相達、外嶋之儀、未慥成報知は無之候得共、徳之島式百八拾万斤、喜界嶋八拾万斤位之風評ニ有之、第一御産物右通致減少候付ては、来年新砂糖到着迄之御金繰至て御難渋ニテ、誠以当惑之次第、殊ニ先般御銀主御借財、御返弁向被仰達置候得共、是以年内繰合不相調、新砂糖着荷之上弁達之賦、大坂詰同席共より掛合居候折柄、前条通三嶋合て大嶋例年之出産高ニも不至、然るに当年は異製黒砂糖ニも渡来、夫か為分外相場引下、重畳ニ不幸之仕合、此末相場次第之事ニは候得共、譬へ相応候ても、

從 朝廷御下渡之金札高年割御上納、其外御払株も過分有之、当年御銀主方御返弁之儀如何可相運哉、旁心配之至ニ候、就ては御藩内会計關係之諸事、いつれ寛急順序を以御施行無之候ては、半途より廃止相成候は案中ニ付、於局々も深く致注意、造営修覆等は勿論、万事御費用筋相省キ候様、左候て勸農方御普請等を始め、軍事御手当、窮民御扶助等莫大御入金ニ付、神事方御造営替等不急之儀は、此涯御猶予被為在候様有御座度、自然御入費相高候時は、再ひ御銀主御頼入、重て御借財ニ被為及候外ニ手術も無之、其通ニては此節断然御返弁之詮も無之、遺憾之至ニ候、且東京諸兵隊之儀も、此節迄は疾ニ二大隊交代相決居、随分御繰出文は相調候得共、大凡張紙之通入費ニ相及候付、以来は一大隊限ニて相濟候様有御座度儀と致商議候付、向々江も其段予て御布告相成候様被仰付度候事、

三月十九日

会計局

右申出之通、会計之道当年は別て難渋之次第候付、軍務並民事を除之外、諸神社之御造営其他不急儀は、此涯致猶予候様被仰付候条、於局々篤と協議之上、猶又費相省候儀共は可申出候、此旨向々江可申渡候、

三月

知政所

張紙

一金貳万五千兩程

右小銃二大隊並大砲二座、其外附屬之面々又は夫卒迄、軍用金大凡之見賦、尤東京より帰国之節は軍用金有無相分不申候、

但二大隊並二座、其外夫卒迄惣人数千五百四拾七

人、

一同貳万八千兩程

右東京兵隊一大隊・砲一座、乗船式艘前之濱迄且爰許より押返、同船雇入料凡之見賦、

一同貳万八千兩程

右前条跡残り一大隊・砲一座、乗船式艘前条同断、一同八千兩程

右雇船往來都合八艘分用心金凡之見賦、

一同六千五百拾六兩程

右徵兵

朝廷御構、外ニ御邸より御宛行六ヶ月分見賦、

一同壹万三千三拾貳兩程

右御邸兵隊前条同断、

一同貳千四百四拾三兩程

右前条御邸兵隊沓料六ヶ月分、

一同貳千三百兩程

右二大隊並二座江隨從之付役以下夫卒迄、六ヶ月分上下見賦、

一同壹万貳千四百八拾兩程

但米拾石、金百拾貳兩程、

右徵兵を除、御邸兵隊夫卒迄六ヶ月分米代、尤大坂辺当分之価を以凡見賦、

一同千三百九拾三兩程

右前条同断ニ付、六ヶ月分菜代、

一同四千四百六拾兩程

右惣兵隊夫卒往來船中米代見積、併爰許より出船之節は御国米を以相弁候故、現実費金之半方ニ相減賦ニ候、

惣合金拾三万千六百貳拾四兩余

右は此節東京兵隊交代ニ付、軍用金並往來雇船料、且滞在諸入費を概挙する也、右外彈藥等は勿論、當膳方・出納方・病院等出来物諸御買入品料、又は牛豚類瑣細之費用は全見除、且又厚毛布貳千五百枚、此節御買入申

出候得共、纒五百六拾六枚在合有之、夫丈御買入相成、余は於東京刃御買入可相成哉、此代金爰許御買入直成を以及算計候得は、凡張紙之通入費相重候賦ニ候、左候て前条算計之儀六ヶ月賦ニ付、一ヶ年ニ見賦候得は、当分之形勢ニては費金倍増之賦候事、
一厚毛布式千五百枚

御国銭

代銭五拾五万貫文

平均老枚ニ付

式百式拾貫文ツ、

正金ニして

老万六千七百兩程

老兩ニ付三拾三貫文賦

六〇四 藩庁賄賂ノ受授ヲ嚴禁ス

三月二十日

藩庁賄賂ノ受授ヲ嚴禁ス、

一御一新已来尚以賄賂之儀、第一之惡弊ニて、屹と変改いたし候様嚴令をも被下置候処、未舌も不乾内弥増賄

賂等被行、却て惡弊甚敷、尤外見ニ不触様蔭ニ出入持歩キ、甚敷ニ至リ候ては家作手伝等いたし候もの有之哉ニ相聞得、畢竟商人共ニおるてハ上之御為筋を名として、其実は一己之利を遂るの旨趣ニ有之、右等之奸計連々被行候様にてハ終ニ御政体屹立不致、妨害無此上事候付、分て今度御当地は勿論、諸郷迄も嚴重ニ見聞掛置、取締申渡置候間、乍此上不守之者有之候ハ、送与之多寡大小ニ拘らず、見聞之儀申出次第、官等上下之無差別、時々於当局可及糺彈候間、此旨兼て相心得候様早々被仰達度御座候事、

午三月廿日

監察局

右之通被仰付候条向々江可申渡候、

三月

知政所

六〇五 黒田清綱ヲ彈正少弼ト為ス

三月廿二日

黒田清綱嘉ヲ彈正少弼ト為ス、

六〇五ノ一

鹿兒島眞士族

黒田清綱

嘉納
天保元年庚寅三月生

明治三庚午年三月廿二日

一御用有之二付、東京滞在可致候事、

太政官

同月廿七日

一任彈正少弼、

同日

一叙從五位、

略○下

六〇五ノ二

略○上

彈正少弼

略○中

三年三月廿二日任 黒田清綱 鹿兒島士 四年二月十

九日罷

六〇五ノ三

吉井三峰日記
友実

同月三月廿七日

黒田少弼・内田少弁任官、

略○以下

六〇五ノ四

鹿兒島藩士

黒田嘉納

右今日被任彈正少弼候間、為御心得相違候也、

三月廿七日

弁官

彈正台

御中

六〇六 西郷隆盛位階辞退ノ聽許尽力方ヲ大久保

利通ニ請フ

三月廿三日

西郷隆盛位階ヲ辞スルニ先タチ、其聽許尽力方ヲ大久保
利通ニ請フ、依テ五月二日ニ至ツテ許サル、

卷封

大久保一蔵様

西郷吉之助

要詞

日々輕暖相催候処、弥以御安康可被成御座恐悦奉存候、
陳ハ御出立涯不快ニて罷在候処、御暇乞ニも参上不仕、
甚不敬之仕合御有恕奉希候、^{久光}扱老公御肝癩も長州變動
丸大ニ適當いたし、其後何之音も無御座、大慶此事ニ

御座候、乍然重留^(忠鑑)公子ハ暫時御慎之処、最早御免ニ相成申候、是も表通之事ニて無之、御直ニ御達相成居候由御座候、長州江入学被成御座候公子も、御手許より御人被遣御呼返ニ相成、横山^(安武)ニハ故障申立御断申出候様との事ニ御座候、是か御立後肝之発動ニて、至て柔なる痛ミニて漸々肝熱もさめ候塩梅ニ御座候、御詩作杯之義も今更御後悔と被相聞申候、其義ハ家令迄御嘶御座候由、返々も大発ニも不到、大幸之事ニ御座候、いつれ暴言之苦薬進上可仕事と明め居候得共、又棚之中ニ格護仕候、御安心可被下候、乍然他邦江は難説色々被相発候半、残念之至ニ御座候、先大破ニ不及候故、又々持立可申欵、暫時之柔きか程合ハ不相知候、少弟位階之義、
君公より御辞表を以被仰立相成候得共、御許容無之趣、此節ハ又々御申立相成候由御座候間、何卒御許容相成候様御尽力被成下度奉合掌候、官職被命候ハ、位階ハ自可有御座候得共、無官之者ニ位を被授候義ハ実ニ筋もなき御沙汰ニ可有之、諸侯之上なれハ兎も角藩士之者ニ高位を被授、
知事公より高位を被命候ても、御受難出来ハ臣子之当

然ニ御座候、御受難成者を無理ニ情義も不被為構候てハ、誠ニおかしき次第ニ御座候、畢竟以来之処も御藩内之者官職もなきニ位を被授候てハ、朝廷之人ニて藩内の所置は不受杯と不心得之者必出来候ハ案中之事候間、其手初いたし候てハ、実ニ不相濟、御案内通暴言勝之者却て罪作之最上之種子と奉存候間、何卒御論破被成下相濟候様偏ニ奉希候、堂上方杯ハ位階と申ものハ、余程尊き事と可被思召候得共、此田舎者何之やくニも不相立ものを強て御許容之なきも片腹痛き次第ニ御座候、尚細事此書面ニても御合点出来兼候ハ、彌助江委敷申含置候間、御聞取可被下候、此旨以書面御願申上候、頓首、

午三月廿三日

西郷吉之助

大久保一蔵様

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

三月、朝廷賞典祿ノ返献ヲ嘉納セラル、ノ報鹿兒島ニ達スルヤ、隆盛ハ又書面ヲ大久保ニ贈リテ、位階辞退ノ許容ニ尽力セン事ヲ請ヒタリ、ソノ書ニ曰ク、

追日暑氣相催候処、弥以御安康被成御座珍重奉存候、隨て少弟無異罷在申候間、乍憚御放慮可被下候、陳ハ

御当地も至て静穩、(經濟)村田・篠原政府ニ被出候得共、固辭して不屈、誠ニ六ヶ敷人々ニて御座候、(伊地知)桂氏も引込相成、(兼寛)迎も被出候模様ニも無之、正治一人ニて当分ハ至極差はまり居られ申候、い十院も罷歸候由御座候得共、是以引籠り申候、実ニ正治一人ニて無理なる事ニ御座候、御悲察可被下候、近来ハ君侯方や外国人や御客通しニて、賑々敷様子ニ御座候、只名計ハ高くて其実ハ無之、汚顔之仕合ニ御座候、其御許ニハ定て御定算も相立候半と奉存候、先便細事被仰聞被下、難有御厚礼申上候、其節書物御下し被下、別て難有奉深謝候、又々別紙之書物ほしくてのし不申候間、何卒御都合を以、御下し被下度奉合掌候、御賞典沙汰之御辞表ハ、都て御許容相成候由、無此上大慶之事ニ御座候、左候へハ私之三位も、是ニ引統居候訳ニ御座候間、是以とふそ許し相成候様、御慈計偏ニ奉願候、此旨御安否御同旁奉得御意候、恐々謹言、

五月七日

西郷吉之助

大久保一蔵様

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

六〇七 永山盛輝ヲ監督権大佑卜為ス

三月廿五日

永山盛輝正蔵ヲ監督権大佑卜為ス、

鹿兒島県士族

永山盛輝

正蔵

文政九年丙戌八月生

明治二年己巳二月廿八日

一 御東幸中用度司判事申付候事、 會計官

同年五月廿九日

一 是迄ノ職務差免用度司判事申付候事、同上

同年七月八日

一 廢會計官置大蔵省、

同年八月廿八日

一 任用度権大佑、 大蔵省

同年十月二日

一 当分宮内詰申付候事、 同上

同三年庚午三月廿五日

一 任監督権大佑、 民部省

以下略ス

明治3年(1870)

六〇八 府藩県ヲシテ宣教使適當ノ人材ヲ選挙セ

シム

西郷隆盛

吉之助

三月廿七日

朝廷ニテハ、府藩県ヲシテ宣教使適當ノ人材ヲ選挙セシ

ム、

三月廿七日巳

御沙汰書写

府藩県

先般宣教使被為設候ニ付テハ、追々御施行可被為在候
間、府藩県ニ於テ可然人材一兩人撰挙致シ、出処・姓
名等詳ニ相記シ、早々神祇官へ可申出事、

六〇九 大久保利通帰京復命ニ付、上京ニ及ハサ

ルコトヲ西郷隆盛ニ達ス

三月廿七日

大久保利通參 帰京復命ニ付、上京ニ及ハサルコトヲ西郷

隆盛ニ達ス、

鹿兒島県士族

○中略

同治三年庚午三月廿七日

一先達被為召候処、大久保參議復命言上之趣被聞食候条、

最早不及上京候事(内閣記録課公文録 鹿兒島藩之部ニ
モ同文ヲ載ス)

○以下略ス

【参照】

〔五九七ノ五の十二日と同文により削除〕

六一〇 吉井友實等ノ彈例錯誤ヲ謹メ謹慎ヲ命ス

三月廿八日

彈正少弼吉井徳春幸ノ彈例ヲ錯誤セシヲ謹メ、海江田彈

正大忠義ノ客冬停刑ノ罪ヲ判シ、並ニ謹慎ヲ命ス、

三月廿八日午

御沙汰書写

副島參議(種臣)

彈例取停手落ニ及ヒ不束之次第ニ付、謹慎被 仰付候

事、

九條彈正尹(遺孝)

彈例之儀ニ付、其掌ヲ失ヒ候段不束之次第ニ付、謹慎
被 仰付候事、

彈正台

止刑之儀ニ付、其台京師出張之大小巡察被召寄候処、
最早勘問之筋相濟候ニ付、此旨相達候事、

吉井彈正少弼(友亮)

各通

安岡彈正大忠(貞亮)

河野彈正權少忠(敏徳)

長谷京都府知事

糺問中平松宮内権大丞へ御預被 仰付置候処、被免候
事、

彈例之儀ニ付、其掌ヲ失ヒ候段不束之次第ニ付、謹慎
被 仰付候事、

平松宮内権大丞(時孝)

長谷京都府知事糺問中其方へ御預被 仰付置候処、被
免候事、

門脇彈正大忠(重徳)

各通

海江田彈正大忠(信義)

足立彈正少忠(正声)

門脇彈正大忠

旧臘止刑之儀、所措失当不束之次第ニ付、謹慎被 仰
付候事、

各通 松田京都府大参事

足立彈正少忠

糺問中鳥取藩へ御預被 仰付置候処、被免候事、

各通

長谷京都府知事(信篤)

松田京都府大参事(道孝)

榎村京都府権参事(正直)

鳥取藩

止刑之儀、取計方手落ニ及候ニ付、謹慎被 仰付候事、

門脇彈正大忠・松田京都府大参事・足立彈正少忠儀、

糺問中其藩へ御預被 仰付置候処、被免候事、

一謹慎被免候事、

○下略

海江田彈正大忠

糺問中鹿兒島藩へ御預被 仰付置候処、被免候事、

吉井三峰日記
友実
同月明治三年三月廿八日

鹿兒島藩

彈例一条ニ付、謹慎ノ御達ヲ被ル、
種子田左門一大隊、今日出立帰国、

海江田彈正大忠儀、糺問中其藩へ御預被 仰付置候処、
被免候事、

同月廿九日

謹慎、

鹿兒島県士族

同月晦日

吉井藤原友實

同断、

幸輔
徳春

四月朔日

○中略

同断、

同年^{明治}二年八月廿五日

同月十七日

一任彈正少弼、

駒場野ニ於テ大訓練、

中略

主上御乗馬ニテ 出御、出場ノ兵隊一万ニ及フト云フ、

同年^{明治}三年三月廿八日

謹慎中ニテ出張スルヲ得ス、遺憾也、

一彈例之儀ニ付、其掌ヲ失ヒ候段不束之次第二付、謹慎

同月十八日

被仰付候事、

謹慎被免候事、

同年四月十八日

丸山・谷元等唐太ヨリ帰レリトテ、谷元来訪、彼土ノ

事情具ニ聞ク、

十九日以下略

六二 岸良兼養ノ勘問中ノ謹慎ヲ釈ク

三月廿九日

岸良兼養七之丞ノ勘問中ノ謹慎ヲ釈ク、

鹿兒島県士族

岸良兼養

七之丞

○中略

同年明治二年八月十七日

一任大疏、

彈正台

同年九月廿三日

一任彈正大巡察、

同年十月十九日

一叙従七位、

同三年庚午二月十三日

一御勘問ノ筋有之候ニ付至急東趨可有之事、

彈正台

同年三月四日

一御勘問中謹慎可有之事、

同上

同月廿九日

一止刑ノ儀ニ付勘問ノ筋相済候間、不及謹慎候事、

但在勤婦京ノ儀ハ、追テ可相達候事、 同上

○以下略ス

六二 藩庁養蚕方会社設立ノ資金トシテ藩札ヲ

発行ス

三月廿九日

藩庁ニテハ、養蚕方会社設立ノ資金トシテ藩札ヲ発行シ、之ヲ藩内ニ融通セシム、

木判摺紙札

柿色 右同

一金壹両札 一同壹歩札

右同

一同壹朱札

右は此節養蚕方会社被召建、御本手銀として、金札右之通御宛行相成候付、諸御蔵々は勿論諸人取遣之儀、金壹両・錢拾貫文替にて通融被仰付候条、此旨

御藩内一統江不洩様被仰達度候事、

三月廿九日 会計局

右之通被仰付候条向々江可申渡候、

三月 知政所

六二三 大久保利通外一人へ紫組掛緒ヲ下賜ス

三月晦日

朝廷ニテハ、大久保利通外一人へ紫組掛緒ヲ下賜セラル、

鹿兒島県土族

大久保利通

一蔵

略○上

同治三年庚午三月三十日

一紫組掛緒下賜候事、

略○下

三月晦日 申丙

御沙汰書写

紫組掛緒下賜候事、

各通

大久保参議

爲行 佐々木参議

六二四 藩庁前田新之丞ヲ下荘内地頭ニ、三島通

庸ヲ高崎地頭ト爲ス

是月(三月)

藩庁ニテハ、前田新之丞ヲ下荘内地頭ニ、三島通庸爲行兵衛

ヲ高崎地頭ト爲ス、

一下荘内地頭

前田新之丞

右之通被 仰付候、左候て当分之地頭所是迄之通被

仰付候条、諸縣郡高城江可罷在候、

一高崎地頭

三島彌兵衛

右之通被 仰付候、左候て当分之地頭所是迄之通被

仰付候条、上荘内江可罷在候、

右之通被仰付候条向々江可申渡候、

三月

知政所

六二五 藩内ニ賈貨流通少カラス、ソノ取締ヲ達

ス

是月(三月)

藩庁ニテハ、輓近賈貨幣藩内ニ流通スルモノ少カラス、
為メニ朝廷ヨリノ新貨幣引替令ニ違背ヲ来タスニ依リ、
其選択授受方ヲ達ス、

一 御藩内商人其他邦より商事ニ付、悪金數多持入、又は
他邦商人共悪金持越、諸品買入候儀有之、右之内ニは
位至て卑劣之品も有之段相聞得、終ニは請取候当人共
全損乏候儀は勿論、第一新金御取締引替等ニ付ては、
從 朝廷追々御布告之趣有之候付、御藩内江ある処之
新金此涯所置不被相付候てハ不叶折柄、前々之通悪金
入込候ては御政事之妨相成、且 朝廷江被対候ても御
難事之訳ニ付、尔来金性相撰、悪金之儀屹と不相受取
様、御当地之儀は民事局、外城之儀は地頭並同副役よ
り無遺漏申渡、取締行届候様取扱可致旨被仰渡候事、

三月

會計局

右之通被仰付候条向々江可申渡候、

三月

知政所

六二六 天皇及ヒ藩知事一門ノ名字ヲ個人名ニ使

用スルヲ禁ス

是月(三月)

又天皇及ヒ藩知事公御一門ノ名字ハ、各個人ノ名ニ使用
スルコトヲ憚カラシム、

一 仁・統・惠・睦

右文字実名・仮名・同唱迄も遠慮、

一 義・忠・光・久

右文字同断遠慮、

一 親・勝・寧・貞・房

右文字仮名相用候儀、同唱迄も遠慮、

一 桃齡タウレイ 隨真スイシン 聡徳ソウトク 紫雲シウン 智鏡チキョウ 晴雲セイウン 天璋テンシャウ

右二字統候文字仮名相用候儀、同唱迄も遠慮、

一 朝 頼 興 齋 彬

右文字遠慮、

一 久 忠

右文字依家実名相用候儀御免、仮名相用候儀一統遠

慮、

一 三郎

右二字続候文字仮名相用候儀遠慮、

一又

右文字依家柄別て由緒有之面々計仮名相用候儀御

免、其外一統遠慮、

一封濟

右実名相用候儀遠慮、同唱之文字は心入を以遠慮、

一盛悦之助 成 真之助 俊

右文字御同名同唱迄も遠慮、

右之通遠慮文字被相改候条、向々江可申渡候、

三月

知政所

六二七 戸口調査ニ当リ其録上方ノ順序ヲ達ス

是月(三月)

又当年戸口調査ヲナスニ依リ、其録上方ノ順序ヲ達ス、

一御藩内人別改方之儀、当年年被仰付候就ては、以来御

当地六方限士族並其家来下人等は、徇達より方限毎ニ

一紙総いたし、別冊雛形之通改帳相添、伝事見届之上

民事局江差出、附士・足輕等は其支配頭より、近在は

検者並村長より、上下西田町は掛役々より相改民事局

江差出、諸郷之儀は掛役々より前文同様相改、地頭見

届之上民事局江可差出候、尤当五月限相仕廻候様被仰

付候、左候て御当地諸郷之儀は御条書被相下来候得共、

以来不及其儀候、琉球諸嶋改方之儀は、民事局より在

番宛にて、来夏便より帳面差出候様可申越候、其外改

方仕向被相替候付ては、向々より民事局江申出、諸事

得差図、無混雜様可取計候、此旨民事局総裁江申渡、

向々江も不洩様可申渡候、

三月

知政所

六一八 島津家庶流ニ直別ノ家号ヲ称スルコトヲ

許ス

是月(三月)

又尔来御家庶流ニ、直別ノ家号ヲ称スルコトヲ許ス、

一是迄御庶流ニて諸家中相成居候者は、

御家より御直別之家号又ハ町田・伊集院之家号相用候

儀被留置、其内嫡家之家中ニ其家庶之者又は於其家中

勲功有之候者は、子孫は嫡流之嫡子迄御直別之家号御

免被仰付置候処、此節御一新付、右之家筋ニて外城士

族被 仰付候者共は、嶋津之御称号除之外、以来御直
別之家号相名乗候様被 仰付候条、右体家筋之者は銘
々嫡家より取調、一緒ニ名字替可願出候、此旨可承向
江可申渡候、

三月

知政所

明治3年(1870)

〔稿本表紙〕

明治三年
四月 忠義公史料稿本(初稿)四

〔稿本にて補正〕

六一九 大久保利通ノ賞典返上願ヲ聴許ス

四月二日

大久保利通先キニ再三賞典ノ返上ヲ請ヒ、終ニ其半高ヲ
聴許セラル、仍テ更ニ賞典ノ残半高ノ返上ヲ出願シ、五
日ニ至リ聴許セラル、

昨秋米穀不登、方今ニ至窮民不少、非常ニ斃候者有之
段追々伝聞仕、実以痛心之至ニ御座候、就ては被下置
候御賞典残半高、奉納之儀昨冬奉願候処、不被及御沙

汰旨拜承仕、再三奉願候も不堪恐縮候得共、何分不容
易凶荒此末之処も案煩仕、乍聊難黙止至情ヲ以、猶又
奉納仕度奉懇禱候、恐惶頓首、

四月二日

御附紙

賞典之儀、已ニ昨年半高返納被

聞食候処、尚又残半高獻納再三懇願之趣、全至誠之

所致、神妙之至被

思食候、就ては乍

御不本意願之通被

聞食候事、

大久保利通日記

二日四月

○上略

一賞典半高返上、再願書出ス、

○以下略ス

五日四月

○上略

一今日小生へ御賞典半高返上之願被聞召、御附紙ニテ坊

城殿被相渡候、

○以下略ス

六二〇 兵学寮及ヒ陸軍学舎ノ規定ヲ定メ、諸藩

士ノ入学ヲ許ス

四月三日

朝廷ニ於テハ、兵学寮及陸軍学舎ノ規定ヲ定メ、諸藩士ノ入学ヲ許ス、

【第二百五十九】四月三日（兵部省）

今般、兵学寮・陸軍学舎御規定、別冊之通御定メ相成、

於大阪来四月二十日ヨリ青年学舎御開相成、左之割合

ヲ以テ依願入学差許候間、御規則通遂吟味、同月十五

日迄ニ本人差越、其支配ヨリ以添書、同地出張所江可

願出候事、

一大藩 四人迄

一中藩 三人迄

一小藩五万石以上 二人迄

一小藩五万石未満 一人

定

一 衣服ノ儀ハ寮中規則有之候間、総テ規則通り自分入用ヲ以テ可製事、

一 食料費ハ、一ヶ月ニ付金五両宛可相納事、

一 稽古器械ハ演習ノ順次ニ随ヒ、御貸渡相成候事、

一 書籍ハ、其稽古中御貸渡シニ相成候得共、自分書入等

致シ永々所持致シ度向ハ、代料相納所持之品ニ可致置

事、

一 勤学中退寮之儀、一切不相成候事、

但病氣等ニテ不得止事有之節ハ、吟味之上差免候事、

明治三庚午年二月

兵部省

長サ七寸曲尺

皇川

陸軍青年	何国何郡産
学舎入学	何藩
奉願候以上	何某 当午年何歳
何藩役人	何某印
年月	

以下略ス

六二一 伊集院兼寛ヲ鹿兒島藩権大参事ト為ス

四月三日

伊集院兼寛直右衛門ヲ以テ、鹿兒島藩権大参事ト為ス、

鹿兒島県士族

伊集院兼寛

直右衛門

天保九年戊戌正月生

明治三年庚午四月三日

一任鹿兒島藩権大参事、

以下略ス

六二二 琉球藩取扱ニ関シ、從來支那ト交際上ノ

振合等調査ヲ鹿兒島藩ニ命ス

四月三日

琉球藩取扱ニ関シ、從來支那ト交際上ノ振合等調査方ヲ

鹿兒島藩ニ命ス、

鹿兒島藩

琉球藩是迄其藩ニ於テ取扱候手續、且同国支那ト交際

ノ振合等篤ト取調可申出候事、

庚午四月三日

六二三 海軍省ヲ東京ニ、陸軍省ヲ大阪ニ新置ス

四月四日

朝廷ニテハ、海軍省ヲ東京ニ、陸軍省ヲ大阪ニ新置ス、

〔頭註〕第七百六十一參看

〔第二百六十一〕四月四日(沙)

兵部省

海軍所之儀、於東京御取建御決議相成候条、此旨相違

候事、

但陸軍所之儀ハ、是迄之通大阪ニ於テ御取建ニ相成

候事、

【参照】

〔第七百六十一〕閏十月二十二日(沙) 兵部省

〔頭註〕五年太政官第六十五号ヲ以テ海軍所ヲ海軍省ト為ス

元濱殿海軍所ニ被 仰付置候処、右被相止代地トシテ、

築地元尾州邸ヨリ西仙臺橋並三ノ橋南元海軍所迄一円

御渡相成候条、此旨相違候事、

〔第七百六十二〕閏十月二十二日(沙)

兵部省

各通

大蔵省

別紙之通兵部省へ御達相成候間、同省へ引渡可申事、

【参照】

海陸軍ノ事件御下問ニ付、愚慮ヲ左ニ条陳ス、

一 当時海陸ノ本局ヲ建立セラル、モ、廟堂上ノ御基本確立、一定信義上下ニ貫徹シ、天下ノ人心感服スル所アラソシハ、其実行ル、ヲ得ス、

一 凡一事ヲ挙ント欲セハ、先ツ其筆ヲ立テサル可ラス、況ヤ軍ハ国ノ大事ヲヤ、夫レ兵ハ国内ヲ保護シ、海外ヲ威服スルユヘンノ者ナレハ、天下共ニ之ヲ養ハサル可ラス、故ニ今手ヲ下ス其用算ヨリ始ムル、凡府藩県ノ公廩並ニ三百石以上ノ官禄等ニ三四十分一位ノ輕稅ヲ献セシメ、以テ軍国ノ用ニ充ツ、其精算ノ如キハ熟議ノ宜キニ從フ、

但奥羽掛其外、一昨年以來兵役ノ害ニ困苦スル処ハ、

四五十年ノ間優恤ヲ加ヘサル可ラス、

一 兵勢ノ能ク振フト振ハサルハ、軍務ノ能ク修マルト修マラサルニアリ、軍務ノ能ク修マルト修マラサルハ、其之ヲ主トルノ人ニ存ス、故ニ今先ツ大ニ海陸軍ノ教師ヲ求メ、盛ニ兵学寮ヲ設ケ、上下貴賤ノ差別ナク、其才ト其志トアル者ハ、之ヲ撰テ入学セシメ、軍務必

用ノ人才ヲ養ヒ、其実ヲ収ムル、是レ眼前第一ノ急務ナリ、

但自今海軍ノ業ハ、現今有ル処ノ艦ト併テ、諸生習

練ノ用ニ充ツ可シ、

一 海陸軍ノ本局ハ、海外諸邦ニ至テモ初政府ノ下ニ建立スルハ、其大ニ關係スル者ヲ以テナル可シ、今我邦ノ勢ヒ、西南ハ已ニ憂フルニ足ラス、唯東北ノ辺隅未タ王化ニ湿セス、且已ニ魯トハ雜居シ北顧ノ憂実ニ多ケレハ、一步東北ニ向テ形ヲ張ルトモ、一步西南ニ退テ勢ヲ踐ム可ラス、然ラハ則本局ノ建立東西ノ得失判然論セスシテ分ル、当時天下ノ兵勢強弱各偏重アリ、全州一般ニ振ハサルハ畢竟其節制一定セサレハナリ、故ニ今当省ヨリ、能兵勢ニ精シテ其改正ノ任ニ堪ル者五六人ヲ藩々ニ分テ遣シ、実地ニ就テ之ヲ巡檢シ、其精シキヲ認メ其粗ヲ改正スルヲ得セシメハ、則天下ノ兵制漸々整フニ庶幾カラシ、

一 海岸防禦ノ備ヲ修メスンハ、非常ノ変ニ応シ難シト雖トモ其守備ハ特ムニ足ラス、況ンヤ国力其備ニ供スルニ足ラサルヲヤ、当時内外ノ勢ヲ以テ知ルヘシ、故ニ今其財ヲ以テ費財ノ用ニ充テ、天下ノ公道ヲ明ニシ、

内外ノ弁ヲ正フシ、才成リ国富ムヲ期シ、漸ク海陸ノ

備ヲ為スニ如カス、唯一時ノ意ヲ強フセント欲シテ、

否々ノ財ヲ費シ守ルニ足ラサルノ造築ヲ為ス最下策ト

ス、苟在上信義ヲ天下ニ失ハス、大敵実ニ脱衣ノ至誠

ヲ以テ在下ノ疾苦ヲ体任シ、斯レ民ノ為至理ヲ立ノ政

績相立テ、海内一和同心ニ成リ行ク上ハ假令一見非常

ノ変起リ、敵ヲ環海ニ引受ルトモ已ムヲ得サルノ情義

ニ依リ、上下一同灰土ト為ルノ断決ヲ以テ、主上自ラ

率ヒ給ハ、人々奮躍争フニ死力ヲ尽サン、此時ニ至

リテハ誰カ其成敗ヲ問フ者有ランヤ、米利堅ノ創業ノ

如キモ其効ニ非ラスヤ、且古ヨリ創業ノ主ハ皆自血衣

振ヒ、彈丸ヲ凌キ、艱難危急ノ余僅ニ能ク其基業ヲ開

キ得ル者多シ、千六百年ノ頃ニ当リテ、魯ペートル即

位ノ後チ心ヲ政事ニ潜メ、帝王ノ尊キヲ以テ自ラ舟工

トナリ、蘭ニ渡リ夫ヨリ諸邦ヲ歴閲苦学ノ發明ヲ以テ、

遂ニ今日ノ大業ヲ始ム、是ヲ以テ創業ノ難ヲ知ルヘシ、

恐レナカラ我

今上モ大臣・納言両三人御引率ニテ、万里ノ波濤其由

テ之ヲ致スユエン熱得シ給ハ、他日ノ政治庶幾クハ

隆盛ヲ海外諸邦ニ比セン、謹白、

庚午四月

内田政風

弁官御中

六二四 朝廷ニテハ癸丑以来時事ニ奔走シ、力ヲ

国事ニ効セシ者ノ事蹟ヲ録上セシム

四月五日

朝廷ニテハ癸丑以来時事ニ奔走シ、力ヲ国事ニ効セシ者ノ事蹟ヲ録上セシム、

○四月五日^{丑辛}

御布告写

癸丑以来天下有志之徒、時事ニ奔走、力ヲ国家ニ効ス者不少、其成敗得失素ヨリ多端トイヘトモ、要スルニ忠誠義烈之事蹟決テ湮滅スヘカラス、此節御記録編輯御用ニ付、其砌之日記・手控及書簡等、国事ニ関係候分、所持致候者ハ、早々其筋ヘ差出可申事、

六二五 癸丑以来、元関白・議伝両奏職事等勤メタ

ル者ノ日記其他ヲ進致セシム

四月五日

朝廷ニテハ華族ヲシテ癸丑以來、元関白・議伝兩奏職事ヲ勤メシ者ノ日記其他、国事ニ関スル者ヲ進致セシム、

御沙汰書写

華族

御記録編輯御用ニ付、癸丑以來、元関白・議伝兩奏職事等相勤候向ハ勿論、総テ家々之日記・手控及聞書ニ至ル迄、国事ニ関係候分、早々取調可差出候様被仰出候事、

六二六 諸藩ニ癸丑以來旧幕府枢要ノ職ヲ勤メシ

者ノ日記其他ヲ進致セシム

四月五日

諸藩ヲシテ、癸丑以來旧幕府枢要ノ職ヲ勤メシ者ノ日記及文書等、国事ニ関スル者ヲ進致セシム、

諸藩

御記録編輯御用ニ付、癸丑以來旧幕府ニテ枢要之職務相勤候向ハ勿論、総テ藩々之日記・文書類国事ニ関係候分、早々取調可差出候事、

六二七 静岡藩ヲシテ旧幕府日記・文書ヲ進致セ

シム

四月五日

静岡藩ヲシテ旧幕府日記・文書ヲ進致セシム、

静岡藩

御記録編輯御用ニ付、旧幕府日記・文書類早々取調可差出候事、

六二八 練兵天覽ノ節須知条件

四月五日

練兵天覽ノ節須知条件、

〔第二百八十一〕四月五日（兵部省）

一 練兵 天覽之節、諸兵隊自藩之旗章一切差留候事、

但礼式並運動之節ハ、士官以上拔刀ニテ指揮可致事、

一 兵隊一統沓相用可申事、

一 夫卒ハ一小隊六人卜定メ、行軍中大小荷駄ニ可属事、

但髻ニ赤紙ノ結付可申事、

一 従者一切召具シ申間敷、尤馬上士官ハ口取老人ニ限り

候事、

一 当日着到之義、連隊・砲隊・騎隊各司令ヨリ夫卒ニ至ル迄、総人員書付ヲ以テ、無遅延天下馬參謀局江可届出事、

一 連隊旗・大隊旗ハ諸整列之上、連隊司令並ニ大隊司令旗手ヲ牽ヒ、參謀局ヨリ請取可申事、

但凱陣之節返納之義モ可為同様事、

一 於駒場野諸藩兵屯所テント之義ハ、藩々申合用意之事、
一 諸藩兵銘々飲器用意之事、

六二九 諸藩ヲシテ印鑑ヲ駅通司ニ進致セシム

四月八日

諸藩ヲシテ印鑑ヲ駅通司ニ進致セシム、

六二九ノ一

(頭註) 四年太政官第三百五十三ヲ以テ鑑一
第二百八十二 四月八日(留守官)

京都諸藩邸士族・人足帳調印願出候節、見合ノ為メ諸藩印鑑差出置候様致度旨、当地出張ノ駅通司ヨリ申出候間、早々同司ヘ可差出事、

六二九ノ二

今般改正被仰渡候印鑑拾六枚差上申候間、宜奉願候、

以上、

鹿兒島藩

四月十三日

小野半左衛門

留守官

御伝達所

六三〇 英国公使・水師提督參朝ノ節ノ不都合ニ付、澤宣嘉謹慎並ニ寺島宗則ノ進退伺

四月九日

澤宣嘉外務卿、英国公使・水師提督等參朝ノ節不都合ニ付、

謹慎ノ命並寺島宗則外務大輔進退伺、

六三〇ノ一

澤 外務卿

英国公使・水師提督等參

朝之節、不都合之次第全ク言語誤解とハ乍申、不行届

ニ付謹慎被 仰付候事、

庚午四月九日

太政官

六三〇ノ二

澤 外務卿

謹慎被免候事、

庚午四月十二日

太政官

六三〇ノ三

弁官

寺島外務大輔

御中

去月十五日、英国水師提督・同公使等参

朝之節、不都合之儀有之、就テハ今般澤外務卿謹慎被

仰付候、右ハ外務省兼々不取調之次第官員一同恐縮仕

候、仍テ進退相伺候、此段御沙汰宜願入候也、

庚午四月十日

御附札

不及其儀候事、

六三二 諸藩無用ノ銅製大砲ノ買上ヲ止ム

四月十二日

藩々無用ノ銅製大砲ノ買上ヲ止ム、

○四月十二日申成

先般新貨幣御鑄造ニ付、藩々ニ於テ当今無用之銅製大砲所持致候ハ、相当之代価ヲ以テ御買上ケニ相成候

間、東京真崎鑄錢座へ申出、早々廻シ方可取計旨御達ニ相成候処、御都合ニヨリ不及其儀旨、更ニ御沙汰候

事、

【参照】

〔第一千五百〕十一月十二日○明治
〔頭註〕三年第二百八十九ヲ以テ取消

今般新貨幣御鑄造ニ付、藩々ニ於テ当今無用ノ銅製大

砲所持イタシ候ハ、相当ノ代価ヲ以テ御買上ケニ相

成候間、東京真崎鑄錢座へ申出早々廻シ方可取計、尤

便利ノ為吹崩シ相廻候トモ不苦候、猶委細ノ儀ハ大蔵

省へ可承合候事、

六三三 獨逸公使ノ中国・四国・九州諸港巡視ヲ聴

許シ、之ヲ沿海諸藩県ニ告知ス

四月十四日

(Vor Brandt)

獨逸(北部連邦)公使フォン・ブランド自国ノ軍艦ニ駕シ

テ、中国・四国・九州ノ諸港ヲ巡視セント請フ、之ヲ聴

シ更ニ沿海諸藩県ニ告知ス、

六三三ノ一
○四月十三日酉己

御沙汰書写

明治3年(1870)

馬渡外務大丞

獨乙国公使、鹿兒島ヲ始メ諸港へ罷越候ニ付、同艦乘組被 仰付候事、

六三二ノ一

○四月十四日 戊庚

中国・四国・九州諸藩県へ御達書写

今般、獨乙国公使軍艦ニテ、来ル十七日横濱出帆、長崎へ罷越、夫ヨリ九州・中国・四国等之諸港巡覽致度旨願出候ニ付、御聞届ニ相成、馬渡外務大丞同艦へ乘込罷越候間、諸事不都合無之様打合取計可申候事、但シ都合ニヨリ上陸致候儀モ可有之、此旨可相心得候事、

候事、

六三三 福岡藩知事黒田長知藩情視察ノタメ来着

島津忠義霧島ヨリ十七日帰麿ス

四月十三日

福岡藩知事黒田長知、藩情視察トシテ来着、忠義公霧島

温泉入浴中ニテ十七日帰麿、

六三三ノ一

道島正亮日記四月十三日

一 午四月十二三日比、筑前侯若殿薩摩侯ヨリ藩子也蒸気船ヨリ被差越

客屋へ御滞在、二十二日ニ御帰国被成候半、

但

此内磯へ招待モ為有之由、

知事公ハ霧島へ御湯治へ被為入候間、重留○珍

杯ノ御亭主振候半、

知事公モ去ル十七日ニ御帰城被成候事、

六三三ノ一

一 福岡藩知事様此節御来越客屋御滞宿ニテ、諸所御歩行等も被為在候付、於途中御行合申上候節ハ、不敬之儀無之様、可相心得旨向々江不洩様可申渡候、

四月十四日

知政所

一 福岡藩知事様御越ニ付テハ、諸事御手当向之儀、先達

テ高知藩知事様御越之節通被仰付候条、可承向江可申

渡候、

四月

知政所

六三三ノ三

寺師宗道日記四月十五日

一 四ツより出席候処、今日筑前福岡知事公、火薬局御一

見之為砲台打方より直様御出相成り候、従事姓名、

大参事

矢野安雄

権大参事

中村用六

小属

堀川俊雄

家扶

江上 澄

副家扶

小野新路

家従

佐々木美雄

同

廣田田龍

八ツ時御出ニて新器械トシマーシネ(火薬配)ヨリ、ワー
トルベルス(水圧
搾機) 木炭竈硫黄蒸明場等、御覽相成候、

六三四 集議院判官神田孝平、諸藩公議人ニ會議

ノ趣旨ヲ訓示ス

四月十三日

集議院判官神田孝平幕臣ヨリ會議ニ先タチ、諸藩公議人ニ

會議ノ趣旨ヲ訓示ス、

神田集議判官ヨリ月番公用人へ四月十三日

口上覚書

先日諸藩議員召サセラレ候節、御別紙云々被仰出候儀
ハ、深キ

御趣意モ有之、決シテ等閑難相成筋ニ候処、此節右御
趣意柄誤解致シ居候向モ往々有之哉ニ相聞候間、猶亦
委敷申述候、扱当年御開院之御趣意ハ、専ラ藩政向篤
ト相心得候ハ、熟議見込之所

聞シ召シ候上ニテ 御詮議モ可有之、就テハ若シ議員
其任ニ堪ヘサル時ハ、自然至言ノ 御議定モ相整カタ
ク、且亦御規則相立候上ハ、掃落イタシ実地施行可致
旨、

御沙汰有之候節、若シ其人ニ非サレハ必然行ハレカタ
キ情実ヲ醸シ、自然御政令ノ退歩ト可相成欵、元来、
昨年中議員トテモ、藩政ヲ心得スシテ難相勤答ニ候処、
当年ハ右御含モ有之候ニ付、一際精細被 仰出候事ニ
候、右ノ次第二候間、此上猶等閑ニ相心得候テハ、御

趣意悖り候段ハ申ニ不及、院中不居合ニモ相成、遂ニハ陶汰ノ場合ニモ可立至軟、左候テハ其藩ノ無念ハ勿論議事ノ障ニモ相成候間、右等ノ情実厚相心得、御趣意柄誤解無之様、為念申通置候也、

六三五 大久保利通ヨリ島津久光ノ上京猶予願ヲ

奏上シタルコト其他ヲ知政所ニ告知ス

四月十四日

在東京大久保利通ヨリ、久光公ノ上京猶予願ヲ主上ニ奏上シタルコト、其他時事ニ関スル数件ヲ知政所ニ告知ス、各様被為揃御安康被成御奉職、奉慶賀候、然は二丸公就御所勞、御上京御猶予御願之一条則及言上候処、実ニ御意外被為思召候得共、巨細之情実被為聞召、何分御病氣ニ就ては不及是非にて、御聞通相成り申候次第ニ御座候、猶別段御^マハ不被為在候段、拜承仕候、当地形勢別段変候儀ハ無御座候得共、昨秋米穀不豊、当夏ニ至り候ては四方窮民モ不少、且又追々御伝聞も被為在候通、廟堂上之処ハ基礎御確定と申ニ不至、実ニ当年中之処、皇国前途興廢之分る、時機と愚考仕

候、尤廷議一定之論ハ、皇威之振起紀綱之弘張ハ、全以在官之人々其職ヲ尽事足らざる所以にて、他を謹責スル事ナシ、就ては乍恐 主上天職ヲ被為尽、宸断を以天下ヲ御スル之御実績ヲ被為奉之御基ヲ奉始、随て於府納言以下御旨趣を奉戴シ、必死勉勵身ヲ以諸省ヲ卒ヒ、先以廟堂上一定一和自省推考スルヲ本ニして、徐々と真綱目を挙、自天下に信を宣布あらせられ候外無之、依て御輔導之任御精選、真ニ御実益と相成候人物被為備答ニ御座候^{不日発表可有之、御延引之事不得、止事儀有之候得共、最早速からず}、彈正少弼^{備納}黒田嘉納^{林半七、得能良介、少輔ハ吉井、是ハ謹慎中故未拜命}、權忠稻津渡^マ本集議院權判官、民部大丞^{林半七、得能良介、少輔ハ吉井、是ハ謹慎中故未拜命}少弁内田仲之助

右等已ニ被仰付候、尚追々御黜陟も被為在答ニ御座候、就ては御国人数多分ニ有之、殊ニ黒田・得能事御使ニて出府復命ニ不及候ては、如何とも難安心旨遮て論も承り、尤之事ニ相考候得共、前条申上候通、即今之形勢、実ニ皇国之安危ニ関ハル大事之際、一人ニても人ヲ被差出、御助ヲなし候事はもとより、御趣意ニ於て相戻り候事ニ無御座候、勿論事柄ニ依り、是非復命不致候て不叶訳も無之、旁吉井・黒田・川村等談合仕、

若シ不都合も有之候ハ、私罪ヲ蒙リ候格護ニテ、引

留申候次第ニ御座候、依テ御内評之趣可然哉ト之旨、

御下問も有之候得共、情実不得止事、決テ余論も有之

間敷旨申上、御止り不奉願候、左様御承知可被下候、

兎角諸省脈絡ヲ通はし候テ、一局一人ツ、ニても、其

人居り不申候テハ、中々一氣同心杯と申事、思ひもよ

り不申候、就中民部ハ世評通之訳ニテ、今形被置候テ

ハ、天下之人心離反ニ至リ、如何之形体ニ立至り候も

難計事ニ御座候、彈正も失策出来、是非基礎相立不申

候テハ、相濟不申候、

一外国交際之事件ハ、先無異ニ御座候、

一唐土より官員帰京、是も別条無御座候、晋も覬覦相

係之論とハ大ニ相違、先安心之模様ニ御座候、

一奥羽之形勢即今何事も無之、窮民実ニ憫然之至り候

得共、折角御手相付候央ニ御座候、

一来十六日於駒場御調練、御騎馬ニテ

御自三軍ヲ御卒被遊筈ニ御座候、兵員十八大隊、

右大略之形行申上候付、以御都合御申上可被下候、

以上、

四月十四日

大久保一藏

知政所御中様

六三六 藩士菊地主膳ノ系図並由緒書ヲ公用人

田中清之進ヨリ進致ス

四月十五日

鹿兒島藩士菊地主膳殿ノ系図並由緒書ヲ公用人田中清之

進ヨリ進致ス、

一系図 一卷

一由緒書 一冊

右ハ、菊地主膳祖先以来之由緒等取調、早々可差出

旨被仰渡置候、然ル処此節本行之通差越候付、相添

此段申上候、以上、

但当分次郎ト改名之段申越候、

鹿兒島藩

公用人

四月十五日

田中清之進

弁官

(系図一卷)
由緒書一冊 別ニ藏ス

御役所

六三七 諸軍ヲ駒場野ニ親閲シ、勅語ヲ賜フ

四月十七日

天皇駒場野ニ練兵ヲ親閲セラル、本藩第一大隊・第一砲
兵隊之ニ参加ス、練兵終テ勅語ヲ賜フ、

六三七ノ一
〇四月十日午丙

御布告写

来ル十五日、於駒場野練兵 天覽被 仰出候事、

六三七ノ二

〇四月十三日酉己

御布告写

来ル十五日、於駒場野練兵 天覽之処、十六日ニ御延
引、更ニ被 仰出候事、

六三七ノ三

〇四月十六日子壬

練兵 天覽雨天ニ付御延引、

六三七ノ四

大久保利通日記

十六日 月四

一今日

主上御調練之筈ニ付為御先着駒場野迄二字ヨリ参候得
共、就風雨御延引ニテ帰ル、吉井へ相訪、

六三七ノ五

〇四月十七日丑癸

練兵 天覽、

曉第五字 御出馬、御道筋外櫻田ヨリ赤坂通吉井從四
位邸、青山御嶽社両所御小休、第八字駒場野 着御、
第九字烽火一発ヲ相凶トシ、第一大隊ヲ始メ、諸隊各
順次ヲ以テ練兵、第三字ニ至テ畢ル、兵部省奏任官以
上 天顔ヲ拝シ、天杯ヲ賜フ、前原兵部大輔惣代ト
シテ之ヲ拝戴ス、次ニ諸隊長 天顔ヲ拝シ 天杯ヲ賜
フ、連隊長佐賀藩池田彌一惣代トシテ之ヲ拝戴ス、諸
隊熟練満足ニ被思召、益以可竭力旨

勅語アリ、

第四字号砲一声、還幸御催、前軍ヨリ次第ニ列ヲ進ム、

第六字 還幸、御道筋 御小休同前、

〇四月十八日寅甲

兵部省ニ於テ奏任官以上之面々、前日前原兵部大輔惣
代拝戴ノ 天杯順流拝戴ス、諸隊長モ亦池田彌一惣代
拝戴ノ 天杯順流拝戴ス、

軍令

一六軍規律嚴重之事、

一軍中一和之事、

一犯法八可処軍律事、

御行軍列

山口兵部史生騎馬

前軍 閱檢使兼伝令使

騎馬

閱檢使属

騎馬

第一連隊

斥候一中隊

蟻川兵部権大丞

小澤兵部大録

先鋒第一大隊

第二大隊

先鋒隊ヨリ出ツ

馬場兵部史生 同

鹿兒島徴兵

同上予備兵

当日不参

第二連隊

第三連隊

第三大隊

第四大隊

第五大隊

第六大隊

第一砲隊

第二砲隊

佐賀徴兵

藩兵合隊

同上

同上

鹿兒島徴兵

同予備兵

当日不参

伝令使属

唯兵部権大録騎馬

此間距離凡五町

中軍

伝令使兼閱檢使

伝令使属

第四連隊

同

佐藤兵部権大録騎馬

石井兵部権少丞 騎馬

田邊兵部権大録 騎馬

第七大隊

山口徴兵

閱檢使属

寺西兵部権大録騎馬

閱檢使

参謀官兼
伝令使長

第八大隊

号砲二門

高知徴兵

武庫

当日不参

同

廣岡兵部権大録 同

河村兵部大丞 騎馬

口付

久我兵部少輔 騎馬 従者一人

当日不参

口付 参謀官長
 有栖川兵部卿 騎馬
 山口藩 侍從 三十二騎
 高知藩 御旗 同
 御旗 持手
 宮内省掌 助勢三人
 御旗監 口付 澤 從 四位 騎馬
 同 萬里小路從四位 同

口付 長谷宮内権大丞 騎馬
 劍璽御辛櫃
 四辻宮内権大丞 同
 雨皮 同 同 同 同 同 同 同
 侍從 同 同 同 同 同 同 同
 御綱乘 御傘非藏人四人 高階大典医
 御馬 御綱乗役三人 伊藤大典医
 口付 中島中弁 從者一人
 口付 五辻少弁 同
 口付 德大寺大納言 騎馬 從者一人
 佐々木参議 騎馬 從者一人
 萬里小路宮内卿 騎馬 從者一人

口付 三條右大臣 騎馬 從者一人
 櫻井宮内権大録
 雨皮 高橋内膳少佑 雨皮 山本少典医 雨皮 下乘 下乘
 御茶弁当 御菓櫃 御替馬 御替馬 御替馬
 實薦 實薦 實薦 下乘 下乘 下乘
 實薦 實薦 實薦 下乘 下乘 下乘

口付 北垣大巡察 騎馬
 淺田少巡察 同
 口付 稻津彈正権大忠 騎馬 山田兵部大丞 騎馬 騎兵八騎 佐賀藩
 口付 閔檢使
 参謀官兼閔檢使長 騎馬 從者一人
 前原兵部大輔 從者一人

閱檢使兼給養長

船越兵部權大丞騎馬

岡本兵部大録騎馬

第五連隊

第九大隊

第十大隊

第三砲隊

第四砲隊

伝令使兼閱檢使

増田兵部少丞同

柳田兵部少録同

藩兵台隊

同上

佐賀徴兵

元一橋兵隊

第六連隊

第五砲隊

第十一大隊

第十二大隊

第七連隊

第十三大隊

第十四大隊

第八連隊

第十五大隊

第十六大隊

元田安兵隊

同上

元一橋兵隊

藩兵台隊

同上

同上

同上

伝令使兼給養病院院長

三宮兵部權少丞 騎馬

給養屬

大久保會計權大佑騎馬

長谷川會計少佑騎馬

大小荷駄

屬

平尾武庫正騎馬

同

鈴木兵部少録同

加藤會計少佑同

屬

内田武庫權少佑 騎馬

屬同

武庫

屬同

造兵

平山造兵少佑 騎馬

病院

溝口會計權大佑 騎馬

此間距離凡三町

病院掛

友平造兵少佑 騎馬

醫師

岩上兵部史生 騎馬

後軍

齋藤兵部史生同

閱檢使兼伝令使

閱檢使屬

第九連隊

南 兵部省掌同

佐野兵部少丞 騎馬

市川兵部少録 騎馬

第六砲隊

第十七大隊

第十八大隊

熊本兵隊

第三大隊

第四大隊

同屬
 閔檢使
 錦部兵部少録騎馬
 柴田兵部省掌騎馬
 後衛一中隊
 此間距離凡三町
 黒田兵部大丞騎馬
 同日不參
 松岡兵部少録同
 第十八大隊ヨリ出

御列外
 使番
 御板輿
 小佐治宮内権少録
 興丁八瀬
 二十八人
 使番

六三七ノ六
大久保利通日記

十日
月四

一 今朝川村入来、練兵就 天覽云々承ル、八字參朝、御
 前評議有之以下略ス、

十七日

一 今日

主上駒場野御調練被為在候ニ付、為御先着三字ヨリ差
 越、天上十時前御着、尤

御馬ニテ兵隊前後二列シ、実以未曾有之美事不堪雀躍
 候、マ、字帰ル、

六三七ノ七

吉井三峰日記
友美

四月朔日

〔謹傳〕
同断、

同月十七日

駒場野ニ於テ大調練、
 主上御乗馬ニテ 出御、出場ノ兵隊一万ニ及フト云フ、
 謹慎中ニテ出張スルヲ得ス、遺憾也、

六三七ノ八
〔第三回〕四月十八日(兵部省)

昨十七日練兵 天覽無滞被為済、別紙之通 勅語被為
 在、且小隊司令以上ハ御酒御流頂戴被 仰付、並兵
 隊一同ハ御酒肴下賜候条御趣意厚奉戴、益勉励可致此
 段申達候事、

(別紙)

勅語

諸隊熟練満足ニ候、益以可竭力候、

四月

六三七ノ九
三条實美公年譜

四月十七日 天皇諸軍ヲ駒場野ニ閱ス、公[○]三条扈從ス、

此日午前五時、天皇馬ニ御シ宮城ヲ出テ、櫻田門

ヨリ赤坂ヲ經テ、途吉井德春ノ邸及ヒ青山御嶽神社

ニ小憩シ、八時駒場野ニ着ス、既ニシテ烽火一發ヲ

期トシ、第一大隊ヨリ順次操練ヲ開始ス、銃砲ノ声

地ヲ動カシ、硝烟天ヲ蓋ヒ、日光暗澹タリ、畢テ兵

部省奏任以上ノ官員ヲ御前ニ召シ天杯ヲ賜フ、兵部

大輔前原一誠衆ニ代リ之ヲ拝戴ス、次ニ各隊長ヲ召

シ天杯ヲ賜フ前ノ如シ、連隊長池田彌一衆ニ代テ拝

受ス、時ニ公 旨ヲ宣シテ曰ク、諸隊熟練大ニ

勲旨ニ副フ、尔後益竭尽シ、以テ国威ヲ発揚スヘシ

ト、四時号砲一声 還幸ヲ催ス、六時 還幸、

駒場野練兵親閲ノ事

四月十七日朝八字、上御金巾子、御直衣・紅御袴着御

ニテ龍馬ニ乘御シ、錦蓋ヲ以テ玉体ヲ覆ヒ奉ル、騎兵

衛從シテ駒場野ニ臨幸シ給フ、具視先着シテ奉迎ス、

九字烽火一發ヲ合図トナシ、第一大隊^{鹿兒島}・第二大隊

^{同予}・第三大隊^{佐賀藩}・第四大隊・第五大隊・第六大隊

^{備隊}・第七大隊^{山口藩}・第八大隊^{高知藩}・第九大隊・第十

大隊^{各藩}・第十一大隊^{元田安}・第十二大隊^{元一橋}・第十三

大隊^{各藩}・第十四大隊・第十五大隊・第十六大隊^{各藩}・第

十七大隊^{熊本藩}・第十八大隊^{兵部省}・第一砲隊^{鹿兒島}・第二

砲隊^{同予}・第三砲隊^{佐賀藩}・第四砲隊^{元一橋}・第五砲隊^{元田}

隊^{熊本藩}・第六砲隊^{兵隊}、順次ヲ以テ操練ス、午後三時ニ至

リ終ル、上兵部省奏任以上官員ヲ御前ニ召サセラレテ

盃ヲ賜フ、兵部大輔前原一誠衆ニ代リ之ヲ拝受ス、又

諸隊長ヲ召サセラレテ天盃ヲ賜フ、連隊長池田彌一衆

ニ代リ之ヲ拝受ス、諸隊熟練御満足ニ思召サレ、益々

国家ノ為ニ竭力スヘシトノ勅語ヲ賜フ、六字東京城ニ

還幸シ給フ、是日士民途上ニ於テ鹵簿ヲ拝觀スルモノ

堵ノ如シ、士民親ク玉体ヲ拝シ奉ルハ此ヲ以テ始ト為

ス、

六三七ノ一〇
岩倉公實記

明治3年(1870)

六三八 吉井友實ヲ民部少輔兼大蔵少輔ニ任ス

四月十八日

吉井友實輔幸ヲ以テ、民部少輔兼大蔵少輔ニ任ス、

四月十八日略

同月十九日

任民部少輔兼大蔵少輔

右宣下候事、

月 日

太政官

右五辻弁官ヨリ御達難有御請致候事、

鹿兒島原士族

吉井藤原友實

幸輔
徳春

中略

同日明治三年
四月十八日

一任民部少輔兼大蔵少輔、

以下略ス

吉井弾正少弼

被任民部兼大蔵少輔候間、為御心得此段申入候也、

四月十九日

弁官

彈正台

御中

内務省

○中略

民部少輔

○中略

三年四月十八日内務大丞兼土木頭ヨリ兼任兼土木頭如故 吉井友實鹿兒島士
徳春又幸輔 三年十一月廿三日 允請民部大丞ニ任

大蔵省

○中略

大蔵少輔

○中略

三年四月十八日 吉井友實鹿兒島士
幸輔又徳春 三年七月十日罷 民部少輔ヨリ兼任

六三九 繪旨ヲ宣旨ニ改ム

四月二十日

朝廷ニ於テハ、從來ノ繪旨ヲ宣旨ニ改メ、諸寺官位・住職等諸願進致ノ方ヲ定ム、

【第三百】四月二十日（布）（太政官）

寺院並府藩県へ

從前之 綸旨、自今 宣旨ニ御改メニ相成候ニ付テハ、
諸寺官位・住職参内等諸願、總テ弁官へ可差出、執奏
有之向ハ、執奏ヨリ可差出事、

御沙汰書写

兵部省

海軍 天覽被 仰出候事、

但日限ハ追テ被 仰出候事、

【第三百】四月二十日（沙）

知恩院

別紙之通御沙汰相成候ニ付テハ、是迄兩局ニテ取扱候
処、自今直ニ弁官へ可差出事（別紙ハ第三
百一ニ同シ）

四月二十二日

朝廷ニ於テハ、弘曆ノ外頒曆ヲ嚴禁ス、

○四月廿二日午戌

御布告写

【参照】
【頭註】「四年太政官第三百十參看」
【第三百】十二月二十五日（布）（太政官）
諸寺院官位・住職等諸願執奏無之分ハ、直ニ弁官へ可
差出旨御達ニ相成候処、自今總テ各其管轄地方官庁へ
為差出、其官庁ヨリ弁官へ可差出事、

頒曆授時之儀ハ、至重之典章ニ候処、近来種々之類曆
世上ニ流布候趣、無謂事ニ候、自今弘曆者之外、取扱
候儀一切嚴禁被 仰出候事、

六四〇 海軍天覽ヲ令ス

六四二 外国人ニ対スル負債償却ノ目的ヲ録上セ

四月二十日

海軍天覽ヲ令ス、

○四月二十日辰丙

四月二十二日

府藩県ヲシテ、外国人ニ対スル負債償却ノ目的ヲ録上セ

シム

シム、

【第三百九】四月二十二日

〔頭註〕【第三百二十一】參看

府藩原官庁ニ於テ、將來未定之品物ヲ引当ニ致シ、外

国人ヨリ金銀借入之儀ハ、決テ不相成旨先般相達候、

就テハ是迄府藩県ニテ、外国人ヨリ負債有之分正金ニ

テ借入、又ハ品物買取ニ付代金延払其外共、現金返済

残相成候分都テ御取調ニ相成候条、別帳ニ照準シ借入

候約条之始末、引当之品類、返済之期月、利足之割合

及償却之目途共詳悉ニ認分ケ、來ル五月廿五日限り可

差出候事、

借財約条分類並償却目的

正金ヲ以テ借入ノ分

通用金銀何程兩・弗・ポンド但外國貨幣ヲ通用金銀ニ直セシ分ハ、
外國貨幣其外各國通貨其節ノ相場書明細ニ記入スヘシ、

一何年月日何訳ヲ以テ借入、何年月日ニ至リ一時返済欵、

又ハ月賦欵、年賦欵、又ハ何度ニ限り返済欵ノ事、

一借入中利足何割何分但月何分歟、年何割歟又ハ利付月賦返済欵、利

付年賦返済欵ノ事、

一月賦・年賦其外等ノ約束ニ相成ル分借入後、内金償却

有之欵ノ事、

一右借入ニ付、引当品何々ニテ何程、又ハ何ノ利益欵、

何ノ訳ニテ收得スヘキ金銀欵ノ事、

一 期月ニ至リ品物ニテ返済スヘキ欵、正金ニテ返済スヘ

キ欵ノ事、

但外國貨幣ニテ借入ニ相成ル分ハ、其品ニテ返済スヘキ欵、又ハ通
用金銀欵、又ハ品物欵ノ約条並ニ相場定方ノ対該等有之欵ノ事、

一 右借入ニ付約条証書ノ写、

但附録明細書等有之ハ、不残写取り相添ヘシ、

右金返済ノ手当ハ引当面ノ通ナル欵、又ハ何品又ハ何

ノ金又ハ何ノ利益ヲ以テ償却スヘキ旨、借用高二照シ

タル目途積リ書、

品物ニテ借入、又ハ品物買入ニ付、代金借入ノ分

何品船・砲・銃諸物品器械其外兵器 何程 但各品價訳ヲ以
テ記入スヘシ

此代通用金銀何程兩・弗・ポンド但外國貨幣ヲ通用金銀ニ直セシ分
外國貨幣其外各國通貨其節ノ相場書明細ニ記入スヘシ、

一何年月日何訳ニテ、何ノ約条ヲ以テ借入、又ハ何々

ノ品何程、何訳ヲ以テ買取、代金何程借入等ノ事、

一右借入・買取等ニナリシ品物、詳細ナル直段書、

一右返済ノ手続何年月日限一時償却欵、月賦・年賦欵、

其他利足ノ定等、前条ノ廉書ニ倣ヒ明細記入ノ事、

一借財セシ後、内金償却有無ノ事、

一引当ノ品類及期月償却ノ節、品物ニテ返済ノ筆欵、正

金ニテ返済スヘキ欵ノ約条ノ事、

一右借入ニ付テノ約条証書ノ写但前同断、右金返済ノ手

当借用高ニ照シタル明細ナル目途積り書、

前条正金借入ノ廉書ニ記入セシ如ク、逐件詳細ニ認分ツヘシ、

右之通借入高並返済目途共相違無之候也、

年号干支月日

何藩府
県

【参照】

【第三百十二】四月二十九日（弁官）

府藩県ニテ外国人ヨリ負債有之分、詳悉取調可差出旨、

過日分類書ヲ添相達候通負債有之分ハ勿論、無之分共

可届出候様、此段為念相達候也、

六四三 藩庁村田経満ヲ参政ト為ス

四月二十三日

藩庁ニテハ村田経満^新ヲ以テ参政ト為ス、

一参政

村田新八

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

四月廿三日

知政所

【参照】

道島正亮日記五月六日

一村田新八モ参政被 仰付候、御受迄ハイタシ、直ニ御断申出候ヨシ、右竹村断ナリ、

六四四 種痘法ヲ普ク施行セシム

四月二十四日

朝廷ニテハ種痘法ヲ普ク施行セシム、

○四月廿四日^庚午

御布告写

種痘之儀ハ濟生之良法ニ候処、僻陋之地ニ至テハ、今以不相行向モ有之趣ニ付、於府藩県末々迄行届候様厚ク世話可致事、

但施行之法則等取調度向ハ、大学種痘館へ申出伝習可致事、

六四五 吉井友實賞典ノ奉還ヲ願ヒ聴許セララル

四月二十五日

吉井友實稱賞典ノ奉還書ヲ提出ス、仍テ同二十七日ニ至リ聽許セラル、

吉井友實 三峰日記

同月四廿五日

賞典返上願書差出ス、

同月廿六日

得能旅宿ニテ棋会、岩公御出アル、

坂田潔西京ヨリ来ル、

同月廿七日

御賞典高上納御免相成候事、

六四六 貨幣私鑄赦宥仰出サル

四月二十九日

去歲五月、函館殘賊平定以前貨幣偽造ノ犯罪者ヲ赦ス、

○四月廿九日丑

御布告写

貨幣偽造之儀ハ、元ヨリ嚴禁ニ候処、国家紛擾之際於各藩往々私鑄シ、或ハ兵馬之費用ヲ資ケ、或ハ焼眉ノ急ヲ救ヒ、無智之小民ニ至テハ、其流布スルヲ見テ其

嚴禁ナルヲ忘レ、終ニ其罪ヲ犯候者モ不少趣、全ク御政令之未タ広布セザルヨリ、右様立到リ候ニ付、今般深キ 思食ヲ以テ、去歲五月箱館殘賊平定ヲ期トシ、其以前犯罪之者ハ已發覺、未發覺、已結正、未結正ヲ不問、一切赦宥可致旨被仰出候事、

六四七 罪案押印ニ小印ヲ用キシム

四月二十九日

朝廷ニテハ、諸藩ヲシテ罪案押印ニ小印ヲ用キシム、

〔第三百二十一〕四月二十九日(太政官)

(頭註)「五年司法省第四十五号参看」

府藩県ヨリ刑部省へ差出候罪案押印、自今小印一寸五分ヲ用可申事、

六四八 府藩県ヲシテ自今伺届等ニ庁ヲ用ルコト

莫ラシム

四月二十九日

府藩県ヲシテ、自今伺届等ニ庁ヲ用ルコト莫ラシム、

〔第三百二十四〕四月二十九日(民部省)

〔頭註〕「五年大藏第一二百五号参書」

先般被 仰出候府藩與公廨庁ト称シ候儀ハ、其管轄下
ヘ対シ、名称一定可致タメニ候処、伺届等ノ書面庁ノ
字ヲ記シ差出候向モ往々有之、右ハ不体裁ノ儀ニ候条、
右ノ旨趣可相心得旨、弁官ヨリ達有之候間、此段相達
候也、

六四九 藩庁勅命ニヨリ大参事及ヒ権大参事トシ

テ、桂久武以下ヲ任ス

四月二十九日

藩庁ニテハ、昨年制定シタル職制中、勅令ニヨリ執政ヲ
大参事ニ、参政ヲ権大参事ニ改メ、桂久武四以下五人ヲ
以テ権大参事ト為ス、仍テ是日之ヲ藩内ニ達ス、

執政之事 参政之事

一大参事 一権大参事

右之通依 勅命被相改、官等・職掌並秩禄等総て此内
之通被定置候条、向々江可申渡候、

四月

知政所

桂 四 郎

任鹿兒島藩権大参事、

右

宣下候事、

四月

太政官〔朱〕
(公文録旧鹿兒島藩同ニ
ハ任命ヲ四月三日ニ載ス)

右之通各通を以被 仰出、今日

御直ニ被 仰達候条、向々江可申渡候、

四月廿九日

知政所

六五〇 大迫貞清ヲ鹿兒島藩権大参事ト為ス

四月廿九日

大迫貞清〔善〕
右ヲ以テ、鹿兒島藩権大参事ト為ス、

鹿兒島県士族

大迫貞清

〔衛〕

伊地知正治
橋口彦次

大迫喜右衛門
伊集院直右衛門
橋口與一郎

明治三年庚午四月三日宣廿九日受

一任鹿兒島藩權大參事、

○以下
略ス

【参照】

参政

桂四郎以下六名

右權大參事可被仰付哉奉伺候、以上、

二月廿五日

鹿兒島藩知事忠義

弁官

御中

六五一 藩庁ニ駅通司ヨリノ達ニヨリ、諸道通行

印鑑ノ改正ヲ達ス

是月(四月)

藩庁ニテハ、京都駅通司ヨリノ達ニ対シ、諸道通行ノ印

鑑改正ノコトヲ藩内ニ達ス、

一印鑑十枚

右は一昨辰年、於京都駅通司ヨリ被仰渡、諸道通行印

鑑之儀、此節改印被仰付候旨、太政官ヨリ被仰渡候付、

諸所関所へ渡置候印鑑引替相渡候条、仕向之儀は、何

篇是迄之通敵重取扱可致候、此旨向々江申渡、地頭へ

も可申渡候、

但古印鑑之儀可差出候、

四月

知政所

六五二 藩庁ニ郷ヲ三俣及ヒ高城ト改称セシム

是月(四月)

藩庁ニテハ、二郷ヲ改称シテ三俣及ヒ高城ト唱ヘシム、

諸縣郡

高城之儀、

一三俣

右之通郷名被相替候、

高城郡

一高城

右郡名之片書可相除候、

右之通被 仰達候条、地頭へ申渡、可承向へも可申渡

候、

四月

知政所

六五三 藩庁鹿兒島神社旧別当支配所ヲ神主代ニ

管セシム

是月(四月)

藩庁ニテハ、鹿兒島神社旧別当支配所ヲ神主代ニ管セシム、

一鹿兒島神社旧別当彌勒院、以来神主代役宅被定置、屋敷之儀は、何分申渡迄之間、神主代より致支配候様、被仰付候条神主代江申渡、可承向江可申渡候、

但社家中学問所之儀、右役宅之内不差支所、是迄之

通可建置候、

四月

知政所

六五四 藩庁士分ノ過失アル者ニ親族共ヨリ自殺

セシムルヲ禁シ公裁ヲ仰カシム

是月(四月)

藩庁ニテハ、士分ノ過失アル者ニ親族共ヨリ自殺セシムルヲ禁シ、因テ過失アル者ハ、其犯状ヲ露ハシ公裁ヲ仰カシム、

一士分として大過之者戮辱ニ難忍、官裁を不俟して自殺

之拳ニ至り己之罪ヲ償ふ、実ニ廉恥ニ於ては無余儀識

ニ候得共、近来土着之士族、一朝失節重科ニ不至者を、

親族共狼狽忙遂して、割腹之時機ニ為臨候も有之由、

夫刑ハ国家大柄之一にして、私ニ不可行者候処、罪之

輕重を不顧、右次第畢竟刑名裁断艱難ニ処して、其身

悔悟改心を待候刑意ニも不協、粗暴之処分ニ陥り、心

得違之事情ニ付、向後親族共妄りニ割腹相働候儀無之、

時々犯状を露し、謹て可仰公裁候、此旨地頭江申渡、

向々へも不洩様可申渡候、

四月

知政所

六五五 藩庁篠原國幹ヲ参政ニ、其他地頭副役等

ヲ任命ス

是月(四月)

藩庁ニテハ、参政ヲ篠原國幹冬一ニ、南方・知覽地頭副

役ヲ日高強兵衛ニ、指宿・穎娃・山川・今和泉地頭副役

ヲ大迫清右衛門ニ命ス、

一参政

篠原冬一郎

右之通被 仰付候条、向々江可申渡候、

四月

知政所

員並俸禄ヲ定ム、

洋学局

一、一等諸生

一、二等諸生

定員拾五人宛

一南方・知覽地頭副役

南方士族

日高強兵衛

右年応勤日数四石之割を以、俸禄被成下候、

一、三等諸生

一、四等諸生

定員拾五人宛

右之通被 仰付候、

四月

知政所

右前条同断、三石之割を以俸禄被成下候、

一、五等諸生

定員四拾人

一指宿・穎娃・山川・今和泉地頭副役

山川士族

大迫清右衛門

右前条同断、式石之割を以俸禄被成下候、

右は、御吟味之訳有之、漢学局之振合を以、右之通被相

定候、左候て当分相勸居候人数は当分通にて、尔後定員

外欠席等之節は、不被召入定員相成候様、被仰付候条学

頭江申渡、可承向々江も可申渡候、

但是遊学等之面々跡扶持之儀、当分通にて、三等以下

之者は、三石之割を以被成下候、

四月

知政所

六五六 藩庁洋学局諸生ノ人員並俸禄ヲ定ム

是月(四月)

藩庁ニテハ、洋学局ニ於ケル一等諸生ヨリ五等諸生ノ人

〔稿本表紙〕

明治三年
五月 忠義公史料稿本(初稿)五

〔稿本にて補正〕

旨向々江可申渡候、

五月二日

知政所

六五七ノ一

一山口藩知事様、今日当地江御越ニテ、客屋江御滞宿相成筈候間、諸事御手当向之儀、先達てより御手当相成居候通、諸事不都合無之様可被取計旨、可承向々江可申渡候、

五月二日

知政所

六五七ノ三

道島正亮日記五月二日

一午五月二日、長州ノ長門守様被參候由、阿久根辺ニテ舟相痛、水上筋(陸路筋)ヨリ被參候由、四日ニハ磯へ被差越、
知事公モ御越候ヨシ、

五月二日

六五七 山口藩知事毛利廣封木戸孝允等ヲ従へ、

藩情視察ノ為メ鹿兒島ニ来ル

山口藩知事毛利廣封、木戸孝允等ヲ従へ、藩情視察ノ為

メ鹿兒島ニ来リ、各所ヲ巡覽シ、八日帰途ニ着ク、

六五七ノ一

一山口藩知事様、今日当地江御越ニテ、客屋江御滞宿之

筈候間、自然諸所御遊歴も可有之候付、万一於途中御

行逢申上候節は、聊不敬之挙動無之様可相心得候、此

六五七ノ四

木戸孝允日記

四月
同十七日

〔前略九〕

君上廿一日薩州御出の説を聞、依て杉參事〔重善〕孫七〔重善〕へ一書を送る、明日の答を待、

〔中略九〕

同廿一日 晴 一村の老少婦女来て、余の薩行を送る、

其他座客充滿、杉梅太郎・内藤作兵衛等も亦来る、七

字出立、随行來原・幸坂二姪、杉山等、岡村又小野三宅

宗僕來助なり、杉と氷上の植木に会し、同行の約あり、

依て植木に至り、杉と同行して勝阪松山堂に休憩し認

中飯、四字過貞永幽之助を訪ふ、岡・植木等至る、七

字 御茶屋に至り

君上に謁す、旅宿土井屋に至る、九字岡の旅宿米屋に

至る、岡酒飯を設け余等を俟、福原内蔵之允・原榮蔵・

三浦五郎・河野亀二郎等も亦来る、共に十二字過乙丑

艦に至る、東京出し書状岡に頼み、廣澤(真臣)に託す、

同廿二日 晴 四字出帆、十二字馬關着、越荷御旅館な

り、余於福屋に休す、今夕御微行にて角力御覽、余亦

陪従す、過日小松謙次郎より救育米買得之義に付、故

障来る、依て此度吉富藤兵衛(福二)を同伴出關、其始末を託

す、楊井謙三・越荷甚助等其他來訪する多し、

同廿三日 微雨 東風不得揚碇再揚陸、龜山八幡宮へ彦

太郎を携參詣し、商会宗像・入江等を訪ひ、又楊井に

至り酒飯を認め、二字定宿於福屋に至る、福原三蔵來

醉狂に及び云々あり、山縣・久保への書翰を昨日認、

又奇石を買得たり、

同廿四日 晴 七字過乘艦、八字揚碇、呼子港に至る、

碇泊、

同廿五日 晴 七字揚碇、四字長崎着艦上陸、原丁上(町九)、

方へ宿す、晚景

公に陪し、丁大浦辺を散歩し八字過帰宿、佐藤與三右

衛門等來り、共に歩行す、

同廿六日 晴 八字頃より製鉄場へ

公に陪して至る、只余之名を表し、始終

公御微行なり、十二字帰宿、二字過より又諏訪社へ陪

従して參詣す、写真師上野彦馬を訪ひ、上下一統連立

を写す、帰途千秋亭に至り小憩す、至晚帰宿、今晚上

艦の筈なり、天氣不定仍て又延引す、昨日青木久七方

へ人を遣す、今朝野村宗七來訪、宗七は当知果事なり、

花房虎太郎も亦來尋、

同廿七日 (略九)

同廿八日 (略九)

同廿九日 曇 七字揚碇、風濤甚穩、六字過蒸氣機械破

損、幸に風順、

五月朔日 暁薩摩串木野葉島に着す、機管容易不能修復、

終に本浦に上陸し、市來宿に至り上下相宿、薩藩有以下五百九

同二日 晴 七字市來宿を發し、十一字伊集院宿に小憩し、中食を認め、六字鹿兒島に至り、下町御会所に泊す、夜御旅館に至る、

同三日 晴 西郷を訪ふ、不在、夫人に逢ふて去、帰途御旅館に出ツ、当藩知事御出なり、十二字帰宿、橋口彦次・大迫喜右衛門・橋口與一郎來訪、三氏共権大參事なり、六字頃杉等と招魂場に詣、点燈後宿に帰る、

同四日 曇天時々雨 西郷吉之助來話、大山格之助も亦來る、共に旧年來の事を談して、又時事を相論す、今夕磯御茶屋へ御招なり、余等亦相從行す、製鉄場・機織場に至る、甚盛なり、諸藩中未聞如此、御茶屋におゐて酒飯の饗あり、庭中の風光尤佳、七字過帰宿、往來皆船、帰途船を淺瀬に触、風波の為に一時甚危、

同五日 風雨 八字過西郷を訪ふ、十二字前まで相談、帰途中井弘藏を訪ふ、暫相語、弘藏昨夜來て談話至鶏鳴、今夜亦同、今二字過城内へ

公を御請招あり、余等も亦相從、七字頃帰宿、夜マ政右衛門來て琵琶を彈す、

同六日 晴 八字過乗船、大迫眞藩暇乞に來る、大迫は九日

より東京行の由、依て大久保への一書を託す、西郷へも一書を残し置、

同七日 晴 此曉北風甚烈、一時艦更に不得進、日出稍穩、五字崎陽に着す、又上野屋に至る、池庄に至り竹田の小幅マの巻を求、

同八日 晴 九字

公に陪從して野村宗七を訪ふ、石田榮吉亦野村に來る、長崎の近情を聴、又時事を談す、野村は当県の知事、石田は同大參事なり、十二字過帰宿、三字頃林雲達を尋面談す、通弁神代時治來る、蘭コンシユルボードイソ尋來、留學生の事を談す、此夜十字過乗船、支那政府の近情を聴、

ボードイン部屋付榮之助能蘭語に通す、

同九日 晴 松島沖に至り夜明る、十二字過平戸の瀬戸を過る、五字過東北風起、時々微雨降る、玄海洋は尤穩なり、夜二字頃八十岡沖に碇泊す、

鹿兒島藩士吉利莊之助・柴山矢八を同艦す、至長崎同藩桂宗右衛門山口より來居、又三氏を馬關迄同艦、上陸山口に至る、

同十日 快晴 八字馬關に碇泊、九字

御揚陸、今夕勝坂へ御出なり(以下略)

同十一日 風雨(以下略)

同十二日 晴 七字揚碇 十二字三田尻着艦、

公直に御揚陸、御帰山也(以下略)

(史籍協会叢書本戸孝九日記にて補正)

六五八 藩庁篠原國幹ニ参政ヲ命シタルモ固辞シ

タルニヨリ大隊長ヲ命ス

五月二日

藩庁篠原國幹ニ参政ヲ命シタルモ固辞ス、因テ之ヲ允シ

後八日ニ至リ、更ニ大隊長ヲ命ス、

六五八ノ一

篠原冬一郎

右は参政被仰付候処、遮て及固辞情実難默止

思召候、依之願之通被成御免候条、向々江可申渡候、

五月二日

知政所

一大隊長

篠原冬一郎

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

五月八日

知政所

六五八ノ一

道島正亮日記五月

一篠原冬一郎へ参政被 仰付候処、直様我々如キモノ、

参政ハ勤ルモノニテハ無之ト申候処、伊地知正治ト段

々議論有之、大隊長ト参政ハイツレカ重キカト申候付、

夫ハ参政力重キトテ、御書付ヲ投捨ツ、ト立候テ、直

様大隊長共々御断申出候由、

右竹村嘶ナリ、

六五九 上野景範ヲ民部権少丞ト為ス

五月二日

上野景範介敬ヲ以テ、民部権少丞ト為ス、

鹿兒島県士族

上野景範

敬介

○中略

同年明治三年五月三日

一任民部権少丞、

○以下略ス

弘化元年甲辰十二月生

六六〇 西郷隆盛ノ位記返上ヲ聽許セラル

御中

鹿兒島藩

五月三日

永井五百介

西郷隆盛、先キニ提出ノ位記返上ヲ聽許セラル、

鹿兒島県士族

西郷隆盛

吉之助

右は兼て米国江為留学被差遣候処、向後外学生共へ可
差送学費等配達方、右五百介一手ニ引受為取扱申度、
右ニ付ては兼て被下置候学費之外、為御手当老ケ年三
百ドルラル被下置候様仕度、此段奉伺候、

○中略

庚午五月七日

同年明治三年五月二日

一位記返上願之通被思食候事、

六六一ノ二
午五月七日

外務省

○以下略ス

弁官

御中

六六一 英国留学生戸田三郎学費金並在米永井五

山口藩

音見清兵衛

百介等御手当金等ニ関スル伺

五月七日

英国留学生戸田三郎学費金並在米永井五百介等御手当金

等ニ関シ伺、

六六一ノ一

午五月七日

外務省

弁官

庚午五月七日

右は年来英国都府ニ留学罷在、西洋之事情とも熟知い
たし居候由ニ付、同国ニ罷在候御国学生共へ可差送学
費等配達方、右清兵衛一手ニ引受、為取扱申度、右ニ
付ては、為御手当老ケ年英貨貳百ポント被下置候様仕
度、此段奉伺候、

六六一ノ三
午五月

外務省申立之別紙御廻シ申入候間、御見込御答可有之候也、

庚午五月八日

弁官

大蔵省

御中

六六一ノ四

戸田三郎英国留学中学資之儀、最前何等申立も無之、
〔頭書末〕付ケ札
此節ニ至リ被下度ト之儀ハ、如何之申立ニ候得共、外

国留学之儀ニ付、無余儀事情ニも相聞候間、此度之儀は申立之通、三條侍従外随從之者同様被下、尔後前頭不束之儀無之様御達し有之度、且山口藩音見清兵衛・鹿兒島藩永井五百介へ、彼国学資配達方為取扱度、依之御手当之儀トも、是又申立之通可被下候、尤不案内之学生等、不都合取計候テハ不宜候間、学費ノミニ無之、都テ添心之儀御達し相成候様致し度、此段及御報答候也、

庚午五月二十七日

大蔵省

弁官

御中

〔付ケ札〕
「申立之趣ヲ以、外務省へ」
〔朱印〕

相達し候間、同省ヨリ申出

受付掛

候節、宜可取計候事、

六六一ノ五

午五月廿八日

外務省

弁官

御中

三條侍従江随從、英国都府ニ留学罷在候戸田三郎、並同国留学生山口藩音見清兵衛江学費其他、米国留学生鹿兒島藩永井五百介江ハ、別段御手当被下置候様仕度段、此程奉伺候処、何分之御沙汰無之候へ共、海外隔離之場所ニテ、差送方時日も相掛候間、早々御下知御座候様仕度、依之別紙写相添、此段猶相伺候也、
庚午五月廿八日

附札

無余義筋ニ付、申出之通学費金等被下候間、大蔵省可示合、尤已後ケ様之者有之節ハ、前以調落無之様可致、音見清兵衛・永井五百介へハ学費配達方ノミニ無之、不案内之学生等不都合之取計等無

之様、心添可致段も可相達候事、

御達書写

六六一ノ六

午閏十月

自今郭内外諸邸宅中ニ於テ、一切発銃被差停候事、

坊城大弁殿

外務卿

六六三 駅々並川場ニ免租地ヲ附スルヲ廢シ免租

税高ヲ以テ交附ス

三條公卿へ随從致し候家從戸田三郎義、名前洩ニ相成居候ニ付、從者同様壹ケ年英金百五十ポント被下度旨

当六月中相伺候処、伺之通御聞濟相成候ニ付、当正月

より被下候積を以、大蔵省より受取相廻し候間、此段

取調申入候也、

庚午閏十月

五月七日
駅々並川場免地ニ地所ヲ附与スルヲ廢シ、免租税高ヲ以テ交附ス、

○五月七日
午庚

御沙汰書写

府藩県

尚以頃日御尋有之候中御門寛曆家從城連へ、学費被下度旨、中御門從四位より願出之通御聞届相成候義
ニ候ハ、城連へ当年は当七月より十二月迄半年分被下可然存候也、

六六二 郭内外諸邸宅中発銃ヲ嚴禁ス

五月七日

郭内外諸邸宅中発銃ヲ嚴禁ス、

○五月七日
午庚

六六四 藩庁定場外ニ於テ猥ニ銃器ヲ弄フコトヲ

嚴禁ス

五月八日

藩庁ニテハ定場外ニ於テ、猥ニ銃器ヲ弄ブコトヲ嚴禁ス、
一銃器取扱之儀ニ付ては、追々被

仰出置候事候得共、比日ニ至リ緩せ相成、童子等翫具
同様取扱、間ニハ怪失等も有之、不輕失体之事情、定
場所ニおゐて致稽古候儀は、当然之事情得共、右通遊
道具同様取扱候儀、甚以不可然事候付、父兄等より相
諭し、已来大小共銃器妄ニ取扱、定場外ニおゐて致発
砲候儀、空発迎も屹と令嚴禁候、且巡察檢事之儀は勿
論、御達并年長之輩は、兼て加見聞、不守之輩有之節
は、名前承届無用捨可申出候、此旨不守之者は、当人
は勿論、父兄等屹と迷惑候間、尚又致教示候様被仰
達度御座候事、

五月

監察局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

五月八日

知政所

六六五 親王・華族ノ府藩県学校ニ於テ修学スル

ヲ許ス

五月八日

朝廷ニテハ、親王・華族、府・藩・県学校ニ於テ修業ノ申
請ヲ許ス、

○五月八日癸酉

御布告写

親王・華族之面々、府・藩・県学校ニ於テ修業之儀、
願之上可被差許候事、

今般親王・華族、府・藩・県遊学被差許候ニ付テハ、
左ノ条件可相心得事、

一遊学願之儀、先方へ打合之上、年数相限り弁官へ可
差出事、

一年限中無抛事故ニヨリ、転学或ハ帰省等之節ハ、其
旨前以可願出候事、

但父母及其身等病氣ニテ差掛リ候節ハ、後日可届
出事、

一遊学中其学校之諸規則ヲ守リ、教官ノ指令ニ従フ可
キハ勿論、専ラ清慎恪勤ヲ以テ旨トスヘキ事、
一遊学中、貴賤ニヨリ待遇之差等無之候事、

但親王ハ別段之事、

一年限相満退学帰京之節ハ、必ス考試可有之候事、

六六六 藩庁門閥・家従・士族登用ノ制規ヲ定ム

五月九日

藩庁門閥・家従・士族登庸ノ制規ヲ定メ、其処分ヲ違ス、
一此節御一新ニ付、旧一所持家来之儀、私領出身之者ハ、
定府ニテモ家筋正敷其所ヘ立帰候テ、御軍役相勤候者
ハ、御吟味之上其所士族被仰付筈候処、市中中宿或ハ
余郷中宿等ニテ、御軍役等難相勤者共迄モ、皆同士族
成申出候向モ有之、右ハ全趣意違之事故、右体中宿ニ
テ士役不相調者ハ、旧来之通家来ニテ被召置候条、地
頭并副役等ハ勿論、郷ノ役職面々右件ニ基キ能々取シ
ラヘ可申出旨、且亦前条家来ノ内、諸郷附属者等之願
意相立候者モ、前件之趣意相立候者モ、前件之趣意通、
家筋ハ勿論、勤方等之訳ヨリ附属長不被仰付候テ、不
相叶者取調可申出候、此旨地頭并会計総裁ヘ申渡、可
承向ヘモ可申渡候、

五月九日

知政所

六六七 来十五日招魂社祭ニ付、陸海軍ヲシテ祭

砲ヲ行ハシム

五月九日

来十五日招魂社祭ニ付、陸海軍ヲシテ祭砲ヲ行ハシム、
六六七ノ一
第三百四十七五月九日（兵部省）

第三大隊 第四大隊

第五大隊 第六大隊

第一遊軍隊 第三遊軍隊

来ル十五日、招魂社御祭事ニ付、同日九字出張、於社
前祭砲可致執行候事、

但着到之上ハ、同所出張当省官員江可相届、発砲時

刻ハ、於同所可及差図候事（同月十一日鹿兒島・山口佐賀、
高知四藩徴兵ヘ達ス、本文九字
ヲ、八字
ニ作ル）

六六七ノ二
第三百五十二五月十四日（兵部省）

軍艦一同ヘ

明十五日ヨリ同十八日マテ招魂社大祭ニ付、無差支艦
々ハ、来ル十八日祭砲執行可致候、且参詣之儀ハ可為

勝手事、

明治3年(1870)

但御酒被下候間、十八日十二字、會計司へ受取之者
可差出事、

六六七ノ三

吉井三峰日記
友美

略上

同月十五日

招魂祭ニ付社參、大久保ト神田邸へ行、
略又下

六六八 兵部大丞黒田清隆ヲシテ開拓次官ト為ス

五月九日

兵部大丞黒田清隆介ヲシテ、開拓次官ト為ス、

開拓使士族元鹿兒島

黒田源清隆

了介

○中略

同年明治三年五月九日

一任開拓次官、

同日

一叙従四位、

〔卷〕
同日

一樺太專務被仰付候事

○以下略ス

北海道庁

○中略

開拓次官

○中略

三年五月九日、兵部大丞ヨリ任 黒田清隆

鹿兒島士七年八月二日
開拓長官ニ任

六六九 藩庁権大参事俸禄納付願ヲ聴許ス

五月十日

藩庁権大参事俸禄納付願ヲ聴許ス、

一俸禄七拾俵

右ハ権大参事俸禄之内、

右之通差上度願之趣有之、当時勢無余儀訳合付、願之
通被成御免候条、可承向々へ可申渡候、

明治三年五月十日

知政所

六七〇 藩庁郷名ヲ勝目・山田ト改称ス

五月十二日

藩庁郷名ヲ改称シテ、勝目・山田ト唱ヘシム、

川邊郡山田

一勝目

右之通郷名被召替候、

始羅郡

一山田

右郡名之片書可相除、

右之通被 仰達候条地頭へ申渡、可承向々へ可申渡候、

五月十二日

知政所

六七二 藩庁神職ハ神祇道修練ノ者ヲ撰用ス

五月十四日

藩庁、神職ハ出願ニ及ハス、尔今神祇道修練ノ者ヲ撰用スルコトヲ達ス、

一神祇道志願之者、神職成願書差出候得共、右志願之者

其道心得候向へ入門、神前祭式等致修行候儀ハ其通ニ

テ、神職成不及願出候、左候テ以来諸神社・社祠等之儀ハ、神祇道修行練達之内ヨリ人撰ヲ以被仰渡候、此

旨可承向へ可申渡候、

五月十四日

知政所

六七二 陸軍国旗章並諸旗章及兵部省幕・提灯ノ

印ヲ定ム

五月十五日

陸軍国旗章並諸旗章及兵部省幕・提灯ノ印ヲ定ム、

五月十五日^{庚辰}

御布告写

陸軍国旗章並諸旗章、兵部省挑灯・幕等、図面之通ニ候条、府藩県一般紛敷印相用申間敷候事、

(図面ハ略ス)

六七三 弾正台ヨリ府藩県監察掛ニ探索ヲ命スル

コトヲ令ス

五月十五日

府藩具監察掛ニ、彈正台ヨリ探索ヲ命スルヲ知会セシム、

【第三百五十六】五月十五日(太政官)

(頭註)「第三百九十四參看、四年太政官第三百三十六ヲ以彈正台廢止」

府藩具監察掛之者江時宜ニヨリ彈正台ヨリ探索等申付

候儀モ可有之條、此段相達候事、

【参照】

【第三百九十四】六月九日(彈正台)

府藩具監察懸リ之者へ時宜ニ寄り、当台ヨリ探索等申付候儀モ可有之段、去ル五月中御達相成候ニ付、各藩監察掛之人名取調、差出候様触下諸藩へ申達、触頭ニテ取纏メ、早々当台へ可差出候事、

六七四 中村半次郎ノ一大隊帰藩ス

五月十五日

中村半次郎桐野ノ一大隊帰藩ス、
六七四ノ一

吉井三峰日記
友夷

同月五月十六日

中村半次郎ノ一大隊帰藩ス、此便船ニ幸(吉井)感差下ス、今
年先考三回忌、北堂十三回忌ニ当レハナリ、

○以下
略ス

六七四ノ一

別紙之通鹿兒島藩願出候間、願之通早々御沙汰相成候様仕度、此段申進候也、

庚午五月九日

兵部省

弁官御中

藩邸へ召置候予備兵之儀ハ、兼テ御届申上置候通、万々一非常等之節、充分之御警衛相勤度趣意ヲ以、差出候儀ニ御座候処、方今四方無事ニテ、格別御用モ被為在間、(敷之)奉恐察候間、御暇被下候様仕度奉願候、已上、

鹿兒島藩

公用人

庚午五月九日

田中清之進

兵部省

御中

当藩予備兵御暇之儀、別紙ヲ以テ奉願候通御座候、右ニ付自然願通御暇被下候義ニ候者、横濱ヨリ異船雇入差下積候処、長崎ヨリ上陸仕候テハ、兵粮彈藥等其他多分之荷物ニテ纒之海陸トハ乍申、人夫船賃等不謂莫

大之失費相及候事ニテ、当時極々疲弊之折柄、実以當惑之至ニ御座候、就テハ御規則も被為在候義ニ候得共、此内徵兵交代之節、異船ヲ以御差送被下候例も御座候間、旁別段之御評議ヲ以テ、鹿兒島表迄直乘相成候様被仰付被下度、此段奉願候、以上、

鹿兒島藩公用人

庚午五月九日

田中清之進

兵部省

御役所

六七四ノ三
鹿兒島藩予備兵、是迄永々自費ヲ以差出、御警衛致居候所、此節四方無事之時ニ相成候ニ付、御暇願之通被仰付候、就テハ先度徵兵交代之節同様、異船ヲ以テ直ニ同藩マテ差送候義、別段之御評議ヲ以御聞届相成候ニ付、於其省ニ御心得可有之、仍テ此段申入候也、

五月九日

弁官

兵部省

御中

右徵兵交代之節、外国船ヲ以差送候儀ハ、午三月兵

部省へ達アリ、

六七四ノ四

鹿兒島藩知事

其藩予備兵為非常御警衛、昨年来差出置候段、神妙ニ被思食候、今般願之通御暇被下候ニ付、此旨相達候事、

庚午五月

太政官

右之通今十三日相達候条、為心得申入候也、

庚午五月十三日

弁官

兵部省御中

追テ鹿兒島藩ヨリ差出候願書式通、致返却候事、

六七四ノ五

午五月九日

外務省

弁官

御中

鹿兒島藩予備兵、是迄永々自費ヲ以差出、御警衛致シ居候処、此節四方無事之時ニ相成候ニ付、御暇願之通被仰付候、就テハ此度徵兵交代之節同様、異船ヲ以直ニ同藩迄差送候儀、別段之御評議ヲ以、御聞届相成候ニ付、於其御省御心得可有之候、依テ此段申入候也、

庚午五月九日

六七五 官・華族・門跡尼・御所家来ノ名前・宿所等

ヲ録上セシム

五月十七日

宮・華族・門跡尼・御所家来ノ名前・宿所等ヲ彈正台ニ録上セシム、

〔第三百六十四〕五月十七日(留守官)

〔頭註〕〔第五百六十六(依り消滅)〕

宮・華族・門跡尼・御所家来名前・宿所等、当春以來届有之外、早々取調当台へ可届出候、尤主人東京へ家族引越候向ハ、留守家来ノミ可相届、主人東京在勤ニテ家族末タ引越無之向ハ、家来名前・肩書ニ東京在勤・当地在勤ト記分可差出事、

但以後家来交代、或ハ新規召抱又ハ暇遣候ハ、其

節々当台へ可届出事、

庚午五月

彈正台

右之通彈正台ヨリ申出候間、相違候事、

【参照】

〔第五百六十六〕九月五日(留守官) 彈正台

〔頭註〕〔四年太政官第三百二十六ヲ以テ彈正台廃止〕

其台京都出張所被止候事、

但巡察官員滯京、時々交代可致事、

庚午七月二十五日

太政官

右之通ニ付相違候事、

六七六 華族他所入學ノ輩ニ路費・支度料・月手当ヲ給付ス

ヲ給付ス

五月十七日

華族他所入學ノ輩ニ、路費・支度料・月手当ヲ給付ス、

〔第三百五十七〕五月十七日

大藏省

〔頭註〕〔第四百九十六ヲ以テ御人撰ノ外ハ資金等下賜ヲ止ム〕
華族之面々庶子ニ至ル迄、他所入學被 仰付、並仍願被 仰付輩共ニ、路費・支度御規則之通被下、且滯在中当分月手当トシテ、三十兩宛被下候事、

【参照】

〔第四百九十六〕七月二十九日(太政官) 華族

〔頭註〕〔四年太政官第五十一ヲ以テ海外留學ノ外學資ヲ給セズ〕

是迄華族面々庶子ニ至ル迄、他所勤學之輩へ、學資金並ニ路費・支度金等被下候処、自今御人撰被 仰付候外ハ、不被下候事、

六七七 藩庁馬牛改方日限及場所ヲ指定ス

五月十七日

藩庁馬牛改方日限及改場所ヲ指定ス、

一六月廿二日

一番・二番方限士族

一同 廿三日

三番・四番方限右同

一同 廿四日

五番・六番方限右同

一同 廿五日

附士以下社家・足輕・附屬

一同 廿七日

三町々民并居住者

右ハ鹿兒島中乘馬并荷馬仕牛馬、來年六月厩掛出納奉

行へ改方被仰渡置候処、被廢候後、当局ヨリ被仰渡候、

然処当局之儀、牛馬率出之場所無之候付、於軍馬方ニ

改方被仰渡置候、於其儀ハ右日割通四ツ時ヨリ八ツ時迄

無延引、軍馬方へ率出候様向々へ被仰渡置候、此段申出

候、以上、

但軍馬役へ引合候処、差支無之段承知申候、

午五月十七日

軍事局

右之通被仰付条、向々へ可申渡候、

五月

知政所

六七八 彈正大忠海江田信義ノ謹慎ヲ積ス

五月十九日

彈正大忠海江田信義ノ謹慎ヲ積ス、

六七八ノ一

鹿兒島県士族

海江田信義

武次

天保三年五月生

○中略

同年明治三年五月十九日

一謹慎被免候事、

同月廿二日

一依願免本官、

但位記返上ノ事、

同日

一御用有之、東京滞在被仰付候事、

同月廿三日

一勤仕中励精ニ付、目錄ノ通下賜候事、

明治3年(1870)

一直垂地 一卷

○以下略ス

六七八ノ二

五月十九日 申甲

御沙汰書写

五月十九日

知政所

六八〇 彈正少弼黒田清綱ヲ徳島藩ニ遣シ、藩士

私闘ノ情状ヲ審糺セシム

五月廿二日

彈正少弼黒田清綱嘉納ヲ徳島藩ニ遣ハシ、其藩士私闘ノ情

状ヲ審糺セシム、
六八〇ノ一

鹿兒島県士族

黒田清綱

嘉納

天保元年庚辰四月生

謹慎被免候事、

各通

池田彈正大弼

門脇彈正大忠

海江田彈正大忠

足立彈正少忠

六七九 藩庁権大参事伊地知正治ニ公議人ヲ兼ネ

シメ、上京セシム

明治三庚午三月廿二日

一御用有之ニ付、東京滞在可致候事、

太政官

五月十九日

藩庁ニテハ、権大参事伊地知正治ニ、当職ヲ以公議人ヲ

兼ネシメ、上京セシム、

同月廿七日

一任彈正少弼、

同日

伊地知正治

一叙従五位、

同年五月廿二日

一今般徳島藩内紛擾ニ付、出張被仰付候事、

右当職ヲ以、公議人被 仰付、

此涯上京被 仰付候条、向々へ可申渡候、

同年七月徳島藩ヨリ帰京之節

一晒布 一匹

金 一万匹

右下賜候事、

以下略ス

六八〇ノ二

〔頭註〕「徳島藩兵須本ヲ焚掠ス」

○上月十三日、徳島藩兵老臣稲田邦殖の邑須本（邦

殖九郎兵衛と称し、世々蜂須賀の老臣にして三万石を管し、

淡路須本に居る、時に邦殖東京に在り）を焚掠す、初め藩

士と稲田家の士と相悪し、維新の際、邦殖頗る王事に

功あり、藩士等其藩屏に列せられんとするを猜忌する

より此挙あり、八月十二日に至り、私闘の罪を判し、

首謀平瀬伊右衛門・大村純安・多田楨吾・南堅夫・小

川錦司・三木壽三郎・瀧直太郎・藤岡治郎大夫・新居

與一郎・小倉富三郎の十人を斬に処し、其党百十六人

を配流・禁錮・謹慎等に処す○以下略ス

六八〇ノ三

檄文

先般 王政御復古、天下三治一途之御所置被 仰出、

知事様ヲ奉初藩主一同遵奉ノ処、稲田九郎兵衛召仕ノ者共、旧来ノ弊習ニ泥ミ、種々不条理申立、恐多モ

天朝ヨリ被 仰出候御藩律ニ憤リ候段、全ク朝敵ノ所

為、速ニ可加誅戮之処、百方御説諭被為遊候得共、難

有御趣意ニ狃、更ニ悔悟無之姿ニ徒党ヲ結ヒ、終ニハ

分藩等願出候段、全家ヲ以国ニナサント欲スルニ、逆

謀顯然全露、一ニハ奉輕蔑

天朝、二ニハ 知事様ヲ凌侮シ、三ニハ旧主九郎兵衛

ヲシテ、不忠不義ニ陥イラシム、其罪天神地祇ノユル

サ、ル処ニテ、所謂乱臣賊子人ノ得テ可誅者ニ候条、

御兩國ノ人民方向ヲ決シ、同心戮力速ニ賊徒ヲ勦攘シ、

上為

天朝逆賊ヲ除キ、下三百年來國家莫大ノ御鴻恩ヲ奉報

者也、若賊徒ヲ匿置候者於有之ハ、賊徒ト可為同罪事、

但タトヒ賊徒タルニモ、改心ノ上ハ其罪ヲ赦シ遣候

感力懸リナレハ、市郷ノ人民猥リニ動揺イタシ間敷筈、

心得違之者有之ニヲヒテハ、屹ト咎可申付者也、

明治三年午五月

阿波兵隊

六八一 奏任官以下参内ノ節名刺差出方ヲ定ム

五月廿二日

奏任官以下御用参内ノ節、名刺差出方ヲ定ム、

〔第三回六十五〕五月二十二日 (太政官)

〔頭註〕四年太政官第二十八回第三百五十六卷
自今諸官省・府藩県奏任以下官員、御用参 内之節、

總テ当番官掌ヲ以テ、名刺弁官江可差出事、

但諸官省詰所参入之輩モ、總テ名刺当番官掌江差出

参入可致、政庁江罷出候節ハ、本文之通可相心得

事、

六八二 藩庁猪獭発銃ノ乱暴ヲ戒飭セシム

五月廿八日

藩庁猪獭発銃ノ乱暴ヲ戒飭セシム、

比日猪狩等ニテ怪失イタシ、死傷ノ類不寡、右ハ畢竟

驟ヲ不定、騒卒放流スルヨリ出候儀ニテ、人命ニ相関

リ、輕カラザル次第候条、尔后不輕失候者ハ、一涯重

キ御取扱被 仰付、屹度騒卒ノ儀無之様可入念候、此

旨諸向ヘ不洩様致通達、諸郷ヘモ可申渡旨地頭ヘ可申

渡候、

五月廿八日

知政所

六八三 集議院開院ニ付議員ニ公平協議セシム

五月廿八日

集議院開院ニ付、議員ヲシテ公平協議セシム、

六八三ノ一
〇上略

五月二十八日、集議院ヲ開ク、公三条之二臨ム、

納言・参議・諸省卿・集議院長官及ヒ諸藩公議人皆列

ス、公御沙汰書ヲ長官大原重徳ニ授ケ、次テ諮問書ヲ

下シ議セシム、

集議院規則 (明治二年八月二十日達)

一 集議院中別ニ一局ヲ設ケ、天下之進言献策有用之材ヲ

總ヘ、寄宿セシメ、其德行才能ヲ考試スヘキ事、

一 諸藩士及農工商トモ、待詔出仕可被 仰付者ハ、一応

議院之考試ヲ經テ任用スヘキ事、

但人物ニヨリ特命之擢挙ハ此限ニ非ス、

一 議院ニ關係ノ議事アル節ハ、長官・次官・判官正權ト

モ、太政官ニ參預可致事、

一 議員中ヨリ幹事十二名ヲ公擢シ、正權判官ニ準シ可相

勤事、

但權判官之次席タルヘク候、

一議員中ヨリ名指シ撰挙有之節ハ、議院ニ於テ長官・次官・正権判官・幹事等、其材能可否ヲ熟議之上可申出事、

但任用之官等職務トモ、前以内諭可有之事、

一議員中名指ナク、挙任被 仰出候節ハ、長官・次官・

正権判官・幹事等二名ヲ撰定シテ可伺出事、

一議員中ヨリ撰挙之節ハ、奏任以上ニ可相任事、

建言之輩、是迄待詔院へ罷出候処、自今集議院へ参上

可致事、

六八三ノ二

【第三百七十五】五月二十八日（太政官） 議員

今般開院ニ付テハ、昨年 詔書ノ趣ヲ遵守シ、愈以公

平協議 聖旨ニ奉答候事、

【参照一】

【第五百八十二】九月十日（沙）（太政官） 集議院

閉院被 仰出候事、

【参照二】

大久保利通日記

廿八日五

一今日集議院就開院（待詔院ヲ廢シ、集議院ヲ開ク、内田政

風談話記參看）、九字參朝仕、右府公始一同出席、十一
字頃議員一同着座、諸省卿出座、右府公ヨリ御沙汰書
長官江相渡、長官読之、御下問書等渡ス、判官読之、
十一字退散○以下
略ス

六八四 府藩県ニ令シテ堤防・用水・悪水路等修繕

費ヲ管内社寺領ニモ公平ニ賦課セシム

是月（五月）

府藩県ヲシテ交互管轄ノ堤防・用悪水路修繕費用ノ賦課
ヲ公平ナラシム、

【第三百八十二】五月（民部省） 府藩県

府藩県

（頭註）四年太政官第四ニヨリ消滅

堤防並用悪水路等、府藩県交互管轄ノ場所修繕費用ノ
儀ハ、總テ石高割ヲ以出金可致筈ノ処、社寺領中無謂
出金不致向有之候得共、用悪水路等ノ設無之テハ難叶
候条、尔来修繕目論見ノ節ハ、右等不公平無之様、總
テ石高二応シ出金取調可伺出候、此段相違候事、

六八五 諸藩ニ令シテ石高・戸口ヲ録上セシム

明治3年(1870)

是月(五月)

諸藩ヲシテ石高・戸口ヲ録上セシム、

〔第三百八十四〕五月(民部省)

諸藩

〔頭註〕四年太政官第百七十九ヲ以テ戸籍法ヲ定ム
戸籍編製ノ儀ハ、追テ一定ノ規則相定可相達候得共、

夫迄ノ処別紙雛形ニ從ヒ、在来ノ人別帳ヲ以、戸数・

人員其外総計不洩様取調、早々可差出候事、

(雛形)

一管轄高 何万石

一戸数 何万戸

一人員 何万人

男

女

内

華族 何人

但男 何人

女 何人

同戸数 何戸

士族 何人

但同断

同戸数 何戸

卒 何人

但同断

平民 何人

但同断

社務人 何人

但男 何人

女 何人

僧 何人

但同断

尼 何人

穢多 何人

但同断

非人 何人

但同断

六八六 藩庁船舶積入米穀ニ制限ヲ置クコトヲ達

ス

是月(五月)

藩庁ニテハ、船舶乘入米穀ニ制限ヲ置クコトヲ達ス、

一御当地並諸郷共、大阪並瀬戸内等へ差越候節、往来候

船中飯米積入越候得共、過分ノ石数候間、当地ノ儀ハ米穀無多事候付、往来日数百日位モ相掛、商用連モ可相成丈、其内七八十日位ニテ為相濟候様精々相働キ、

遠近ノ往来モ右ニ準シ日数取究、船中乗組人数ニ応シ、一日一人ニ六合位ノ賦ニテ、片道丈ノ飯米積入、其外

不足ノ処ハ於其所買入候様、左候ハ、数艘ノ船々、片道丈ノ飯米連モ相応ニ可及石数候付、夫丈ハ一統ノ融通ニ可相成候間、右通被仰渡度、御取締ニ付テハ、追

々被仰渡置候通ニテ、飯米積入方願出候節ハ、商法承届候上、尚又往来日数モ致吟味、積入差免石数等ノ儀

ハ、一涯厳密致改方候モ、不締ノ廉有御座間敷候付、諸郷浦々モ右同様被仰渡度候事、

五月 會計局

右之通被仰付候条、向々へ可申渡候、

五月 知政所

六八七 藩庁医学校・病院職員ノ分担・等級ヲ改メ

生徒ニモ等級及勤怠ニヨリ食料ヲ給ス

是月(五月)

藩庁ニテハ、医学校・病院ノ職員ノ分担・等級ヲ改定シ、更ニ生徒ニモ亦等級及勤怠ニヨリ、食料ヲ給与セシム、

医学校兼病院第一等

- 一本草学教授 一人
 - 一産科学 同 一人
 - 一眼科学 同 一人
 - 一外科学 同 一人
 - 一内科学 同 一人
 - 一病理学 同 一人
 - 一薬剤学 同 一人
 - 一動物植物学 同 一人
 - 一解剖学 同 一人
 - 一医監 二人
- 右同第二等
- 一小学校教頭 一人
 - 一病院執事 二人
 - 一翻訳書取締 二人
 - 一器械取締 一人
 - 一薬局取締 一人

明治3年(1870)

一 藥局掛	二人
一 史生	二人
一 二等授読	
右同第七等	八人
一 種痘取締	一人
一 藥局定詰	
右同第六等	三人
一 一等授読	
一 処方掛	八人
一 器械頭	
右同第五等	二人
一 外診掛	
一 生徒取締兼塾長	
右同第四等	二人
一 藥局取締助	
右同第三等	二人
一 病院執事助	一人
一 翻訳書取締助	二人
一 器械取締助	二人
一 藥局取締助	二人

一 器械掛	十二人
一 看頭	四人
右同第八等	
一 三等授読	
一種痘掛	十五人
右ハ御吟味ノ訳有之、此節改定有之通被	仰付候条、
調役ヘ申渡、可承向ヘモ可申渡候、	
但	
兼ネテ勤方ノ向キハ、俸禄外別段季禄被成下候、	
五月	知政所
一 授読ハ諸生二十人ニテ、一人ツ、被	仰付候、
一 生徒取締一人、塾生三十人ニテ一人ツ、被	仰付候、
一 当直医ノ儀ハ、第四等ニ被	仰付、左候テ同等以上、
又ハ右以下人柄ヲ以兼帯被	仰付候、
一 一等諸生	
右年中応勤日数、三石ノ割ヲ以被成下候、	
一 二等諸生	
一 三等諸生	
右同断、式石ノ割ヲ以被成下候、	

右ノ通被 仰付候条、向々へモ可申渡候、

五月

知政所

六八八 外城方ノ役衙ヲ新置スルコトヲ達ス

是月（五月）

外城方ノ役衙ヲ新置ノ達、

一旧御高御支配方跡並旧糺明方跡合併ニテ、新ニ外城方

被召建候条、地頭へ可申渡、可承向へモ可申渡候、

明治三年五月

知政所

〔稿本表紙〕

明治三年
六月 忠義公史料稿本(初稿)六

〔稿本にて補正〕

六八九 来十四日氷川祭ニ付神事中重軽服者並僧

尼ノ参朝ヲ止ム

六月二日

朝廷ニ於テハ、来十四日氷川祭ニ付、御神事中重軽服者・

僧尼ヲシテ、参朝ヲ憚ラシム、

〔第三百八十六〕六月二日(布)(太政官)

来十四日氷川祭ニ付、十二日酉刻ヨリ十五日朝ニ至リ

御神事候事、

但重軽服者並僧尼之輩、参 朝可憚事、

六八九ノ一

鹿兒島県士族

大久保利通

一蔵

○中略

同年明治三年六月九日

一氷川社宣命使被仰付候事、

同月十三日

一氷川社宣命使被仰付置候処、依願被免候事、

○以下略ス

六九〇 藩庁諸島風災ニ付、賑恤及藩庁用途補充

ノ為メ、諸官ノ俸禄減給ヲ達ス

六月三日

藩庁ニテハ、昨年来諸島風災ニ付、賑恤及藩庁用途補充

ノ為メ、来ル本年七月ヨリ来未年三月迄、諸官ノ俸禄減

給ノ事ヲ達ス、

任職ノ面々当時態奉察、官府ノ御用途、或ハ窮生御賑

恤等ノ為、俸祿差上度追々願出、且軍務局ヨリハ別段

内

申出趣モ有之、各依官職其勤勞酬報ノ訳ニテ、夫々等

五拾俵

級ヲ以被下置事候付、申出通ニハ不被仰付候、乍然昨

一三百俵

年諸島依風災、御藩内生産第一ノ砂糖兎耗、故ニ即今

内

會計ノ道甚難渋ニ付、不被為得止当七月ヨリ来未三月

六拾俵

迄、諸官ノ俸米別表箇条之通減少被仰付候、左候テ大

四等官

屯米ハ、総テ別段御軍備用ニ被差分置候旨、被 仰達

一八拾俵

候条、向々へ可申渡候、

内

但

拾五俵

此已前御家老職等相勤、且昨春廢官ノ面々養俸ノ

一百式拾俵

儀モ、別表ニ準シ、来三月限減少被仰付候、尤右

内

屯米御軍備用差分候付テハ、取調向ノ儀追テ委細

式拾四俵

取調申出候様、會計奉行へ可申渡候、

内

明治三年六月三日

知政所

一百五拾俵

三等官

五等官

一貳百俵

一五拾俵

内

内

四拾俵

五俵

一貳百五拾俵

一七拾俵

内

拾俵

一百俵

内

貳拾俵

六等官

一三拾五俵

内

不及減少

一五拾俵

内

五俵

一七拾俵

内

拾俵

七等官

一三拾俵

一四拾俵

右式行不及減少

一五拾俵

内

五俵

右内書之通減少被 仰付候、

一同俵五俵ヨリ以下ノ俸米被下置候人、仮令差上度願出

候テモ、御採用不被 仰付候、

一諸官ノ内世禄多ク、右等級ノ全禄被下置候面々、右減

禄差引キ過上有之候ヘハ、其ノ員数丈ケハ減少被

仰付候、

一仮令ヘハ俸米貳百俵被下官職ノ者、世禄多ク百六拾俵

以下被下置候ヘハ、減禄不被 仰付候、尤モ余ハ準之、

以上

六九一 大山綱良ニ権大参事同様事務取扱ヲ命ス

六月三日

是日、大山綱良ニ権大参事同様事務取扱ヲ命ス、

大山格之助

右者権大参事奏任ノ筈候間、政府ヘ出勤外権大参事同

様御用致取扱候様、被仰付候条、向々ヘ可申渡候、

但

俸祿ノ儀ハ是迄ノ通被下置候、

明治三年六月三日

知政所

六九二 国事犯罪者ヲ寛典ニ処セシム

六月八日

朝廷ニ於テハ、国事犯罪者ヲ寛典ニ処セシム、

○六月八日卯癸

府藩県へ御沙汰書写

凡国事ニ係リ、順逆ヲ誤リ、犯罪ニ至リ、府藩県ニ於テ咎申付有之候者、並未タ処分ヲ経ザル分トモ、去巳年九月被 仰出候御趣意ニ基キ、罪之輕重ニ応シ、其管轄府藩県ニ於テ、寛典之処置可致旨被 仰出候事、但禁錮・預ケ等 朝廷ヨリ御処分相成居候者、且死 流難宥見込之者ハ、可伺出候事、

刑部省

別紙之通、府藩県へ 御沙汰ニ相成候条、為心得相達

候事、

六九三 兵庫縣權知事税所篤ヲ正六位ニ叙ス

六月九日

兵庫縣權知事税所篤長藏ヲ正六位ニ叙ス、

鹿兒島縣士族

税所藤原篤

篤信
長藏

○中略

同年明治二年七月十七日

一任兵庫縣權知事、

同明 三年六月九日

一叙正六位、

○以下略ス

六九四 民部省ニ東京長崎間伝信機ヲ建造セシム

六月十日

民部省ヲシテ、東京ヨリ長崎マテ伝信機ヲ建造セシム、

六九四ノ一
○六月十日巳乙

御沙汰書写

民部省

伝信機之儀、追テハ全国諸道へ御建造可相成候得共、

差向東京ヨリ長崎迄ノ間、御建造相成候ニ付、其旨相心得、其省ニ於テ右建造方速ニ取計可申事、

六九四ノ二

大久保利通日記

七日明治三年六月

一今朝訪副島子、九字參朝、
一大隈大輔ヨリ長崎迄伝信機ヲ通シ候事、楮幣紙註文之事、民部出仕之人ヲ召候事、

○以下略ス

【参照一】

【第五百七十四】九月七日

民部省

〔頭註〕「第七百五十五ヲ以テ事務ヲ工部省ニ屬ス、六年一月竣功」大蔵省

先般御決定之通、横濱・長崎之間、陸地伝信機速ニ可取建事、

【参照二】

【第七百五十五】閏十月二十日(布)(太政官)

〔頭註〕「十八年太政官第七十号達ヲ以テ工部省廃止」工部省

掌褒勸百工及管鉞山・製鉄・燈明台・鉄道・伝信機等、

右之通被建置候事、

六九五 諸藩ニ軍防・軍務両局及軍務官等ノ諸達

書類等ヲ兵部省ニ進致セシム

六月十日

諸藩ヲシテ、軍防・軍務両局及軍務官等ノ諸達書類等ヲ兵部省ニ進致セシム、

【第三百九十六】六月十日(兵部省) 諸藩

今般記録編輯ニ付テハ、戊辰正月ヨリ己巳九月迄之際、左之通諸達以下夫々部類ヲ分、無漏脱書取写書相添早々可差出、此旨相達候事、

一軍防局・軍務局・軍務官・大総督府・鎮将府ヲ始メ、

諸道総督並各所参謀等ヨリ諸達書類、

一諸道戦争之形状届書之類、

一都テ諸願届届書之類、

六九六 藩庁足輕勤役退避ニ付テ嚴達ス

六月十二日

藩庁足輕勤役退避ニ関シ嚴達、

足輕ノ儀、札明局並上下会所詰等申付候ヘトモ、無故

苦情申立、御断申出候モノトモ多々有之、御用差支相及、右ハ足輕相当ノ勤方ニ候処、右次第甚タ不都合ノ至リニ候条、尔後無故御断申出候モノハ、御免ノ上御切米取揚申付候条、兼テ此旨相心得候様、足輕中へ可申渡置旨、兵器奉行へ申渡、糺明局其外可承向へモ可申渡候、

六月十二日

知政所

六九七 弾正大巡察岸良兼養ヲ長崎表へ差遣ス

六月十三日

弾正大巡察岸良兼養七之丞ヲ長崎表へ差遣、

鹿兒島県士族

岸良兼養

七之丞

○中略

同年明治三年五月七日

一東京在勤可有之事、

同年六月十三日

一御用有之、長崎表被差遣候事、

○以下略ス

六九八 楠社造営ヲ兵庫県ニ委シ、金穀等寄附ハ

同県へ納メシム

六月十七日

楠中將楠木正成 社造営ヲ兵庫県ニ委シ、金穀等寄附ハ之ヲシ

テ同県へ納メシム、

六九八ノ一

楠社御造営ニ付、別紙之通御布告有之候様致度、且水

戸藩へ別紙之通御通達有之度存候、可然御評議可給候也、

午五月廿三日

神祇官

弁官

御中

一昨春浪華ニオイテ、被

仰出候楠中將社湊川へ御造営之儀、今度兵庫県へ御委

任ニ付、宮・百官・華族以下士族・卒・庶人ニ至迄有

志之者、金穀或材木等寄附之儀、兼テ御沙汰之通被差

免候間、同県へ可相納候、員数書ハ当七月迄ニ両京之

内神祇官へ可差出事、

六九八〇二

水戸藩

辛未四月十五日

弁官

伝達所

楠社造営之儀、其藩ヨリ願出候儀モ有之候得共、藩制

御改革ニ付テハ、不被及

御沙汰候事、

但金穀等御手伝之儀ハ、御布告之通可相心得事、

大久保参議殿

木戸参議殿奉承

副島参議殿奉承

大隈参議殿奉承

佐々木参議殿奉承

齋藤参議殿奉承

六九八〇三

神祇官

楠社造営ニ付、別紙之通

御沙汰相成候間、為心得相達候事、

庚午六月十八日

太政官

一昨辰年春被 仰出候楠中将社御造営之儀、今度兵庫

県へ御委任ニ付、官・百官・華族以下士族・卒・庶人

ニ至ル迄、有志之者金穀或材木等寄附之儀、兼テ

御沙汰之通被差免候間、同県へ可相納候、員数書ハ当

七月中両京之内、神祇官へ可差出事、

庚午六月

太政官

六九八〇五
楠社御造営ニ付、金穀等寄附有無、当月中ニ可被届候

也、

辛未四月十五日

弁官伝達所

岩倉大納言殿承候

徳大寺大納言殿承候

嵯峨大納言殿承候

家令中

六九八〇六

記

六九八〇四

楠社御造営ニ付、金穀等寄附有無、当月中ニ可被届出候也、

御 達 之 趣 奉
敬 承 候 也

四月十五日

六大臣家

令力
答

六九八〇七

楠社御造営二付、金穀等寄附有無、当月中二可被届出候、

辛未四月十五日

弁官伝達所

蒲生少史殿

金井少史殿

蜷川少史殿

井上少史殿

松井少史殿

谷森少史殿

亀谷少史殿

土方少史殿

莊村少史殿

六九八〇八

楠社御造営二付、金穀等寄附有無、当月中二可被届出候也、

四月十五日

儀式掛

山下權少史殿〔朱印、以下同〕 横田權少史殿 〇

井上權少史殿敬承

佐藤權少史殿 〇

川上權少史殿敬承

市川權少史殿敬承

依田權少史殿敬承

江口權少史殿 〇

工藤主記殿敬承

丹羽瀨主記殿敬承

宇都宮主記殿敬承

松山主記殿 〇

鵜飼主記殿 〇

小林主記殿 〇

日高主記殿 〇

西脇主記殿敬承

金谷主記殿 〇

大島主記殿敬承

福永主記殿 〇

松田主記殿 〇

湯口主記殿敬承

堀主記殿 〇

櫻井權少史殿 〇

安川權少史殿敬承

小西權少史殿敬承

多田權少史殿敬承

杉山權少史殿敬承

九鬼主記殿敬承

木本主記殿敬承

溝口主記殿 〇

服部主記殿 〇

大熊主記殿敬承

飯田主記殿敬承

渡邊主記殿敬承

伴主記殿拜承

本多主記殿敬承

手塚主記殿拜承

佐藤主記殿拜承

松山新主記殿敬承

松本主記殿敬承

兒玉主記殿 〇

伊藤主記殿敬承仕候

明治3年(1870)

追て早々御回達可有之候也、

^{六九八ノ九}楠社御造宮二付、金穀等寄附有無、当月中二可被届出候也、

弁官

四月十五日

伝達所

江澤主記殿「〇」	丹野主記殿敬承	額田官掌殿	伊藤官掌殿
馬場主記殿「〇」	清原主記殿「〇」	七條官掌殿	市原官掌殿
伊藤主記秀堅殿拜承	三谷主記殿「〇」	古川官掌殿 <small>(本)〔歸省中御座候〕</small>	石山官掌殿
山本主記殿拜承	手島主記殿拜承仕候	山下官掌殿	長谷川官掌殿
水谷主記殿「〇」	西山主記殿拜承	山田大舍人殿	神岡大舍人殿
橋本主記殿拜承	加藤主記殿「〇」	小野田大舍人殿	桃井大舍人殿
田中主記殿拜承	松岡主記殿「〇」	濱田大舍人殿	長崎大舍人殿
河合主記殿「〇」	高橋主記殿敬承	日根野大舍人殿	鈴木大舍人殿
野本主記殿「〇」	伊藤新主記殿「〇」拜承	榑原大舍人殿	松原大舍人殿
		柴田大舍人殿	設楽大舍人殿
		越智権大舍人殿	藤森大舍人殿
		山名権大舍人殿 <small>(西京在勤二御座候)</small>	大賀権大舍人殿
		吉見権大舍人殿	山形権大舍人殿
		小野権大舍人殿	青山権大舍人殿
		桃井権大舍人殿	本多権大舍人殿
		土岐権大舍人殿	多羅尾権大舍人殿
藤井舍人殿	五味舍人権助殿	安部権大舍人殿	三淵権大舍人殿
南舍人権助殿	原尾官掌殿	渡邊権大舍人殿	福鎌権大舍人殿
横川官掌殿	上野官掌殿	淺井権大舍人殿	戸田権大舍人殿
橋本官掌殿	澤官掌殿	窪権大舍人殿	小本権大舍人殿
佐竹官掌殿	吉岡官掌殿		

藤田権大舍人殿 森 権大舍人殿

高齊権大舍人殿 原岡権大舍人殿

花村権大舍人殿 土岐新権大舍人殿

桃井新権大舍人殿 利倉権大舍人殿

時岡権大舍人殿 宮澤権大舍人殿

竹中権大舍人殿 神保権大舍人殿

坪内権大舍人殿 戸川権大舍人殿

松原権大舍人殿 桃井権大舍人直孝殿

波川権大舍人殿 永田権大舍人殿

玉虫権大舍人殿 堀田権大舍人殿

追て使部以下小舍人ニ至迄、其局々より御達可有之候也、

六九八ノ〇 楠杜御造宮ニ付、金穀等寄附有無、当月中ニ可被届出候也、

辛未四月十五日 弁官伝達所

坊城大弁殿承候

田中中弁殿承候

土方中弁殿承候

山口中弁殿承候

江藤中弁殿

五辻少弁殿承候

多久少弁殿

長松少弁殿

林 少弁殿

内田少弁殿

中村少弁殿承候

家令執事申

六九八ノ一 楠杜御造宮ニ付寄

金数並人名簿

〇一千匹〔朱以下同じ〕

大蔵省在動中已納

〇一金千疋納

〇一金三千匹納

〇莊村少史〔采以下同じ〕

松井少史

江口権少史

〇生田権少史

〇平尾官掌

〇横川官掌

〇上野官掌

〇橋本官掌

〇澤官掌

明治3年(1870)

- 金三千匹 白井隆藏以下
九拾四人 納
- 同五百匹 納
- 同百匹 納
- 同五百匹 納
- 同五百匹 納
- 同五百匹 納
- 同五百匹 納
- 同老兩 納
- 同老兩 納
- 同六百足 納

- 佐竹官掌 ○
- 吉岡官掌 ○
- 額田官掌 ○
- 伊藤官掌 ○
- 七條官掌 ○
- 市原官掌 ○
- 古川官掌 ○
- 石山官掌 ○
- 山下官掌 ○
- 長谷川官掌 ○
- 使部一同 ○
- 谷森少史 ○
- 木本主記 ○
- 蒲生少史 ○
- 龜谷少史 ○
- 蜷川少史 ○
- 横山少史 ○
- 杉山権少史 ○
- 依田権少史 ○
- 桜井権少史 ○
- 佐藤権少史 ○

一金式千匹 納

- 同三百足
- 一金三百足 納
- 一同 納
- 一金千足宛 納

- 井上権少史 ○
- 多田権少史 ○
- 小西権少史 ○
- 巖谷大史 ○
- 小川大史 ○
- 楠田大史 ○
- 作間権大史 ○
- 日下部権大史 ○ (采印)
- 川北権大史 ○ 納
- 長権大史 ○
- 小杉権大史 ○ (采印)
- 伊藤主記明德 ○
- 野本主記 ○
- 三谷主記 ○
- 清原主記 ○
- 堀主記 ○
- 松山主記章 ○
- 兒玉主記 ○
- 溝口主記 ○

(四年乙)
二年未
五月廿五日

兵庫県史生

小林守一 (印)

一金貳百匹 納

○工藤主記 ○
○九鬼主記 ○
○山本主記 ○

○一金貳百足 納

○松岡主記 ○

一金五百足 納

○河合主記 ○

○一金百足、納

一金三百匹

○井上少史 ○

○

一金三百足 納

○山下權少史 ○

○

一金五百足 納

○安川權少史 ○

○

一金三百足 納

○川上權少史 ○

○

一金五百足 納

○市川權少史 ○

○

一金三百匹 納

○土方少史 ○

○

一金百足 納

○横田權少史 ○

○

一金百匹 納

○大熊主記 ○

○

一金百足 納

○丹野主記 ○

○

一金貳百足 納

○飯田主記 ○

○

〔貼紙〕
証

一金二百三兩老朱

錢三百拾六文

右は楠社御造管寄附金正ニ請取申候、以上、

○一同貳千足 納

○一同五百足 納

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○小舎人中 ○

○南舎人權助 ○

○五味舎人權助 ○

○内田少弁 ○

○長松少弁 ○

○林少弁 ○

○多久少弁 ○

○中村少弁 ○

○五辻少弁 ○

○金井少史 ○

○高橋主記 ○

○橋本主記 ○

○西山主記 ○

○松田主記 ○

○本多主記 ○

○西脇主記 ○

○小林主記 ○

○江添主記 ○

○一同三千疋 納

○正權大舍人中 ○

一金七拾五兩

嵯峨大納言殿

一巻兩三步巻朱卜

〔朱印〕
○三百拾六子直丁○

一金七拾五兩

徳大寺大納言殿

○一金三万疋

○徳大寺大納言 ○

一金七拾五兩

岩倉大納言殿

○一同三千疋

○坊城大弁 ○

一金五拾兩

大久保参議殿

○一同二千疋

○山口中弁 ○

一金五拾兩

佐々木参議殿

○一同二千疋

○田中中弁 ○

一金五拾兩

齋藤参議殿

○一同二千疋

○土方中弁 ○

一金百貳拾八兩三分巻朱

坊城大弁殿以下直丁迄

一同二千疋

○江藤中弁 ○

錢三百拾六文

之分

ノ貳百五兩貳步巻朱

右は楠杜御造宮寄附金正ニ落手仕候、以上、
〔四年カ〕
二年末七月二日 兵庫県史生小林専一〔朱印〕

一金三百疋宛

楠杜御造宮ニ付、右之通寄附仕候、此段御届奉申上候、
以上、

証
一金巻兩也

辛未四月

権少史佐藤 梶
権少史櫻井能監

右は楠杜御造宮寄附金四千五百疋之中、悪札御引換書
面之通正ニ落手仕候、以上、
〔四年カ〕
二年末
八月四日 兵庫県〔朱印〕

弁官

御伝達所

太政官

御伝達所

証

御中

一金百兩

三條右大臣殿

六九九 上野景範ヲ大蔵大丞ト為シ、特例弁務使

トシテ英国ニ派遣ス

六月十七日

上野景範敬ヲ大蔵大丞ト為シ、特例弁務使トシテ英国へ

派遣セシム、

六九九ノ一

鹿兒島県士族

上野景範

敬介

弘化元年甲辰十二月生

○中略

同年明治三年五月三日

一任民部権少丞、

同年六月十七日

一任大蔵大丞、

同日

一叙従五位、

同日

一為特例弁務使、英国へ被差遣候事、

同月十八日

一今般英国オリエンタル為替会社へ全権ヲ与へ、同国ホ

(Hachio Masao Jan)
ラーシヨ・ネルソン・レー氏ト取結ヒシ借財ノ条約、

不当之所為糺正セシムルニ付、若彼国ニ於テ同会社難

決事件有之候得ハ、便宜専断之特権御委任被仰付候事、

同日

一今般英国ニ於テ、新幣紙製造監督被仰付候ニ付テハ、

名工相撰ヒ、精良緻密、贗模ノ患不生様、方法便宜処

置御委任候事、

○以下略ス

六九九ノ二

○六月十七日壬

御沙汰書写

上野大蔵大丞

為特例弁務使、英国へ被差遣候事、

前島租稅權正

上野大蔵大丞、為特例弁務使英国へ被遣候ニ付、差副

被 仰付候事、

六九九ノ三

○上略

同月四月二十三日、内国運送の便を開き、且つ物産を興

隆し、以て一般經濟の発達を期図し、英国倫敦東洋銀

〔頭註〕外國ニ向て始めて公債を募集す
 行に委嘱し、英國人民より九分利付外國公債を募集す、

之を外國旧公債と稱し、我國より外國に向ひ公債募集の嚆矢と爲す、是より先き明治二年、民部大輔大隈重信・大蔵少輔伊藤博文共に改正局にあつて、才名一世に高く、諸般の立案多くは二人の手に成る、而して二人夙に鐵道は文明の利器たるを傳聞し、速に之を内地に布設せんと欲し、案を立て、閣議に提出し、進て其説明の任に當る、是に於てか閣議紛々として容易に決せず、或は其設計の如何を詰り、或は其經費の予算を問ふ、二人相顧みて杳然たり、少焉あつて曰く、計算の事須らく精確を要す、乞ふ、明日に於て其詳細を説明せんと、乃ち退出、直に前島密を訪ひ、速に設計方法及予算案を作らんことを囑す、前島未だ嘗て鐵道の事を知らず、然とも二人固く乞て止まず、是に於て前島、乃ち自ら經驗ある器械の相場等を参考し、以て東京横濱間鐵道臆測書なるものを草し、此案翌日閣議に上り、満場の賛成を得て可決す、偶々バース・オルダルの一人英國人ホラシヨ・ネルソン・レイなるもの來朝す、レイは大山師にして、夙に鐵道を支那内地に布設せんとの説画あつて、果す能はずして漂來し、英國

公使パークスの紹介を以て、鐵道布設の事を談す、伊藤等誤認し、英國の大豪傑ネルソン將軍來れりと、乃ち深く信して其設計の事を詰り、且つ費用の出所なきに苦む旨を語る、レイ冷笑して曰く、憂ふる勿れ、外債を募らば百万の資本立ろに調はんと、二人大に喜び、直に政府に稟し、年一割二分の利子を以て、五百万圓の外國債を募集する事に決す、由て其十一月民部卿伊達宗城・民部大輔大隈重信・大蔵少輔伊藤博文等をして、レイと約條を締結せしむ、然るにレイ發後數月にして、倫敦タイムスの紙上に於て、日本外國債の件を掲載して曰く、日本政府は関稅收入を抵当と爲し、以て外國債を募集し、東洋銀行今や盛に之を売り出せりと、大蔵省翻譯掛塩田三郎一読喫驚、直に該新聞を携へて当局者に示す、是に於て上下愕然として其意外に驚き、流伝百出、或は伊藤・大隈は売國の姦賊なり、速に其罪を正して嚴責を加ふへしと、請求する者あるに至れり、是を以て当路者も亦、始めて其非を覺り、大蔵権大丞上野景範をして命を齎し、英國に航せしむ、上野即日出帆の郵船に搭して、該國に赴き、先つ東洋銀行に到り、告ぐるに我が國情を以てし、速に前約を

取消さんことを請求す、是に於て銀行員手を打て大笑して曰く、卿等未だ公債なるものは、其債主の輾転して、一定せざることを知らざるか、又契約の効、無効と云ふ事を知らざるか、若し飽くまで前約を取消さんと欲せば、速に之を買戻すの外なし、然とも是策の最も迂なるものなりと答へ、少しも我が請求に応ずるの色なし、上野稍々其説に服するも、亦使命を空くして歸るに忍びず、乃ち公債買戻の事を新聞紙に広告す、是に於て市価一月にして騰貴すること五磅、上野復た大に驚き以為、此勢を以て進むときは、額面に幾倍の騰貴を来すや知るへからすと、因て其買戻を中止す、然ともレイとの契約は之を解き、更に募集の事を東洋銀行に委嘱せしと雖も、仍ほ其債主に対する償還の期約は、曩にレイの定むる所の如く、此公債の償還は、日本帝国海關稅及鐵道純益を以て之に充て、且つ其利子は年九分と為し、而して証書發行の額は英貨百万磅即我金貨に換して四百八十万円にして、利子は明治三年八月より之を付し、元金は六年八月より毎年英貨拾万磅、我金貨に換算して金四拾八万八千円宛、即十五年八月に至り、全く償還を了するものとす、而して其

發行価格を、百磅証書に対し九十八磅とし、其応募額發行高を超過するときは、倫敦シュロールドル会社に於て、応募高に割付け、余分は之を払戻さしめ、該社をして其払込金を受取らしむるものとす、其当時収入せし所の金額は、英貨九十八万磅、之を我金貨に換算すればは四百七十八万二千四百円とす、而して彼レイは、此公債の利子歩合を、我に対しては年一割二分に約定し、応募者に対しては年九分に約定し、其三分は自己の得益となすの目的なりし、然とも彼と解約せしに由り、其解約金即賠償として、償還年間十二箇年の利子の差二拾二万五千磅に対する九分の利、即二万二百五十磅（我金貨に換算して、九万八千八百二十円）を、レイに交付せり、而して此公債募集費は、英貨二万九千七百五十磅（我金貨に換算して、十四万五千八百八十円）を要せり、^(ママ)金其応募金の用途及使用の結果を、左に表せん、此公債元金の償還は、有期年額償還の法に拠るものにして、其支払はシュロードラス会社をして之を取扱はしめ、明治四年二月より満期の年、即十五年八月に至るまで、倫敦に於て元利金及手数料・雑費等總計八百八十六万九千五百十三円二十六錢四厘を支出し、漸く償

還を了せり、

費用目 使用金高

鉄道建築費	一、四六四、〇〇〇	東京横濱間の鉄道及諸器械
独国フランクフォルトに注文せし紙幣製造費	五三五、五九一	一億三百五十三万七千三百五十九円二十銭ニ宛る紙幣の製造
銀塊及一分銀購求費	一、九八二、〇九五	銀塊百九万二千六百八十七オンス五分一分銀百七十八万二千六百七十五個六分七厘
英国に於て発行したる我国公債証書買入費	五一六、九九一	
理事官其他に交付したる諸費	二九、八八四	
募集費払込金に対する月割利子及解約費	二二一、七二二	
銀塊購求及公債証書買入に関する諸費	三二、一一三	
合計	四、七八二、四〇〇	

七〇〇 待詔局ニ建議セシ小事件ハ、各官省府県

ニ廻致セシム

六月十九日

待詔局ニ建議セシ小事件ハ、各官省府県ニ之ヲ廻致セシム、

ム、

〔第四百十二〕六月十九日(太政官)

先般待詔局被為開、卑賤之者ニ至ル迄、御為筋ノ儀献

言可致様、御布令相成候ニ付、追々存付申出候、就テハ重大ノ事件ハ、上裁ヲ経夫々御取捨相成候得共、諸官省府県限ニテ可否決定可相成程ノ事件、申出候族ハ、待詔局ニ於テ一応尋問ノ上、右建白書へ局印ヲ押シ、集議院ヨリ諸官省及府県へ可相廻候、右ハ言路洞開、下情壅蔽無之様トノ御旨趣致貫徹候様、可取計旨被仰出候事、

七〇一 掘基ヲ開拓監事ト為ス

六月廿五日

掘基清之丞ヲ開拓監事ト為ス、

鹿兒島県士族

掘基

清之丞

○中略

(朱)
「同月明治二年七月八日

一建開拓使」

同月

一御用掛申付候事、

同年八月

一任大典、

同年九月

一御用有之、南上申付候事、

同年十一月廿日

一任開拓権判官、

同三年庚午正月八日

一叙正六位、

同年六月廿五日

一任開拓監事、

○以下略ス

七〇二 藩庁軍役高出米ヲ秋季定総ニ復ス

六月廿八日

藩庁軍役高出米ヲ秋季定総ニ復ス、

御軍役高出米総之儀、去々辰秋ヨリ、定総ノ仕向被

仰付置候処、去夏一所持其外散高等売払候様、被

仰付候付、去巳秋壹ヶ年出米総相不明候様、被 仰付置、

当秋ヨリ定総ノ仕向可被 仰付筈候へ共、近年諸所災

殃地、又ハ高出入等過分ニ有之候付、当午秋ヨリ一往

是迄通出米総相遂候様、被 仰渡度候事、

但

去秋総相遂候後、高出入人数モ多ク候付、右人数

出来書出、同案二冊ヲ以、当八月徇達、又ハ地頭

副役ヨリ取締、米穀掛出納奉行へ差廻候様、被

仰渡度候、

六月廿七日

會計局

右之通被 仰付候条、向々へ可申渡候、

六月廿八日 知政所

七〇三 藩庁諸士持高ヲ尔後軍役高ト改称ス

是月(六月)

藩庁諸士持高ヲ尔後軍役高ト改称セシム、

一名義不正ハ諸事相紊リ、從テ心得違之者到来之儀、古

今ノ通弊ニテ、諸士持高之儀ハ、先々ヨリ

御当家御軍備之御基本被定置、御軍役高共唱来候処、

近年給地高ト計唱相成候付、此節ヨリ御軍役高ト被相

替候条、不洩様向々へ可申渡候、

六月 知政所

七〇四 藩庁足輕等ニシテ拔群ノ功劳アル者ハ、

身分ノ昇格ヲ許ス

是月(六月)

尔後足輕等ニシテ拔群ノ功劳アル者ハ、特ニ身分ノ昇格

ヲ許ス、

文武並軍功ノ外、平常ノ勤方ニテハ、身分一件進不被

仰付、其功劳ニ応シ俸禄加増等被 仰付旨、去年二月

申渡置候処、足輕等治事勤職ノ内ニモ、兼テ正道致精

勤候、其任ニ堪へ拔群御用立ノ者ハ、難被差置候訳モ

有之候間、以来右体ノモノハ、別段ノ御取訳ヲ以テ、

身分一件進可被 仰付候、尤モ通例ノ年功等ノモノハ、

右申渡置候通、御取扱不被 仰付、此旨兵器奉行へ申

渡、向々へ可申渡候、

明治三年六月 知政所

七〇五 藩庁管内諸神社社号改称方ヲ達ス

是月(六月)

藩庁ニテハ、管内諸神社社号改称方ヲ達ス、

一鹿兒島郡吉田八幡宮事、

八幡神社

一知覽中ノ宮神社事、

豊玉姫神社

一今和泉中ノ宮神社事、

豊玉姫神社

一川邊郡山田王事神社事、

竹屋神社

一南方祇園神社事、

八坂神社

一黒島黒尾神社事、

黒島神社

一阿多高良八幡宮事、

高良神社

一日置八幡神社事、

八幡神社

一吉利御霊八社神社事、

吉利神社

一入來大宮神社事、

大物主神社

一樋脇一之宮神社事、

大物主神社

一大村大居神社事、

豊日要神社

一牛山字佐八幡事、

八幡神社

一飯島飯神社事、

新田神社

一重富岩劔神社事、

巖劔神社

一浦生正八幡宮事、

八幡神社

一菱刈神靈神社事、

湯尾神社

一粟野若宮八幡宮事、

勝栗神社

一襲山日枝神社事、

止上神社

一吉松箱崎八幡事、

宮崎神社

一恒吉投谷八幡事、

投谷神社

一市成猿田彦神社事、

大玉神社

一牛根居世神社事、

巨勢神社

明治3年(1870)

一垂水鹿兒島神社事、

牛貫神社

一佐多御崎神社事、

豊王彦神社

一新城神賞神社事、

神木神社

一大始良岩戸神社事、

石窟神社

一花岡行宮神社事、

高千穂神社

一高隈中宮神社事、

中津神社

一串良一之宮神社事、

月読見神社

一高山高山神社事、

豊受神社

一加久藤二宮神社事、

加久藤神社

一須木大年一之宮神社事、

大年神社

一野尻猿田彦神社事、

高都万神社

一大崎妻万五社神社事、

都万神社

一松山若宮八幡事、

松山神社

一志布志山口神社事、

山宮神社

一山ノ口の野八幡宮事、

圓野神社

一綾三宮神社事、

綾神社

一穆佐宇佐八幡事、

宇佐八幡神社

一倉岡事代主神社事、

圖師神社

右之通社号御改称相成候条、社司へ申渡、可承向へモ

可申渡候、

明治三年六月

知政所

七〇六 御国絵図改正ニ付、府藩県ニ其地図ヲ進

致セシム

是月(六月)

御国絵図改正ニ付、府藩県ヲシテ其地図ヲ進致セシム、

〔第四百一十〕六月(民部省)

今般御国絵図新規御改正相成候ニ付、各府藩県共別紙下絵図相渡候間得其意、尤右下絵図ハ、旧幕中天保度出来候地図縮写ニテ、年曆モ相立、変地ニ及ヒ、実地ニ不引当廉モ可有之候間、篤ト校合ノ上、新田並ニ枝鄉村名替、或ハ川欠亡所等ニテ相変候場所ハ、地形ノ模様ニ至ル迄、精細取調可申候、尤一國限ノ図面ニ付、支配地ノ内府藩県入会ノ場所ハ、其国内ノ府県或ハ大藩ノ内ニテ総括致シ、早々取調当省へ可差出候事(別紙略ス)

七〇七 国絵図改正ニ付、各藩支配地ノ内飛地モ

査点セシム

是月(六月)

御国絵図改正ニ付、各藩支配地ノ内飛地ヲモ亦査点セシム、

〔第四百三十一〕六月(民部省)

今般御国絵図一般御改正相成候ニ付、各藩ニ於テモ支配地之内飛地有之分ハ、同様取調可申所、其都度々々相達不申候間、其旨兼テ相心得、総括之府藩県ヨリ、廻達次第早々取調候様可致候事、

〔稿本表紙〕

明治三年
七月 忠義公史料稿本(初稿)七

〔稿本にて補正〕

七〇八 偽造宝貨律ヲ制定シ府藩県ニ即決セシム
七月二日

偽造宝貨律ヲ制定シ、之ヲ府藩県ニ委シ、其犯罪者ヲ即
決セシム、更ニ之ヲ刑部省ニ令ス、

〔第四百三十七〕七月二日(沙)(太政官) 府藩県

〔頭註〕六年太政官第二百六号ヲ以テ改ム
貨幣贋造ハ素ヨリ国家之大禁ニ候処、騒擾中之分ハ出

格之筋ヲ以テ、非常寛典被 仰出候得共、今日ニ至リ
却テ恩ニ狃レ、禁ヲ犯ス者多々有之趣相聞へ、法憲ヲ

犯シ、万民之疾苦ヲ醸シ候重罪ニ付、即今之処別紙之
通刑律ヲ被為定候間、向後地方官ニ於テ管轄内嚴密吟
味ヲ遂ケ、犯罪之者有之候ハ、右刑律ヲ照準シ、即
決処置之上刑部省へ可届出旨、被 仰出候事、

(別紙)

〔頭註〕第九百四十四及附録第二十八參看、六年太政官第二百六号ヲ以テ改ム
偽造宝貨

一凡宝貨ヲ偽造シ、已ニ行使スレハ、銀數ノ多寡ヲ論
セス、首タル者ハ梟、從タル者及ヒ匠人〔頭註〕金銀銅幣及ヒ
作具等ヲ製造ス
ル者、若クハ情ヲ知テ買使スル者ハ並ニ斬、其雇人雜

役ニ供スル者ハ〔頭註〕干曝、挑水、打炭等ノ徒ニ
雜事ニ役スルヲ云セハ仍ホ從ヲ以テ論ス
一若シ偽造已ニ成リ、未タ行使セサル首タル者ハ斬、
從タル者及ヒ匠人ハ流三等、雇人ハ徒一年半、

一若シ偽造未タ成ラサル首タル者ハ流三等、從タル者
及ヒ匠人ハ徒三年、雇人ハ徒一年、

一若シ過ヲ悔テ自首スル者、已ニ行使スルハ一等ヲ減
シ、行使セサレハ罪ヲ免ス、

府藩県通行ノ貨幣亦同シ、

〔第四百三十八〕七月二日(沙) 刑部省

〔頭註〕同上
今般御定偽造宝貨律之通り、府藩県ニ於テ犯罪之者、

即決処置之上、其省へ可届出旨 御沙汰ニ相成候条、
此旨相達候事、

○中略

同年明治三年七月廿八日

一任鹿兒島藩大参事、

○以下略ス

七〇九 藩庁再ヒ西郷隆盛ヲ大参事ト為ス

七月三日

藩庁ニテハ、再ヒ西郷隆盛吉之助ヲ大参事ト為ス、
七〇九ノ一

西郷吉之助

右ハ先般辭職之節、政事向時々可致相談相達置候処、
改テ以来政府へ出席、諸務可致取扱候、左候テ席順ハ
此内勤職之節可脱カ通相心得候、

七月

右之通、今日

御直ニ被

仰達候条、向々へ可申渡候、

七月三日

知政所

七〇九ノ二

鹿兒島県士族

西郷隆盛

吉之助

七二〇 府藩県ニ令シ管内港湾ノ方向・広狭等ヲ

録上セシム

七月五日

府藩県ヲシテ、其管内廻船出入ノ港方向・広狭等ヲ録上
セシム、

第四百四十五 七月五日（布）（太政官）

府藩県管轄内廻船出入之港、別紙雛形之通巨細取調、
来ル九月中可差出候事、

（別紙）

某港

但府藩県共庁ヨリ幾里、

一方向

一広狭

一深淺

一台場
一燈明台
右之通、

七二一 諸港取調ニ付民家ノ数等ヲ查点シ、外務

省ニ進致セシム

七月五日

諸港取調ニ付、民家ノ数等ヲ查点シ、外務省ニ進致セシム、

〔第四百四十六〕七月五日(沙)

民部省

〔頭註〕〔第四百五十五參看〕
諸港取調之儀、別紙之通府藩県へ御達相成候付テハ、
諸港ニ於テ、

一 民家之數

一 積荷取扱問屋有無

一 荷物

但産物類何品多ク積出候哉、

一 運上所等取締之有無

右四箇条於其省委詳取調、外務省へ可申達候事〔別紙ハ
第四百

四十五
二同シ)

七二二 府下諸藩官邸・私邸ヲ一箇所ニ定メ、其余
ハ上地セシム

七月八日

府下諸藩官邸・私邸ヲ一箇所ニ定メ、其余ハ上地セシム、
仍テ更ニ之ヲ東京府ニモ令ス、

〔第四百五十一〕七月八日(布)(太政官)

〔頭註〕四年太政官第三百五十三ヲ以テ廢舊、同第四百九十五參看
府下諸藩官邸一ヶ所、私邸一ヶ所ニ被定候間、其余ハ

上地可致事、

但無余儀情故有之、藏地面拝借致度向ハ、東京府へ

可申出事、

〔第四百五十二〕七月八日

東京府

別紙之通御沙汰ニ相成候条、此旨相達候事〔別紙ハ第四百
五十一ニ同シ)

七二三 府藩県ニ令シ管下諸港ノ戸数等ヲ録上セ

シム

七月九日

府藩県ヲシテ、其管轄ニ係ル諸港民家ノ数等ヲ、民部省

二録上セシム、

〔第四百五十五〕七月九日（民部省）

諸藩

府県

諸府県管内諸港ニ於テ、左ノ四ヶ条委許取調、来八月限

可差出候事、

一 民家ノ数

一 積荷取扱問屋之有無

一 荷物

但産物類何品多ク積出候哉、

一 運上所等取締ノ有無、

右之通相達候事、

七二四 民部・大蔵二省ヲ分チ管轄事務ヲ分ツ

七月十日

民部・大蔵合省ヲ分離セシメ、其管轄事務ヲ分ツ、

〔第四百五十七〕七月十日（太政官）

（頭註）〔第五百廿參看〕
民部省・大蔵省自今分省被 仰付候条、此旨相達候事、

七二四ノ一
〔第五百二十一〕八月九日（布）（太政官） 府藩県

（頭註）四年太政官第三百七十五ヲ以テ民部省廢止、同第四百二十三ニヨリ消滅、
今般民部・大蔵分省ニ付、両省管轄之寮司並諸掛等、

左之通區別相立候条、向後両省へ可差出諸願・伺届類、

其外共別紙両省事務条件ニ照準致シ可差出事、

但是迄何月限、又八年々可差出旨ヲ以テ達置候諸帳

面類、其外諸調物類等モ同様、別紙条件ニ照準シ

可差出事、

（別紙）

民部省

地理司

土木司

駅通司

鉦山司

庶務司

聴訟掛

社寺掛

鐵道掛

伝信機掛

燈明台掛

横須賀製鉄所掛

大蔵省

明治3年(1870)

- 造幣寮
- 租税司
- 出納司
- 用度司
- 営繕司
- 監督司
- 度量衡改正掛
- 通商司当分管轄
- 民部省事務条件
- 全国ノ経緯・山川・江湖・海岸・島嶼ノ位置ヲ詳
明ニスル事
- 府藩県管轄地ノ経界州・郡・村・市制置ノ事
- 戸籍人員ノ事
- 地方石高ノ事
- 社寺ノ事
- 物産ノ事
- 工芸ノ事
- 駅通ノ事
- 道路橋梁ノ事
- 諸港津ノ事
- 燈明台及船路標ノ事
- 水利堤防ノ事
- 開墾ノ事
- 種芸牧畜ノ事
- 諸鉱産ノ事
- 聴訟ノ事
- 府藩県中小学ノ事
- 济貧恤窮ノ事
- 山林原野ノ事
- 大蔵省事務条件
- 歳入歳費ノ事
- 一切用度ノ事
- 租税備ノ事
- 一切貨幣ノ事
- 度量衡ノ事
- 蓄積ノ事
- 通商ノ事
- 廻漕ノ事
- 献納品ヲ領取スル事
- 諸営繕ノ事

一切倉庫ノ事

金穀ニテ附与スル賞典ノ事

諸官祿・秩祿支給スル事

諸費用ヲ供給スル事

国債ノ事

濟貧恤窮ノ費用ヲ給シ、及金穀ヲ貸附ル事

七一四ノ三

大久保利通日記

廿九日六月

一今朝七字ヨリ参昇、右府公同席申一会、於両公モ断然

是迄之御趣意御貫相成候付、見込申上候様云々御沙汰、

種々申上ル、民・藏両省引分ケ(民部・大藏合省ナリシ

ヲ分離ス)、民部ハ納言参議兼勤、混ト御手元ヨリ御手

ヲ下サルヘク、是非

叡慮不被得止ヨリ出候

御趣意相貫候様、尤大隈江右

御趣意御示諭可被為在、立テ申上ル、訪吉井氏、伊地

知子・寺島等入来、

七月

朔日

一不参、得能氏江参、郡山翁・吉井子其外囲基客来会、

黒田氏入来ニテ、岩公ヨリ御伝返詞ニ来ル、

二日

一今朝岩公江参上、小臣民部ノコト御示談有之、兎角廣

澤江示談、是非同人御受イタシ候様致度旨申上候、昼

后廣澤へ訪候得共留守、訪木戸子万事打明シ事件相談

ス、殊ノ外安心ノ様子ニテ、大隈ヲ説得イタスヘクト

ノコトノミ、

三日

一今朝吉井子入来、大隈ヨリノ伝詞承リ候、如何共承知

候間、速ニ相決可與云々、

四日

一腫物ニテ不参、今朝得能カノ子入来、三字ヨリ大隈子・吉

井子入来、民・藏分割之儀ニ付、種々遂示談候、誠ニ

公平ノ論ニテ安心イタシ候、

五日

一同断、訪吉井・岩下子、其外囲基客有之、

六日

一同断、吉井・岩下子入来、今日二字頃ヨリ訪條公、彼

是示有之、訪副島子、

七日

同断不参、岩倉公江御受之儀、御異論申上候、

八日

一 今朝木戸へ訪、廣澤御受ノコトヲ談ス、無異儀、今日ヨリ参朝、民・蔵分割之事、明日御発表ニ決ス、退出后得能子入来、今夕大木子入来、條公江参殿、明日御発表ノコト延引願出候由、就テ見込承候、篤卜御趣意及説得候処、承伏イタシ候、

九日

一 参朝、條公・岩公示談シテ、今一日民・蔵之事御発表御延引有之、同僚一同條公江参殿、其異論申上候、

十日

一 八字参朝、御前評議有之、今朝條公ヨリ弥御発表御決之段申来ル、今日民・蔵御引分相発、岩倉大納言・廣澤参議・小子江民部御用掛被仰付、大蔵一扁宇和島公・大隈・伊藤、其外種々御達相成候、退出后訪吉井子、

十一日

一 八字参朝、岩公へ廣澤子同道参殿、民部ノコト種々御示談有之、民退出后吉井氏・岩下子入来、

十二日

一 八字参朝、渡邊判官建論ニ付、種々議論有之、退出后訪吉井子、

十三日

一 八字参朝、御評議毎之通、退出后以下文カ

十四日

一 民部ノコトニ付参朝、退出后伊地知子・内田子・岩下子・吉井子・郡山翁等入来、駿熊宮参ヲ祝ス、

七一四ノ四

鹿兒島県士族

大久保利通

一蔵

○中略

同年明治三年七月十日

一 民部省御用掛被仰付候事、

同年閏十月五日

一 民部省御用掛被免候事、

○以下略ス

【参照一】

三條實美公年譜

七月十日、参議廣澤真臣公三條實美ニ上書シ、民部・大蔵

二省ノ改革ヲ陳ス、

是ヨリ先、民部・大蔵ノ二省ヲ分チ置クヤ、其卿輔皆両省ヲ兼ね、殆ント一省ノ如シ、民政・財務ノ權一ニ茲ニ在リ、而シテ大輔大隈重信専ラ省務ヲ執リ、其施設スル所、内閣ノ指針ニ違フモノ屢ナリ、世論囂々大ニ其專横ヲ尤ム、參議大久保利通・廣澤真臣・佐々木高行・副島種臣亦之ヲ憂ヘ、公ニ謁シテ曰ク、今ヤ行政施治ノ実權民部・大蔵ノ二省ニ在リ、内閣ハ員ニ充ルノミ、二省ノ專横如此ニシテ止マスンハ、弊患測ルヘカラサルモノアリ、請フ、速カニ臣等ノ職ヲ解キ、二省ノ卿輔ヲ以テ之ニ代ヘヨト、木戸孝允之ヲ聞キ、公ニ白シテ曰ク、民部大輔等資性激烈ト雖トモ、能ク難ニ堪ヘ、艱ヲ凌ク、從來外交ノ事其功少シトセス、夫レ一ノ氣概アルモノハ一ノ性質アリ、少ク恕セサルヘカラス、且内閣ハ体ナリ、諸省ハ四支ナリ、体ニ居テ四支ト得失ヲ争フ、天下目シテ如何トナス、夫レ大政ノ一新スル所以ハ、人ニ非ラスシテ天ナリ、故ニ政府亦一人ノ力ニシテ立つモノニアラス、衆心協同始メテ以テ為スアルヘシ、然ルニ一二ノ故ヲ以テ、之ヲ退テ代ラントス、是自

カラ政府ノ輕忽ヲ暴露シテ天下ニ示シ、其威信ヲ失フナリ、何ヲ以テカ國家ヲ維持スルヲ得ンヤト、公慰諭シテ去ラシメ、更ニ岩倉具視ト議シ、專任官ヲ置キ以テ其權ヲ分タシメント欲ス、此意ヲ以テ四人ニ諭ス、四人旨ヲ奉ス、七月十日二省ヲ分チ、民部省ヲシテ土木・駅通・鉱山・通商・聽訟ノ五司、及ヒ社寺・鐵道・電信・燈台・製鉄掛ヲ管シ、大蔵省ヲシテ出納・用度・宮繕・造幣・租稅・監督ノ六司及度量改正掛ヲ管セシム、乃チ民部兼大蔵卿伊達宗城ヲ以テ大蔵卿ト為シ、民部兼大蔵大隈重信ヲ大蔵大輔トナシ、大納言岩倉具視・參議大久保利通・廣澤真臣ヲ以テ、民部省事務ヲ兼知セシメ、東京府大參事大木喬任ヲ以テ、民部大輔ト為ス、此事將ニ昨日ヲ期シ發表セントス、故アリテ果サス、是ニ於テ真臣其議ノ或ハ変センコトヲ憂ヒ、上書シテ公ノ断決ヲ請フ、曰、

謹呈、連日雨氣濛鬱、兎角不順候、疾快晴是禱候、弥以御勇健奉恐悦候、扱過日来ノ件実以御痛心之程、不堪恐懼之至、昨夕モ段々被仰聞ノ旨奉畏、於參議中モ存慮ノ所、不願忌憚反復言上仕候次第

二有之、前以追々御仕置候通、徒ニ政府ノ御末席ヲ妨塞仕居候テ、兎角運用之目的不相立候上ハ、世間ノ誹謗モ不少、詰リ御威權奉関係、又天下人民ノ離反イタシ候哉ハ、一朝一夕ノ事ニ非ラス、是モ政府ノ御基礎次第ニテハ、一旦離反候共、追日文明開化之御政蹟相拳ニ從ヒ、乍恐前日ノ怨望ハ、今日ノ喜踊ト相成哉ニモ被相考、然スレハ天下万機ノ事、其成功十年ナルハ七年、七年ナルハ五年、五年ナルハ三年ト申如ク、総テ開国ノ御目的モ確ト相立、天下蒼生ノ仕合不一形事ト、其人材更ニ御精撰御登庸有之候得ハ、世間ノ誹謗モ無之、政府ノ御威權モ相立候事ト、一凶ニ存込、虚心杞憂ノ余重疊奉歎願候事ニテ候処、彼此深重思召ノ所奉拝戴、其上ハ強テ強情申上、御煩慮奉懸候儀ハ毫末モ無之、畢竟淺劣ノ身ヲ以テ要路ヲ相妨ケ、進退困窮ノ余奉願候事ニテ、何ソ他ノ人材ヲ相拒ミ、又ハ愚見ヲ相貫度杯ノ邪心ハ決テ無之次第ニテ、不得止思召ノ所御請申上候末、今日ニ至リ如此一日々々御猶予被為在候テハ、不容易次第第二立至リ、折角御為筋モ水泡トナリ、小事モ日増大事ト

ナリ、疑惑ニ疑惑ヲ重ネ、党派ヲ相分チ候形行、昨夜モ意外ノ事伝聞、実以不堪驚愕之至、前途ノ事如何ト益以不堪杞憂、奉恐懼候、就テハ今日ニ至候テハ、御前初臣相公方ノ御決議ヲ以テ、断然私共素願之通御窺取、速ニ御発表相成候儀御為筋ト奉存候、前以申上候通り、素願之通御運被下候得ハ、免軫官共被仰出次第、公然ニテモ陰然ニテモ鞫窮尽力、今日ノ如キ奮キ事ハ無之事ト奉存、素ヨリ斯迄御遷延立至リ候得ハ、漏聞モ可有之事勿論ナレトモ、巨細ノ旨趣不思議ニ漏説、夫々附会ノ説ヲ加へ、種々様々此間ニ周旋スル、多ハ穩便ヲ好ムニ非ス、瓦解ヲ助ケ、政府ヲ惑乱スルノ詭柄ニハ無之哉ト浩歎之至、將恐戒之至ニ奉存候、仰願ハ私共虚心ヲ以テ、御願申上候心事飽迄御了解被遣、御一統様ニ於テ御安心之場、速ニ御所置被為在度、イツトナク数日相立候得ハ、多少ノ御配慮弥増候儀ハ眼前ニ有之、殊更御威權ニ相拘リ、不容易御事ト杞憂ノ余、尚不顧忌憚言上仕候、呉々モ素願之通、速ニ御決定ノ方御上策欤ト奉存候、此段泣血奉懇願候、誠惶敬白、

七月十日

真臣

百拜

右府公閣下

追テ御都合次第、岩・徳兩臣相公へ御廻覽被遣候得ハ、幸甚ノ至奉存候、幾回モ御痛心ノ程、奉恐

懼候、不一、

十三日ニ至リ、真臣又書ヲ上リ、前書ノ旨ヲ反覆開陳ス、

【参照二】

吉井三峰日記
友美

七月朔日

岩倉公ヨリ御召ニテ、民・蔵兩省ノ情況ヲ御推問アリ、

○中略

同月二日

民部省御改革ノ儀、如何様共御決相成候様、大久保へ申入可呉トノ事、大隈ヨリ談示ヲ受ク、

同月三日

大久保へ行キ右事件相談ス、同人云、木戸へモ談置候トノ事ナリ、

同月十日

民部・大蔵兩省御引分ケ相成候事、

大蔵少輔兼勤被免候事、

同月十三日

少丞兩省へ御引分ケ之御沙汰相成候事、

以下略ス

【参照三】

鹿兒島県士族

吉井藤原友實

幸輔
徳春

○上略

同日明治三年
四月十八日

一任民部少輔兼大蔵少輔、

同年七月十日

一大蔵少輔兼任被免候事、

○以下略ス

【参照四】

七月十日民部・大蔵二省を分ち、民部省をして地理・

土木・駅遞・鉱山・庶務の五司及聴訟・社寺・鉄道・

電信・燈台・横須賀製鉄所掛を管せしめ、大蔵省をし

て造幣寮、出納・用度・營繕・租税・監督・通商の六

司及度量衡改正掛を管せしむ、乃ち民部兼大蔵卿伊達宗城を以て、大蔵卿と為し、民部兼大蔵大輔大隈重信を大蔵大輔と為し、大納言岩倉具視・参議大久保利通・廣澤真臣を以て、民部省事務ヲ兼知せしめ、東京府大参事大木喬任を以て、民部大輔と為す○以下下略

七二五 前田十郎左衛門・伊月一郎英国ニ於テ海

軍学研究ヲ行フコトヲ出願ス

七月十日

先ニ前田十郎左衛門鹿兒島藩士、伊月一郎徳島藩士英国ニ於テ海軍

学研究ヲ出願ス、
七二五

先般航海為見習、英軍艦江乗組被仰付候伊月一郎・前田十郎左衛門両生、北亞米利加之北部スクワイモート

港廻着之由ニテ、航海中之事情等申越、且当節之帰航纒之月数ニテハ、何分成業之見留メ無之ニ付、英国到

着之上は海軍校ニ留学、只管學術研究仕度旨、別紙之通願越候、右は即今大ニ海軍御創立ニ付ては、海軍士官教成之儀第一着ニ候得は、英国江ハ態々も留学生被差越候半ては、不相叶之処、幸ヒ之便宜被申、英艦將

始メ懇切ニ心配致吳候趣ニ付ては、彼之地滞学之振合も至極可然ニ付、願之通被差免、三ヶ年滞学、成丈ケ勉励、海軍士官試補と成ルノ試業を卒へ、帰朝いたし候様被仰付度、於然は其段外務省より英国公使江頼入相成候哉、御沙汰有御座度此段申進候也、

庚午七月

兵部省

弁官

御中

七月十日

可為伺之通事、

同日写書添外務省へ相達ス、

七二五ノ一

歎願書

私共儀、今般航海見習トシテ英艦へ乗組被仰付、難有御請仕罷在候得共、僅カ數ヶ月之間ニテは如何程勉励仕候ても、只其一二を知候而已にて、逆も成業之見留無御座候間、彼之州着之上ハ、海軍校江留在仕候て、只管學術研究仕度微志罷在候間、何卒格別之御憐憫を以、留学之儀被仰付候様、奉千祈万禱候、若し奉願之通御免相成候時ハ、乍恐學術之事なれハ、一日片時も

御告知之程、偏ニ奉歎願候、敬白、

午四月廿二日

伊月一郎

前田十郎左衛門

存候間、其後大蔵省へ早々御達有之候様致度、此段申上候也、

庚午七月十九日

外務省

午七月十日

外務省

弁官

御中

七一五ノ四

此度英国海軍校留学生被命候前田十郎左衛門・伊月一郎江、学問料被下方之儀申上候通、大蔵省江御達有之候哉、右ハ英国人シーホルト儀、近日東京出立致帰国候間、右便宜へ托し差出申度存候間、大蔵省へ御達之有無致承知度、此段相伺候也、

別紙之通兵部省より伺出、伺漏相成候間、英国公使江類入之儀、於御省御取計可有之、此段別紙相添申入候也、

庚午七月十日

庚午七月廿二日

外務省

七一五ノ三

鹿兒島藩

前田十郎左衛門

弁官

御中

徳島藩

伊月一郎

七一五ノ五

前田十郎左衛門・伊月一郎、今度英国海軍校へ留学之義御聞濟、右学費別紙高之通、外務省より申出有之候、且便宜都合切迫之由にて、今明日中同省より為請取可罷出ニ付、御渡方御取計可有之、実は御評決前以御省へ可及御打合処、兵部省生徒にて学費も右省より相渡

右兩人之者、今度英国海軍校江入学之儀、兵部省より相伺候処、伺之通被仰渡候旨御達有之候、然ル処右は英国留学致し居候是迄之生徒江被下候比例ヲ以、留学中為学費尅人江尅ケ年、英金百五十ポント宛被下候儀ニ

候筋と存、不及其儀候処、兵部省定額之三十万石も来
十月より之御極リニテ、外ニ右費出方も無之、仍て手
続書類写相添、此段御達申入候也、

庚午七月廿三日

弁官

大蔵省御中

追て書類御返却可有之候也、

七二六 藩庁鹿兒島近在檢地ニ関シ宅地内踏入ノ

コトヲ達ス

七月十二日

藩庁鹿兒島近在檢地ニ関シ、宅地内踏入ノコトヲ達ス、
此節鹿兒島近在総御檢地被仰渡、近々地面踏付之賦ニ
候、就テハ士族居屋敷其外供地之面々ハ、門口ヨリ相
廻候テハ埒明兼儀モ有之候付、時宜次第境垣踏分致通
融候付、右之趣前以御布告相成候様有御座度吟味候、
以上、

七月十二日

民事局

右之通被仰付候条、向々へ可申渡候、

七月

知政所

七二七 仮ニ時価ヲ以テ錢貨ヲ通用セシム

七月十三日

朝廷ニ於テハ、仮ニ時価ヲ以テ錢貨ヲ通用セシム、

〔第四百六十二〕七月十三日(布) (太政官)

〔頭註〕(四年太政官第六百五十八依り消滅)
金壹兩ニ付錢拾貫文通用之儀、兼テ御布告相成居候処、

京攝之間追々錢貨潤沢ニ相成候ヨリ、自然錢下落之姿
ニ相成、拾貫文ニテハ下方通用差支候趣ニ付、当分時
相場ヲ以テ可致通用事、

但相場通用相成候得共、錢払底杯申立、拾貫文ヨリ
以內引上候様ノ儀ハ、決テ不相成候事、

【参照】

〔第六百五十八〕十二月十九日^{四年}○明治

旧銅貨ノ儀、去ル辰年定価被 仰出候処、今般新貨御
發行ニ付、各種比較商量ノ上、当分左ノ通品位被相定
候条、其旨相心得、新貨幣並金札共取交聊無差支通用
可致事、

新貨並金札ノ比較

〔頭註〕(八年第三号布告ヲ以テ金札通用停止)

新貨壹円 金札壹兩ニ当ル

新貨五十錢 金札貳分ニ当ル

新貨二十五銭
 新貨十二銭半
 金札壹分ニ当ル
 金札貳朱ニ当ル

新貨六銭二厘五
〔頭註〕五年太政官第二百八十三号參看
 旧銅貨品位
 金札壹朱ニ当ル

八厘 天保通寶
 十枚ヲ以テ八銭トス
 百二十五枚ヲ以テ一円ニ換ル
 六十二枚ト二厘錢二枚ヲ以テ五十銭ニ換ル
 三十一枚ト二厘錢一枚ヲ以テ二十五銭ニ換ル
 但十二銭半六銭二厘五毛右ノ割合タルヘシ以下同断

二厘 寛通寶
 十枚ヲ以テ二銭トス
 五百枚ヲ以テ 一円ニ換ル
 二百五十枚ヲ以テ 五十銭ニ換ル
 百二十五枚ヲ以テ 二十五銭ニ換ル

一厘 文久
 十枚ヲ以テ壹銭半トス
 六百六十七枚ヲ以テ 一円ニ換ル
 三百三十四枚ヲ以テ 五十銭ニ換ル
 百六十七枚ヲ以テ 廿五銭ニ換ル

一厘 寛通寶
 十枚ヲ以テ壹銭トス
 千枚ヲ以テ 一円ニ換ル
 五百枚ヲ以テ 五十銭ニ換ル
 二百五十枚ヲ以テ 廿五銭ニ換ル

〔天保通寶の上七頭註〕十七年第二十六号布告ヲ以テ、十九年十二月限り通用禁右ハ、本位ノ新貨幣ト新銅貨トノ比例ニ依テ定ムルカ
此十九年勅令第七十号ヲ以テ延期
 故ニ、一種又ハ數種ヲ併セ用ユルトモ一口ノ取遣り一円ノ高ヲ限り用ユヘシ、

但壹円ノ高ヲ越レハ、是ヲ拒ムノ權アルヘシ、尤相互ノ便宜ニ依テ取遣リスル時ハ、右制限ニ不拘勝手タルヘシ、右之通相定候事、

七一八 藩庁藩内檢地ノコトヲ布達ス

七月十三日

藩庁、藩内檢地ノ趣旨ヲ示シ、公平精勵執行ニ従事スヘキヲ達ス、
七一八ノ一
 御藩内大御支配之儀、享保之度御取起被為在候以後無

之候処、經年地位変遷イタシ、随テ租稅モ不鈞合ノ場ニ立至候ニ付、今般格別ノ御仁恕ヲ以テ、大御支配被仰付候、右ニ付テハ經界ヲ正シ、稅法當ヲ得、人民其業ニ安シ精勵イタシ候儀、御國家ノ根元ニ候得ハ、大御支配ノ儀ハ実ニ御大業ノ御事候間、地位ノ優劣明白ニ相極、一時ノ損益ニ不相泥、根元確立イタシ候処、
 第一

御趣意ニ候間、税法ニ於テモ、四公六民ノ公法決テ不
取失様可致候、勿論此御大業ノ一事ニ依リ、人民ノ向
背ニ相拘リ、御国家ノ命脈ニ相関候間、掛役々一同尽
心力、後世ノ龜鑑ニ相成候様可致候、此旨民事総裁へ
申渡、向々へモ可申渡候、

明治三年七月

知政所

七一八ノ二

今般御藩内大御支配被仰付候段ハ、別段申渡通ニテ、

先此涯御当地諸屋敷ハ勿論、近在田島等御検地被仰付
候、向々へ可申渡候、

明治三年

七月十三日

知政所

七一九 在京宮・華族並元諸官人等ニ其家内人員

ヲ録上セシム

七月十八日

在京宮・華族並元諸官人等ヲシテ、其家内人員ヲ録上セ
シム、

【第四百七十一】七月十八日(留守官)

〔頭註〕【第四百八十九參看】

在京宮・華族並元諸官人等、家内人員男女共別紙雛形
之通相認、来ル三十日迄ニ可差出事、

但家来ノ分ハ不及其儀候事、

(別紙雛形)

△料紙美濃堅

一家内何人

内男何人

女何人

何某

(△印ハ朱書)

【参照一】

【第四百八十九】七月二十五日(留守官)

〔頭註〕【第五百十一參看】

在京宮・華族並元諸官人等、家内人員男女共相認可差
出旨、過日相達候処、右ノ内東西京分勤等有之候ニ付、
当主在京ノ向ハ別紙雛形ノ通相認、来月五日迄ニ可差
出、当主在京無之向ハ、子弟等在京タリトモ不及其儀
候条、此旨更ニ相達候事、

(別紙雛形)

一家内何人

内男何人 但何人在京 △或ハ在何地(△印ハ朱書)

女何人 但何人在京 △或ハ在何地

何某

【参照二】

【第五百十二】 八月五日（留守官）

在京官・華族・元諸官人等、家内人員書可差出旨過日
相達候儀ハ、全ク一家現今之人員御取調之処、往々取
違、諸御所女房等相勤居候輩迄モ、家内人員ニ相加候
向有之哉ニ付、右様之分ハ相除キ、来ル十日迄ニ可差
出事、

七二〇 鹿兒島藩外三藩徴兵ノ兵食並月給等渡方

規則ヲ定ム

七月十九日

鹿兒島藩外三藩徴兵兵食並月給・沓代・菓種料渡方規則
ヲ定ム、

【第四百七十三】 七月十九日（兵部省）

（頭註）「兵制變革ニ依リ消滅」

鹿兒島藩 山口藩

高知藩 佐賀藩

右徴兵隊長中

兵食並月給・沓代・菓種料渡方規則、来八月ヨリ左之
通相改候条、為心得相達候事、

一 兵食毎月三日・十八日兩度ニ相渡候事、

一月給毎月十八日一度ニ相渡候事、

一 沓代・菓種料等渡方前同断、

一 総テ人員増減之儀ハ、渡方定日之前日相届可申候事、

七二一 開拓次官黒田清隆樺太島事務ノ兼知ヲ命

セララル

七月十九日

開拓次官黒田清隆行樺太島事務ノ兼知ヲ命セラレ、本島
ニ駐劄ス、
七二〇一 黒田開拓次官

今般樺太出張被 仰付候ニ付テハ、全權ヲ以テ臨機適
宜処分可有之事、

七二〇一

○北海道庁

○中略

開拓次官

明治3年(1870)

○中略

三年五月九日 兵部大丞ヨリ任黒田清隆鹿兒島士

七年八月二日
開拓長官ニ任

七二ノ三

大久保利通日記

○上略

廿七日^{月七}

一 今朝黒田次官(清隆)樺太就發足、為暇乞差越候、訪

伊地知正治子、昨夜横山正太郎割腹イタシ候由ニテ、

各集会ノ所ナリ、書置モ有之、大旨趣ハ

朝廷へ建論イタシ候一書差出、集議院江張置候云々、

忠志可感、參朝、今夕木戸子入来、段々及示談候、

七二ノ四

開拓使士族元鹿兒島

黒田源清隆

了介

○中略

同三庚午年三月十四日

(十四日未書)

一 叙従五位、

同年五月九日

一 任開拓次官、

同日

一 叙従四位、

〔采〕
同日

一 樺太專務被仰付候事

同年七月

一 樺太出張被仰付候事、

同月十九日

一 今般樺太出張被仰付候ニ付テハ、全權ヲ以テ臨機適宜

処分可有之事、

○以下略ス

七二ニ 藩庁検地中農作上田畠地ニ障害アル樹木

伐除ヲ命ス

七月十九日

藩庁ニテハ、検地中農作上田畠地ニ障害ヲ生スル樹木ヲ

伐除セシメ、自今栽植ヲ許サス、

此節大御支配中、諸所御茶屋山並諸人自作地・居屋敷

等ニ有之候作木、田畠地へ差覆、作障相成候分ハ伐除、

以來不仕立様被仰渡度、致吟味候、以上、

午七月十九日

民事局

右之通被 仰付候条、可承向へ可申渡候、

七月

知政所

ノ儀、息安千代へ頂戴為仕、家名相立度旨、存命中私へ申聞置候間、此旨御聞置相成候様、宜敷御執 奏奉願候、以上、

亡小松從四位親類

鹿兒島藩

七三三 小松清廉卒去ス

午七月廿日

相良幸介

七月二十日

小松清廉帶刀卒去ス、

御伝達所

本文ニ付、又吟味○印ヨリ○迄ノ処へ左ノ通、

七三三ノ一 小松從四位事、此内ヨリ病氣之処、今晝被致卒去候、

就テハ東京御屈向等之儀、在旅中ニテ御模様モ不相分

候付、可然御所置被成下度奉願候、以上、

亡小松從四位内

愛甲新助

午七月廿日

大坂御府

右之通差出相成候、

七三三ノ三

鹿兒島県士族

七三三ノ二

小松從四位儀、此内ヨリ病氣有之、精々療養仕候得共、

不相叶今晚卒去仕候、就テハ兼テ被下置候 御賞典祿

小松清廉

帶刀

明治元年戊辰正月

- 一顧問・参与、当分外国事務掛兼被仰付候事、
- 同年二月廿日
- 一徴士参与職・総裁局顧問被仰付候事、
- 同日
- 一当分外国事務掛被仰出候事、
- 同年三月廿四日
- 一外国事務局判事兼勤被仰付候事、
- 〔采〕
- 一同年閏四月廿一日
- 一廢三職八局」
- 同日
- 一是迄之職務被免、参与更ニ被仰付候事、
- 同日
- 一叙從四位下、辞退、
- 同月廿八日
- 一今般御制度御改正、二等・三等等相关之位新ニ被授候
- 二付、応其階級衣冠賜之候事、
- 同年五月十日
- 一当官ヲ以テ関東表へ下向被仰付候事、
- 同月廿三日
- 一当官ヲ以テ大坂府在勤被仰付候事、
- 同年九月三日
- 一当官ヲ以テ外国官副知事被仰付候事、
- 同月十日
- 一御東幸御用ニ付、東京先着被仰付候事、
- 同年十月十五日
- 一叙從四位下、
- 同二年己巳五月十五日
- 一是迄之職務被免候事、
- 同年九月廿六日
- 一積年心ヲ皇室ニ存ス、戊辰ノ春大政ニ預參シ、日夜励精以テ中興ノ丕績ヲ贊ケ候段、叡感不斜、仍為其勲勞賞祿千石下賜候事、
- 一高千石
- 一依勲勞永世下賜候事、
- 同三年庚午七月十二日
- 一御用有之、東京住居被仰付候間、病氣全快次第可罷出候事、
- 七三四 大友帝・廢帝・九條廢帝ニ諡号奉上ニ付、
- 祭典ヲ執行ス

七月廿二日

大友帝・廢帝・九條帝廢帝ニ御諡号奉上ニ付、祭典ヲ執行セラル、

〔第四百七十六〕七月二十二日（布）（太政官）

大友帝 廢帝 九條廢帝

右 三帝御諡号被為奉候ニ付、明廿三日八字於神祇官御祭典被為行候事、

七二五 三帝祭典ニ付神事中重輕服者・僧尼ノ参

朝ヲ憚ラシム

七月廿二日

三帝御祭典ニ付、神事中重輕服者・僧尼ヲシテ参朝ヲ憚ラシム、

〔第四百七十七〕七月二十二日

大友帝

廢帝

九條廢帝

右 三帝御諡号被為奉、御拜被為在候ニ付、自今廿二日酉刻至明廿三日午刻御神事候間、重輕服者・僧尼

之輩参 朝可憚候事、

但政府出仕之輩不及憚候事、

七二六 大友帝・廢帝・九條廢帝へ諡号奉上

七月廿四日

大友帝・廢帝・九條廢帝へ諡号奉上、

〔第四百八十二〕七月二十四日（布）（太政官）

大友帝

弘文天皇

廢帝

淳仁天皇

九條廢帝

仲恭天皇

右之通 三帝御諡被為奉候ニ付、此旨相達候事、

七二七 赤塚源六ニ小艦隊ノ指揮ヲ命シ、兵庫港

ノ守衛ト山陽・南海海岸ヲ兼護セシム

七月廿五日

赤塚源六ヲシテ、当分小艦隊ノ指揮ヲ命シ、因テ兵庫港ヲ守衛セシメ、更ニ山陽・南海海岸ヲ兼護セシム、

七月廿五日

御沙汰書写

赤塚源六

当分小艦隊指揮被 仰付候条、兵庫港ヲ守衛シ、且山陽・南海之海岸兼護可致事、

但春日艦修覆未タ出来不致候ハ、至急同港へ罷越、

富士艦ニ乗組可申事、

七二八 藩庁検地ニ付其境標等ニ妨害セサル様厳

達ス

七月廿五日

藩庁検地ニ付、其境標等ニ妨害ヲ為スベカラサルコトヲ厳達ス、

就大御支配、当分鹿兒島近在武拾五ヶ村並諸屋敷迄、

同様地面踏付為仕申候、然処坪ノ儀印竹並境竹等立置申儀御座候間、右へ一切不致手掛様、一統へ御布告有

之度致吟味、此段申出候、以上、

七月廿五日

民事局

右ノ通被 仰付候条、向々へ可申渡候、

七月

知政所

七二九 横山安武時弊十条及ヒ征韓ノ非ヲ集議院

ニ陳疏シテ自双ス

七月廿六日

東京遊学中ノ横山安武正木時弊十条及ヒ征韓ノ非ヲ集

議院ニ陳疏シテ自双ス、翌日芝大圓寺ニ葬リ、藩邸ヨリ

葬式料ヲ下賜セラル、
七二九ノ一

至諫上書

方今一新之期四方着目之時、府藩臬共

朝廷之大綱ニ依遵シ、各新ニ徳政ヲ敷クヘキニ、豈料哉、旧幕之悪弊、暗ニ新政ニ遷リ、昨日非トセシモノ、

今日却テ是トナスニ至ル、細ニ其目ヲ挙テ云フニ、

第一、輔相之大任ヲ始メ侈靡驕奢、

上

朝廷ヲ暗誘シ、下飢餓ヲ不察也、

第二、大小官員トモ、外ニハ虚飾ヲ張り、内ニハ名利

ヲ事トスル不少、

第三、朝令夕替、万民狐疑ヲ抱キ、方向ニ迷フ、畢竟牽強附会、心ヲ着実ニ不用故也、

第四、道中人馬賃錢ヲ増シ、且五分一ノ献金等総テ人情事実ヲ不察、人心ノ婦不婦ニ不拘、刻薄ノ所置也、

第五、直ヲ不尊シテ能者ヲ尊ヒ、廉恥上ニ不立故ニ日ニ輕薄之風アリ、(二向之)

第六、為官求人ルニ非スシテ、為人求官故ニ、毎局己カ任ニ心ヲ不尽、職事ヲ質取仕事ノ様ニ心得ル者アリ、第七、酒食ノ交リ勝テ、義理上ノ交リ薄シ、

第八、外国人ニ対シ、約条ノ立方輕卒ナルヨリ、物議沸騰ヲ生スル事多シ、

第九、黜陟ノ大典不立、多ハ愛憎ヲ以テ進退ス、春日某ノ如キ廉直ノ者ハ、却テ私ノ恨ヲ以テ冤罪ニ陥ル数度ナリ、是岩倉・徳大寺ノ意中ニ出ト聞ク、

第十、上下交々征利而国危シ、今日在

朝之君子、公平正大之実有之度奉存候、

右ハ是迄建白仕候者不少哉ニ承候へ共、日々衰敗ニ趣キ、更ニ其効ヲ不見、況哉至愚草莽之臣、譬ヒ幾百遍雖建言、勿論不可立、故ニ不顧恐獻微身、歎訴

仕候間、何卒御洞察被下度奉歎願候、恐惶謹言、

但別紙添書差上申候、

鹿兒島藩士族

七月廿六日

横山正太郎(安武)

別紙添書

朝鮮征討之儀、草莽間盛ニ主張スル由、畢竟皇国之萎靡不振ヲ慨歎スルノ余リ、斯ク憤激論ヲ発スト見ヘタリ、雖然兵ヲ起スニハ名アリ、義アリ、殊ニ海外ニ対シ、一度名義ヲ失スルニ至テハ、譬ヒ大勝利ヲ得ルトモ、天下万世之誹謗ヲ免ルヘカラス、兵法ニ己ヲ知り、彼ヲ知ルト云フコトアリ、今朝鮮ノ事ハ姑ク舍キ、我国ノ情実ヲ察スルニ、諸民ハ飢渴困窮ニ迫リ、政令ハ瑣細ノ枝葉而已ニテ、根本ハ今ニ不定、何事モ名目虚飾而已ニテ、実効ノ立所甚タ薄ク、一新トハ口ニ唱ユレトモ、一新ノ徳化ハ聊モ不見、万民恟々トシテ隠ニ土崩ノ兆シアリ、若シ我国勢充実盛大ナラハ、区々ノ朝鮮豈能非礼ヲ我ニ加シヤ、慮此ニ不出、只朝鮮ヲ小国ト見侮リ、妄リニ無名ノ師ヲ興シ、万一蹉跌アラハ天下ノ億兆何ト云フ、蝦夷開拓サヘモ、其土民ノ怨

ミヲ受クル多シ、且朝鮮近年屢外國ト接戦シ、頗ル兵革ニ慣ルト聞ク、然ラハ文祿之時勢トハ同日之論ニアラス、秀吉之威力ヲ以テスラ、尚数年ノ力ヲ費ス、今佐多某輩所言ノ如キ、朝鮮ヲ掌中ニ運サントス、欺己欺人困事ヲ以テ戯トスルハ、是等ノ言ヲ謂ナルヘシ、今日ノ急務ハ先ツ綱紀ヲ建テ、政令ヲ一ニシ、信ヲ天下ニ示シ、万民ヲ安堵セシムルニ在リ、姑ク蕭牆意外ノ變ヲ^(慮)凶ルヘシ、豈朝鮮ノ罪ヲ問ニ暇アラシヤ、右ハ至愚之見込ニ御座候得共、添テ差上申候、

上
鹿兒島藩士族
横山正太郎

裏ニ封 七月廿六日

集議院御届書

鹿兒島藩士族横山正太郎、別紙建言書ニ通、封中ニテ竹ニ相挿ミ、昨夜深更之事ニ候哉、当院門扉へ相添差置有之、今朝門番ノ者ヨリ差出候、然ル処本人儀、今曉津輕藩邸裡門ニ於テ屠腹致候趣キニ御座候、依テ不取敢奉差上候也、

庚午七月

集議院

七二九ノ二

彈正台御上申

本月廿七日、鹿兒島藩士横山正太郎政体ヲ裨益シ、國恩ニ報セントスルノ誠心ヨリ、時事十條ノ建議ヲ集議院ニ献シ、死ヲ以テ採用アランコトヲ願ヒ、終ニ其藩邸外ニ於テ腹ヲ屠ル、幸ニシテ未タ絶セス、同藩之士之ヲ保護療養スルニ、因テ其情実ヲ問究シ、且建言スル所ノ書、既ニ政府ニ達スルヲ告クルヲ得タリ、於是欣然瞑目スト、嗚呼斯ノ如キ者実ニ憫ムヘク、又哀ムヘクノ事ニシテ、天下常ニ無クシテ稀ニ有ル所ノ者ナリ、夫レ人ニ賢愚アリ、才ニ大小アリ、故ニ其議スル所、当不当ハ姑ラク措テ論セス、其心ヲ推シ其情ヲ量ルニ、蓋シ國家ヲ憂フルノ深キ者ニ非ンハ為ス能ハサル所ナリ、聖明上ニ在リ、賢相之ヲ輔ケ、待詔ノ局ヲ設ケ、建言ノ門ヲ開キ、肝膈治ヲ求ムルノ秋ニ当リ、斯ノ如キ士アリテ、其心ヲ愛セス、其情ヲ憫マス、空シク狂名ヲ取ラシムルハ、聖代民ヲ仁スルノ意ニ非サル也、冀クハ其言採ルヘキハ之ヲ採リ、採ルヘカラサルハ之ヲ恕シ、其誠心ヲ賞シ、其所為ヲ旌ハシ、天下

ヲシテ奨励自奮セシメ、生者ハ益其力ヲ展ヘ、死者亦將ニ余米アラントス、是臣等ノ黙スル能ハスシテ、尊嚴ヲ冒瀆スル所以也、今台員檢察スル所ヲ具記シ、并テ別ニ奏ス、伏テ願ハクハ臣等奏スル所ヲ以テ、速ニ哀恤ノ典ヲ行ヒ、義烈ヲ表シ玉ハ、特ニ臣等ノ幸ノミニ非ス、天下万世ノ大幸ナリ、謹奏、

庚午七月晦日

彈正台

七二九ノ三
御檢使御調書写

鹿兒島藩伊地知權大參事・公用人田中清之進兩人申口之次第

屠腹人

同藩士族横山正太郎

午二十八歳

右正太郎事、実ハ同藩森喜右衛門三男ニテ、横山家養子ニ參リ、當時為學問、東京本所住居田口文蔵方へ入塾仕申候、今廿七日曉藩邸通用門江參リ、袋ヲ差出シ袋ハ父並國友ヘノ遺書ニテ、不得止及諫死候趣、別ニ子細無之由、徵兵本宮へ届呉候様門番ノ者へ相托シ、直ニ引取候処、間モ無ク邸前ニ於テ屠腹致候ヲ見当リ報告有之、早速邸内へ引取、子細相尋候処、集議院開院以來建白之者其数ヲ不知候得共、其情

不貫徹、御採用無之事多シ、サスレハ草莽卑賤、且不肖之愚論ヲ以テ建白仕候共、御採用ノ儀無覺束、然トモ黙止スルモ不本意、死ヲ以テ諫ムルニ若カスト一圖ニ思込、十箇条之建白書ヲ認メ、集議院ノ門前へ竹へ挾ミ閣キ藩邸前迄立退キ、右之次第ニ及候由、付テハ同藩之者ニ於テハ、存命ノ内御採用之有無為知度情態ニテ、集議院へ為同人差出候処、同院判官右建白書持參、參 朝之途中ニ行逢、早速罷帰、其段申聞候処、安心之体ニテ閉目、其俛絶命候、

伊地知權大參事別段申口写

今度之事件ニ付、致闕係候儀ニハ無之候得共、為御含申上度、右正太郎儀、幼年之頃ヨリ能父母ニ事ヘテ順ニ、敢テ其命ニ違ハス、成長スルニ及ンテ、淳朴ニシテ言葉少シ、藩政向且同社中ニ於テモ、其闕遺アル時ハ必直言ス、知テ無不言、然トモ慷慨激烈ニシテ、朝政ヲ可否スルカ如キハ、一切無之ト云々、右之通ニテ死骸篤ト点檢仕候処、全自殺ニ相違無之、聊不審之廉無御座候ニ付、死骸ハ埋葬致シ不苦旨、右清之進へ申聞引取申候、

明治三年庚午七月廿七日

鳥居少巡察

吉田巡察屬

後藤史生

一銀五貫目

亡横山正太郎江

右忠魂為祭祀寄附、

八月九日

島津圖書

七二九ノ四

死骸御点檢ノ次第書写

疵処左脇腹、疵口三寸、深サ一寸五分位、水落辺二ヶ所疵口一寸ツ、ノ浅疵、咽喉突疵二ヶ所、管ニカ、リ、深疵所無之、白縞木綿筒袖襦袢着用ニテ、蒲団ノ上ニ仰居候、

但屠腹ノ節ハ青地木綿紋付ノ単衣、黒呉絹ノ袴着用ノ所、汚染ニ付為着替ノ由、

七二九ノ五

七月廿七日東京芝伊皿子町大圓寺ニ葬ル、

法名新婦 正覺圓明居士

一金拾三兩

亡横山正太郎

右葬式料トシテ被下候事、

七月廿七日

藩邸公用方

一金三百疋

右法事料下賜候事、

藩邸公用方

七二九ノ六

東京詰親戚ヨリ国許江送ル書翰

横山正太郎殿事、今廿七日曉七ツ過ニても候也、神田御屋敷西御門江被參、御門番相起シ、所持之革袋差出、無抛要用書入付置候間、本宮江慥ニ差出呉候様頼置被立去、当朝六ツ過御門番より本宮江相届、開方有之候処、大迫喜右衛門殿・高島鞆之助殿、田中周藏殿江連名書状式通有之、開封有之候処、別紙之通之形行ニ付、早速子細相尋度被出立候折柄、種子島中輔殿馳付被參、正太郎殿儀御門前ニ自分短刀ニテ致軽我居被申、早速御屋敷江引取置候旨被申出、大迫氏始石神氏(良密)ニも同道ニテ馳付、子細被相尋候処、存慮之儀有之、今曉集議院江致建白候間、乍自相分り可申、外ニ全ク子細無之候間、慥ニ被相答、早速石神氏無手拔療治相濟候上、建白之儀公用方より種子島中輔殿ヲ以、早々集議院江被相伺候処、封書を以慥ニ建白相成居、太政官江差出相成旨被致承知候付、形行田中周藏殿より正太郎殿江

安心可有之旨、具ニ被申聞、同郷其外親類之面々追々

相寄、養生方精々尽力候得共、別紙之通數所之疵ニテ、

終ニ其詮無之、当日九ツ時分養生不相叶、実以御殘多

次第奉存候、左候て諸事公用方計ニテ、大圓寺境内江

厚葬方被仰付候間、前之形行具ニ御家内様並森氏江為

御知相成候儀共、可然御取計可被下候、建白書写之儀

は、公用方より知政所江被差遣候間、於其地写取相成

候様致承知候間、左様御承知可被下候、外ニ御双親様

江之一封も残置有之、書状内江封入差上候ニ付、受取

可被下候、且又真之助様江之一封も有之、公用方より

被差上候旨致承知候、左候て今便餅原岩次郎殿へ相頼

ミ、遺髪並別紙之通所持品差下候間、御受取可被下候、

乍末筆御一同様御愁傷之程奉遠察候、以上、

七月廿七日

岩山長右衛門

岩山壮八郎

宮里佳左衛門

坂本俊一郎

肥後七左衛門

有馬新右衛門様

相良彌兵衛様

人々御中

別紙略ス彈正台御檢使上申ニ詳ナリ

午七月廿七日

疵所見請醫師坂本亭順

七元ノ七

遺書門番江托仕シ
置候革袋ノ中

此袋内封しもの式通、格護いたし置候付、慥ニ御請取

御開き被下度、子細ハ右封中ニ申上候、不備、

七月廿六日

横山正太郎

大迫喜右衛門様

野津七左衛門様

九牛ノ一毛逆モ無詮事トハ奉存候得共、乍恐至愚を不

顧存慮式通ニ認メ、身ヲ尽シ建白仕置候間、左様御聞

届可被下候、御兩殿様へモ建白ノ賦相認居候処、西郷

氏奉職承リ、百事心ニ懸ル事ナク態ト差扣申候、

真之助様へノ一封可然御取計可被下候、乍末筆是迄御

懇切ニ被仰下、別て辱御礼申上候、

七月廿六日

横山正太郎

大迫喜右衛門様

尚々各様江別紙差上申候間、可然御伝声奉願候、

是迄不淺御懇意万々忝奉存候、今日長別一首ヲ残置候
間、御志之御方御申談可然様呉々奉願候、

かきなてゝ我かうへおきしくすの子を

いやかきなてゝいやましにませ

七月廿六日

横山弟

中島兄

安田兄

上封ニ中島健彦様

自東京

安田泰助様

横山正太郎

要詞

是迄不淺御懇意万々忝奉存候、今日長別一首ヲ残置候、
御志之御方御申談可然様呉々奉願候、

かきなてゝ我かうへおきしくすの子を

いやかきなてゝいやましにませ

七月廿六日

横山弟

高島兄

田中兄

追テ同郷中ニ別紙不呈、宜敷御伝可被下候、高城氏

等是亦奉願候、

親元江送る書状

尚々御親族様江別紙差上不申候間、宜敷御伝へ可被
下候、五代競太様江も可然奉願候、おくまとのへ申
進候、子共ノ成長姑息ノ情ヲ絶チ、人間ニ相成候様
御そたて御願申進候、

父上様・母上様・御祖父様御始メ、益御機嫌能被遊御
座、恐悅御儀奉存候、楮私事無涯御鴻恩ヲ蒙リ、御行
末迄も見届、屹ト奉報度存念罷在候処、君恩亦重シト
スルアリ、恐多モ今日之御政体日々紛乱シ、至愚ノ小
子譬ヒ幾百遍雖献白必ス不被信也、故ニ身ヲ尽シテ寸
分ノ有益ヲ歎願ス、就ては御老親ニ先チ、幼児ヲ見ヤ
リ、其容チ不孝不慈ト思召も可有御座候得共、私ノ情
実モ深く御熟察被成下、此上は元千代・壮次郎ヲ私ト
思召、屹ト御用立候様御教育呉々奉願上候、恐惶謹言、

七月廿六日

横山正太郎

御祖父様

父上様

両母上様

御叔父様

金之丞様

長別贈二児

安武
五

報國至誠曾不死 赤心片々は干城
憐君義氣忠胆切 万古千秋孰争名

七五ノ八

大久保利通日記

廿七日月七

一今朝黒田次官(清隆)樺太就発足、為暇乞差越候、訪
伊地知正治子、昨夜横山正太郎割腹イタシ候由ニテ、
各集会ノ所ナリ、書置モ有之、大旨趣ハ
朝廷へ建論イタシ候一書差出、集議院江張置候云々、
忠志可感、参朝、今夕木戸子入来、段々及示談候、

廿八日

一八字参朝、

廿九日

一八字参朝、訪吉井子、伊地知子会ス、

晦日

一今朝伊地知子入来、建白書持参、八字后参朝、今日東
京府止刑ノ事、段々御評議有之、

七五ノ九

道島家記七月廿六日

横山忠死ノ為、越前永平寺ノ卧雲

七五ノ一〇

古ヨリ新進ノ人已カ材智ヲアラワサントテ、好テ新意
ヲ出シ、旧政ヲ改ルコト、イツレノ代ニモナキニアラ
ス、其内十二三ハ益アルコトモアレト、大カタハ近
効ノミト主君ヲ忘レ、事ノ易キヲノミ見テ難キヲシラ
ス、サル程ニ思ヒノホカサハル事ヲホク出来候テ、貨
材モ費シ人力ヲ耗シナカラ、何ノ甲斐ナキコトニナル
ゾカシ、己ノミナラス、毛ヲ吹テ疵ヲ求メ、風ナフシ
テ波ヲ生シ、恩厚ノ風日ニ敗レ、奔競ノ習日々長スル
程ニ、タトヒ小利ヲ得ルトモ、ナカク国家ノ実ヲ貶
ス事軽キニアラス、イハンヤ祖宗ノ良法成策、先代ヨ
リ用ヒ来テ、天下ノ耳熟シ自馴シ事久シ、カヤウノ類
ハ輕シクハロウコトアルヘカラス、宋ノ熙寧中ニ、シ
ハク法ヲ変シケレハ、唐庚存変ノ論ヲアラハシ、専
ラ国家ノ旧物ハ常ニ民ノ耳目ニ習ハスヘシ、不得已事
アラサルヨリハ、改ル事変置シテ民心ヲ失フヘカラス
ト論シケルコソ、尤其理ニ当ル事ナリ、

七二九ノ一
略上

同明治三
年七月二十七日昧爽、鹿兒島県士族横山安武(通称正太郎)一書を竹頭に挿み、集議院に詣り、之を門扉に掲げ、帰途に自尽す、未だ殊せず、故を問ふ、曰く、朝廷集議院を開く、既に日あり、鄙野僕の如きは言省せられずと雖も、天下の事漠視するに忍びず、故に十事を建議し、及征韓論を駁し、死を以て諫むるのみと言終て瞑す、是に於て朝廷彈正台に命し、諫死の顛末を検せしめ、鹿兒島藩知事に詔して、安武の諫死するは、事に於て誤聞するあるに因るを免れずと雖も、実に憂国の情より発するを以て、金百両を賜ひ祭料に充つ、其集議院に上る書の略に曰く、

旧幕府ノ悪弊暗ニ新政ニ移リ、昨日非トセシ者、今日却テ是トナス、細ニ其条目ヲ挙ケン、輔相ノ大臣ヨリシテ侈靡驕奢、上ハ朝廷ヲ暗誘シ、下ハ飢餓ヲ察セサル、是其一ナリ、大小官員外ニハ虚飾ヲ張リ、内ニハ名利ヲ事トスル、是其二ナリ、朝令夕替、万民狐疑ヲ抱キ方向ニ迷フ、是其三ナリ、駅毎ニ人馬ノ賃錢ヲ増シ、五分一ノ税金ヲ収ム、是其四ナリ、直ヲ尊ハスシテ能者ヲ尊ヒ、廉恥上ヲ論セサル、是

其五ナリ、官ノ為ニ人ヲ求メス、人ノ為ニ官ヲ求ム、故ニ各局ノ其職ヲ勤ムル者、傭工ノ其主ニ於ケルカ如キ者アリ、是其六ナリ、酒食ノ交ヲ重ンシ、義理上ノ交際ヲ輕ンス、是其七ナリ、外國人ト定約ノ疎妄ナルヨリ、常ニ物論ノ沸騰ヲ生ス、是其八ナリ、黜陟ノ大典未タ立タス、賞罰愛憎ヲ以テス、故ニ春日某ノ如キ廉直ノ者、却テ私恨ヲ以テ冤罪ニ陥ル、是其九ナリ、上下交々利ヲ征ツテ国危シ、在朝ノ君子恣意妄行スル、是其十ナリ、

又征韓論ヲ駁する略に曰く、

征韓論ヲ主張スル者ハ、畢竟皇國ノ萎靡振ハサルヲ慨嘆セシヨリ致ス所ナレトモ、兵ヲ起スニ名アリ、義アリ、豈慎マサル可ケンヤ、今朝鮮ノ事ハ姑クコレヲ措キ、我邦ノ形勢ヲ察シ、維新ノ徳化ヲ張ラサルヘカラス、徳化張ル、朝鮮豈能ク非礼ヲ我ニ加ヘンヤ、今却テ彼ヲ小国ト悔リ、妄リニ無名ノ師ヲ興シ、万一蹉跌スルコトアラハ、天下ノ億兆何ト云ン、且ツ彼モ近年屢々外國ト接戦シ、頗ル兵革ニ慣レタレハ、文禄ノ時勢ト同時ノ論ニアラス、夫レ秀吉ノ威力ヲ以テスラ尚数年ノ力ヲ費ス、況ヤ其時ト異ナ

ルヲヤ、故ニ先ツ綱紀ヲ張テ政令ヲ一ニシ、姑ク蕭

牆意外ノ變ヲ凶ル可シ、豈朝鮮ノ罪ヲ問フニ暇アラ

ンヤ、

○以下
下略

七二九ノ二

八月八日於藩地、伝事上村休助ヨリ親類安田泰介

江口達之写

横山正太郎儀、去月廿七日晝、東京ニ於テ集議院御門

扉江建白書竹ニ挿ミ立、於側屠腹致シ、終ニ白昼死去

致候段、只今飛脚到着いたし、御届相成候ニ付相達候、

尤建白書写等ハ明日可相下候条、親類之内出殿可被致

との事、

七二九ノ二三

寺師宗道日記

同月八日 晴

上略

又初生横山正太郎、朝政之事ニ付十ヶ条之建言いた

し、諫死仕候由、実ニ稀代之忠烈感ニ堪ス、即諫書写

置候以下略、

七二九ノ二四

太政官御沙汰ニ付本営へ通知書

今日弁官より御呼出にて、別紙之通金子共御渡相成候

ニ付、則本書ハ御国元江申越候、写差遣候付、親類之

者へ御達給度、此段申越候、以上、

八月十日

藩邸公用方

猶神祭之義、兩三日中ニ神祇官福羽少副より返答有

答ニ付、其内相待呉候様、内田仲之助より承届候、

此段親類江御達可給候、以上、

本営

七二九ノ一五

藩知事公真筆、家令樺山休兵衛ヲ以賜り候写

横山正太郎儀、皇国之御為至誠之忠胆ヨリ、死ヲ以

朝廷江致建言候儀、深令感賞候、此上ハ尔後之祭祀不

懈を第一之儀と存候事、

八月



別ニ内々御手元金百両、祭祀料トシテ下賜候事、

伝事上村休介ヨリ親類相良五左衛門江達旨写

一金百五拾両

横山正太郎

右ハ 皇国之御為至誠之忠胆ヨリ、死ヲ以

朝廷江致建言候儀深御感賞、昨日モ金子下賜候得共、

猶又葬式料トシテ右之通下賜候条、親族江可申渡候、

八月

知政所

七二九ノ一六

藩内布告文

横山正太郎儀、学諸生東京江被差出候処、皇国之御

為見込之趣、条挙ヲ以 朝廷江建言及自殺候段相達、

至誠忠胆之一举深御感慟、御別紙之通親類江被仰達、

尚祭祀料等下賜候事、

明治三年庚午八月

知政所

別紙略ス、藩知事公真筆在前、

七二九ノ一七

藩庁ヨリ太政官江上申書

藩士横山正太郎儀、死ヲ以献言仕候、誤聞ノ廉有之、

実以恐入次第二御座候間、右ニ付祭祀料頂戴被仰付候

得共、誤リヲ正シク申建候始末御咎目可奉蒙答候処、

却テ御目錄被成下候テハ、名実不相当ノ訳何以靈魂慰

可申哉、賞罰ノ典ニヨイテ何レトモ方嚮ヲ失ヒ、所置

難仕御座候間、重疊恐懼ノ至御座候得共、御目錄返上

仕候付、御執奏奉冀候、

八月十八日

鹿兒島藩庁

右ハ奉対、朝廷返上ノ儀古例無之ニ付、御執奏不

相成旨、屢々御説諭ヲ以テ書面却下相成候、

七二九ノ一八

上村伝事ヲ以扶持米下賜之旨申渡書写

一御扶持米三拾五俵

横山正太郎

右ハ 皇国之御為ヲ存シ、至誠不被止処ヨリ、死ヲ以

テ

朝廷江及建言候始末、畢竟其趣意正敷忠実之致処、別

テ御感之至ニ候、依之其靈魂靖献靈社江配祀被仰付候、

被追復旧官本行之通三拾年間被下置候条、親族江可申

渡候、

八月廿五日

知政所

七二九ノ一九

靖献靈社ニ於テ祭典ニ付達書写

横山元千代

右ハ明九日靖献靈社ニおゐて、亡親横山正太郎忠魂祭

祀被仰付候間、四ツ時ヨリ相詰候様可申達候、

十月八日

知政所

翌九日祭祀被仰付、元千代親族家内中参詣、神酒頂

戴候事、

七九〇

寺師宗道日記

同八月廿五日 晴

英之丞略九来ル、東京左右聞、朝廷役人之嬌奢咄等聞、

又横山正太郎建白諫死之事も誤聞之由、奸徒之讒言等

ニて間違おもひ込、死ヲ遂候事不便之由ニて、御金百

兩被成下候由、右ニ付返上相成候由、誠ニ 朝臣之不

正奸猾可惡事也、下略九

七九〇二 八月廿八日墓所建設

一墓石之儀ハ官許被仰付候事、

一玉垣並香花料若干、方限中左記ノ人数ヨリ寄附、

松崎善兵衛 和田彦四郎 脇田彦七

上村精之助 黒木朋次郎 星山綱七

植村才次郎 有村清太 河島新之丞

三原峯介 星山仲吾 川上嘉次郎

上原精之進 有川八郎 奥山七之助

土師莊太郎 有川幸太郎 坂本俊一郎

上村藤之丞 大迫源之丞 田中周蔵

奥山嘉一郎

一石燈籠 壺本 本當詰左ノ人数ヨリ寄附、

大迫貞清 淵邊高照 大山清海

河野通政 野津鎮雄 高山昭清

海江田信義

一同 壺本 親類左ノ人数ヨリ寄附、

肥後七左衛門 坂本俊一郎 岩山壯八郎

岩山長右衛門 宮里佳左衛門

一同 壺本寄附

一香花料若干

以上為横山君建トアリ、

海江田信義 宮田正實

七九〇三

御沙汰書太政官日誌東京城第卅一
明治二年八月甲辰御記載

島津鹿兒島藩知事

其藩士横山正太郎儀、去月廿六日夜集議院江投書、翌

曉遂ニ屠腹候処、時事誤聞之廉モ有之候得共、畢竟憂

国之衷情深ク、愍然ニ被思食、為祭祀料目錄之通下賜

候事、

庚午八月

御目錄

太政官

金百兩

七二九ノ三

石誌文 東京芝伊豆子大戸
寺墓前ニ建ル所

横山君之墓碑

君諱安武、稱正太郎、本姓森氏、鹿兒島藩士族、父曰
〔有怨〕 某母某氏、出繼横山安容後、因冒横山氏、為人直而温、
 事親孝甚得其歡心、交朋友以信、平生未曾危言激論、
 嘗曰、凡心事接物、宜以至誠、不宜任智數、初任侍直、
 長勤慎不怠、既而辭職、游学於東京、入田口翁門、君
 憂国之念發於天性、窃慮中興之業或不卒、痛哭流涕、
 自草封事極論時務十條、味爽抵集議院、挿諸其門扉、
 退自刃於院之南隅、未殊、邸吏載歸、問狀、報之於院、
 途遇判官持封事趨朝、還告諸君、君欣然曰、近者四方
 建議之士多矣、區々愚論、固知不足以充採用、然心血
 所注不可以默止、今以死訴陳微衷、苟得下情上達、則
 吾願足矣、豈敢怨天咎人哉、言畢而逝、天明治三年庚
 午歲在秋七月二十七日也、享年二十有八、葬於東京大圓
 寺、其將上疏之晨、以一囊托藩邸閹者、達之本宮、拆
 視則遺父母及親友之書也、嗚呼、君之於死也、可謂情
 義全矣、於是友人吉利用通・岸良兼行・山本盛親・江

田國通・寺田毅・伊瀬知好成・永吉實辰・山本盛秀・
 湯地祐守・久保包武・東條義正・吉田清長・有馬純則・
 蒲生清行・河島長正、謀立石於墓側、以表其梗概云、
 明治三年庚午閏十月

〔碑にて校訂〕

七二九ノ四

横山安武、稱正太郎、森有怨之第四子、母隈崎氏、出
 繼横山安容之後、為人忠実而泛愛衆、事親尽色養、而
 至于事君、則犯顏言人所不敢言者、皆發忠愛之心矣、
 安武在 君側十余年、排因習、革旧弊、且欲使宮中府
 中一体、論弁不止、其言一時能行、而下情上達、宮府
 無間隔者、安武之功居多焉、癸亥歲英艦來戰於鹿兒島
 港、人家數百罹兵燹、安武之家亦逢其災、 邦君每戶
 賜金以救其急、安武以多年勤勞之功、特蒙賞賜、安武
 恤故人貧困者、乘夜以賜金窃投於其家而去、家人不知
 其故、踊躍以為天神之冥助也、安武死後、親戚朋友檢
 其日記、始知安武所為、嗚呼不為利謀、不為名設、皆
 發於至誠、而然也、安武任近侍、專輔導 公子、孜孜
 不怠、以為 公子生長於深宮、疎下情、切勸遊學、而
 自隨行至長州焉、有故召 公子還、安武亦從而歸、則
 被奪其職、於是自反曰、当益勵志以修德業耳、再請遊

学、始至西京、去又至東京、當此時、

朝廷百官遊蕩驕奢、而誤事者多、時論囂々、安武乃慨然

自奮謂、

王家衰頹之機、兆于此矣、為臣子者、不可不千思万慮以救之、然而雖尋常諫疏百口陳之、力不足矯正、則竟無寸益而已、不如一死以諫之、若有所感悟、豈無小補乎、乃作諫書、陳弊事十條、持至集議院、插之門扉、退居腹津藩邸門前、奕明治三年庚午七月廿六日夜也、弘曉門吏開門、則有僵臥者、以為薩人也、驚走諸薩邸、邸吏到則安武也、扶起入邸、氣息未絕、曰奉書集議院、語僅通、乃遣人問之於院、答曰、今朝院門有封書、取而上于

政府、走婦具以其狀告安武、安武怡然而瞑目矣、於是世人感安武之死諫、空論忽止、時弊亦以漸而改、安武以忠美之資、未能大有為、而徒為史蹟之尸也、噫、

明治五年歲次壬申八月上澣

西鄉隆盛謹誌

松元武雄謹書

(碑にて校訂)

【参照】

横山正太郎死諫始末序

明治之初、我毛利氏釐革藩政、大張学事、方是時薩之

藩士正太郎横山君及數子、亦來寓学中矣、予識君於山

口、然不能屢相往来、会脱兵擾乱序下、学生生徒亦散遣、既而聞君之同学有公子、遽舍毛利氏之館、以避禍、

然開戰兩日、脱兵四散、序下無事矣、無幾前來学者將

還国、余以参事官抵防府、撰港灣之政、故為藩士、舟

楫之便有所处理、至是与君别矣、夫与君屢相見、而不

能把臂道志、其後飛報至自東京、曰、集議院之門有諫

死之士、而其為何藩士未可知焉、尋接彈台之報、始知

為横山君、余不覺絕叫曰、憂国如是之人、而相見之間、

不能察諸声色、余之疎鹵無識人之鑒、不亦甚哉、嗚呼、

憂国之士、以言論動一時者或有之矣、然一死以聳動一

世者、天下果有幾何焉、今也距維新二十有余年、雖治

具較拳、弊亦隨之、況德義殆墮地、猥薄輕佻、靡然為

風、君之所嘗憂者、日甚於一日、使君有知乎、其謂之

何、余誦君之遺書、有不任痛歎者矣、頃族弟清介將刻

其遺稿、謁余索序、余与君識於生前、而不能悉所欲言、

每以為憾、因述余之所悔、以置之卷端、

明治二十四年一月十日

楫取素彦

(希賢、長州藩士)

七三〇 諸藩ニ大学南校貢進生ヲ進致セシム

七月廿七日

諸藩ヲシテ大学南校貢進生ヲ進致セシム

(頭註)四年文部省第三号ヲ以テ廢止
〔第四百九十一〕七月二十七日(布)(太政官)

大学南校ニ於テ、外国教師御雇相成、人材成育被為在候間、藩々ニ於テ、

現高拾五万石以上

三人

同 五万石以上

二人

同 五万石未満以下

一人

右之通十六歳以上二十歳マテ人材相選、来ル十月迄ニ南校へ可差出候、尤年限・学費等之儀ハ南校ニテ可承合事、

但是迄南校入舎之内、其選ニ当候者有之候ハ、差加へ不苦候事、

(参照) 三年月

大学南校貢進生選挙心得

貢進生選挙心得

一御布告之通、十六歳以上二十歳迄之内ニテ、秀才可相選事、

但行状正鋪、身体壯健之者肝要之事、

一兼テ洋学研究致居候者有之候ハ、選挙勿論之事、

但年齢並行状身体云々之儀ハ、前条之通タルヘキ事、

一是迄当校へ差出置候入舎生ヲ、改メテ貢進生ト致シ度向ハ、其段可願出事、

但大中小藩人員定数之余ハ、其生徒限リ員外進生

トシテ、是迄之通可被差置候間、是亦右之段可願出事、

一右是迄之入舎生ヲ改メテ貢進生ト致シ候分ハ、其者学力之淺深ニヨリテ、大凡廿一二歳迄ハ差許可申、

右ヨリ長年之分ハ員外生勿論之事、

一在学年限五年之心得ヲ以可差出事、

一貢進生学費ノ多少ハ、藩々之便宜ニ任スト雖トモ、

一ヶ月金十兩ヨリ以下ニ下ルベカラス、尤右ハ一ヶ

年四度ニ纏メ、当校會計掛主簿へ可差出事、

但此外ニ課業書籍代、一ヶ年凡五十兩程ニ見込置

可申、尤右ハ予メ指出置ニ不及事、

一右生徒病氣等之節ハ、一応本校医官ニテ治療相加へ可申候得共、長病等ニ相成候節ハ、藩々へ引取可申

事、

一欠員相成候節ハ、速ニ代員貢進可致事、

一今度入舎之節左之証書可差出事、

美濃紙堅四ツ切

英 独乙 庚午 何月	何藩 姓	名 午何歳
右此度貢進仕候ニ付テハ御規則堅為相守可申候也	何藩何役 姓	名印

【参照】

第三 九月二十五日

今般学制致改革候ニ付、自今貢進生名義廢止候事、

但右生徒中有志之向ハ、願出之上入学可差許候条、

於其臬勝手ニ帰巢等為致間敷、尤病氣或ハ不得止

事情有之、帰巢為致候半テハ不濟節ハ、其旨届之

上帰巢不苦候事、

七三一 藩庁軍務局・大蔵局ヲ合併シテ軍神社ヲ

新宮シ、更ニ練兵場ヲ拡張セシム

七月廿七日

藩庁、軍務局・大蔵局ヲ合併シ、軍神社ヲ新宮シ、更ニ

練兵場ヲ拡張セシム、

当局ノ儀大蔵局ト両局ニ被召建置候得共、何篇一途ニ

不出候テハ、自然隔絶ノ儀モ差見得候間、両局御引直

ニテ、一局ニ御造立相成度、左候テ御軍神社之儀モ、

同様新ニ御造立相成度、且操練場ノ儀至手狭ニ有之候

ニ付、島津圖書旧邸地迄モ、御買上被仰渡儀ト及評

議候、此段申出候、以上、

但御引直ニ付テハ、別紙画面面相添差出候、

午七月

軍務局

右之通被仰付候付、可承向へ可申渡候、

午七月廿七日

知政所

【参照】

道島正亮日記八月朔日

一午八月朔日方ヨリ軍務局本営西ノ方二丸ノ下ノ道へ直

シ方有之、垂水ヨリ宮ノ城ノヤシキ迄モ御取入相成、

軍務局ノ境内ニ相成候事、

七三二 橋口與一郎ニ学館ノ監督ヲ命ス

七月廿七日

藩庁橋口與一郎ニ学館ノ監督ヲ命ス和漢洋ノ学館並ニ西洋医学学校

橋口與一郎

右ハ学館ノ儀和漢洋ノ科被建置、風教政治ノ基本且西洋医学校ノ儀発起ノ事ニテ、諸事厳密不行届候テハ不相濟事候付、万端可致指揮旨仰付候条、学頭並西洋医学校其外可承向ヘモ可申渡候、

七月廿七日

知政所

七三三 藩庁庶人ノ猥リニ刑場ニ入ルコトヲ嚴禁

ス

七月廿八日

藩庁糺明局ニ於テハ、猥リニ刑場ニ入ルコトヲ嚴禁ス、一下広小路ニ於ヒテ笞刑ヲ施スハ、普ク衆ニ示ス訳故、庶人相視候儀ハ不苦候得共、猥ニ刑場ヘ入込妨相成候ニ付、以来刑場繩張内ヘ踏入間敷候、若違犯ノ者ハ可及沙汰候、此旨向々ヘ可申渡候、

七月廿八日

糺明局

別紙承知候、名前可被相記候、

七月廿八日

糺明局

民事局

會計局

軍務局

伝事局

学館

洋学局

監察局

内務局

御達

七三四 鮫島尚信ヲ東京府大参事ト為ス

七月廿八日

鮫島尚信誠ヲ東京府大参事ト為ス、

鹿兒島県士族

鮫島尚信

誠藏

中略

同年明治二年七月十五日

一任東京府権大参事、

同三年庚午七月廿八日

一任東京府大參事、

以下略ス

七三五 李佛兩國交戦ニ付局外中立ヲ令ス

七月廿八日

李・佛兩國交戦ニ付局外中立ヲ令ス、

〔頭註〕第五百四十六ヲ以テ改正

〔第四百九十二〕七月二十八日（布）（太政官）

今般李漏生・佛蘭西兩國交戦ニ及候趣ニ付、於我皇國
ハ局外中立之儀堅可執守旨被 仰出候、就テハ交易場
ハ勿論、海岸諸要区ニ於テ左之条々相心得、不都合無
之様可取計候事、

一局外中立之上ハ、交戦之理非曲直ヲ品評致ス間敷、
文書上ハ勿論、應接言辞之間專ラ注意可致事、

一港内及内海ハ勿論ニ候ヘ共、外海之儀ハ距離三里以
内兩國交戦ニ及ヒ候儀ハ不相成、尤軍艦・商船共通
行ハ是迄通差許候事、

一薪・水・食料等ニ闕乏シ、或ハ艱難ニ出逢ヒ、我開
港場ハ勿論、不開港場ヘ來候右兩國之軍艦・商船共、

今般之戰爭ニ關係無之分ハ、兼テ御布令之趣ニ基キ、
通例之手続ヲ以テ偏頗ナク給与可致候事、

一一方之軍艦我港内ヘ進口致シ、他方之軍艦追來、双方
共一港内ニ入込候節ハ、先入之船出帆後廿四字内ハ、
後入ノ艦出帆不相成候儀ニ付、差止可申事、

一一方之軍艦我港内ヘ進口致シ、他方之軍艦我港口迄
追來待受候体相見候節ハ、右船帆影相消候迄ハ、港
内江先入之船退帆不相成候事、

一我港内ニテ交戦ニハ不及候共、兩國船艦分捕之姿相
見候ハ、差止可申候事、

一交戦國之軍艦大洋中ニテ接戦ニ及ヒ、敗北之余帆檣
等毀損シ、我港内ヘ遁込候節ハ、其船艦乗込人員並
兵器等悉ク此方ヘ為引渡、再度戦地ヘ赴キ候事ハ不
相成、双方平和相成候迄預リ置可申、但病人・瘡者
養生之儀ハ不苦候事、

一我開港場内ニ兵士ヲ置、軍艦滯泊其外海軍屯所差許
置候國モ有之候ヘ共、右ハ全ク平時我港内在留之其
自國商民保護之為ニテ、他國交戦ニ付、右場所ヲ相
用候儀ハ不相成事ニ付、右場所ニテ戰爭ハ勿論、兵
士・武器等俄ニ相備ヘ、戦地江出帆致シ、或ハ戦地

ヨリ直ニ右場所へ引取交代休息致シ候等ハ、右場所ヲ以テ其敵国ヲ伐之利ニ資シ候儀ニ付、決テ不相成候事、

一 交戦国之軍艦・兵士等、戦争ニ赴ク為ニ我港内ニ碇泊シ、或ハ上陸イタシ、戦備ヲ整ヒ、又ハ兵士・武器等ヲ増載イタシ候儀ハ不相成候事、

一 御国船艦ニテ交戦ニ及候方へ、兵士・武器其外直ニ戦争ニ供候品物運輸イタシ候儀、不相成候事、

一 御国人並我管内在留ノ外国人共、交戦ニ及候国々ノ軍艦及商船ニ候共、其戦争ニ使用ノ船々へ被雇乗組、又ハ他国船タリトモ其戦争ニ関係ノ事柄取扱候為ニ乗組、或ハ其他軍事ニ相携候事件、及ヒ品物等世話イタシ候等ノ儀、不相成候事、

一 戦地ニテ分捕イタシ候品物ヲ、我港内ニオイテ売買イタシ候儀、不相成候儀ニ付、其事実分明ノ者ハ取押預リ置、其旨可伺出候事、

一 御国人民ハ勿論、荷物等交戦ニ及ヒ候軍艦並ニ其国々ノ商船ニ積込候儀イタス間敷候事、右規則中外国人に相拘候件々、万一違背及ヒ候節ハ、開港場ハ其国々コンシユルへ掛合差止可申、若シ不服ノ節ハ其

港軍艦ニ相達シ、兵部ノ処置可有之候事、

但シ不開港場其外海岸ニテ、右様ノ儀有之候ハ、

於地方官差止置、左ノ港近傍之地ハ軍艦へ可相

達、懸隔之場所ハ、其顛末速ニ兵部省へ可届出

事、

横濱港

小艦隊指揮兼艦長

甲鐵艦

中島四郎

同

乾行艦

伊藤二郎

兵庫港

小艦隊指揮兼同

春日艦

赤塚源六

同

富士艦

石井貞之進

攝津艦

長崎港

小艦隊指揮兼同

龍驤艦

中牟田倉之助

同

電流艦

牛島五一郎

延年艦

箱館港

同

日進艦

真木安左衛門

品海予備

第二丁卯艦

千代田艦

右条々開港場ハ勿論、沿海府藩県共、屹度可相心得

候事、

【参照】

〔頭註〕四年正月、佛和議成ル

第五百四十六 八月二十九日（布）（太政官）

字漏生・佛蘭西兩國交戦ニ及候処、於 皇国ハ局外中

立ニ付、開港場並ニ海岸諸要区心得之条々、先般御布

告相成候処、更ニ左之通御改定相成候事、

一 港内及ヒ内海ハ勿論ニ候ヘトモ、外海之儀ハ凡三里

陸地ヨリ砲丸ノ達スル距離以内、兩國交戦ニ及候儀ハ不相成、尤軍艦・

商船共通行ハ是迄通り差許候事、

一 薪・水・食料等ニ欠乏シ、或ハ艱難ニ出逢ヒ、開港

場ハ勿論、不開港場へ来候右兩國之軍艦・商船トモ、

兼テ御布令之趣ニ基キ、通例之手続ヲ以テ偏頗ナク
給与可致候事、

一 双方ノ軍艦港内へ進口致シ、一方之船出帆後廿四字
内ハ、其一方ノ船出帆不相成候事、

一 開港場内ニ兵士ヲ置、軍艦滯泊其外海軍屯所差許置
候国モ有之候へ共、右ハ全ク平時港内在留之其自国
商民保護之為ニテ、他国交戦之為差許置候儀ニハ無

之候ニ付、右屯所平日ノ用事ノ外、総テ右場所ヲ以
其敵国ヲ伐之利ニ資ケ候儀ハ不相成候事、

一 御国船艦ニテ交戦ニ及候方へ、兵士・武器其外直ニ
戦争ニ供シ候品物運輸イタシ候儀不相成候事、

一 交戦国ノ船艦へ水先案内ノ外被雇乗組、出先ニテ兵
難ニ遇ヒ及訴訟候儀不相成候事、

一 戦地ニテ分捕イタシ候品物ヲ、港内ニ於テ売買イタ
シ候儀不相成候、尤売買不致候テハ不相成場合モ有

之節ハ、其旨可伺出候、然ル上分捕致シ候国ノ公使
へ談判、御処分有之ヘク候事、

一 其外輸出・輸入品ニ就テハ、条約面ニ禁制セル品ノ
外ハ、平日ノ通心得可申候事、

一 右規則中外国人ニ相拘候件々違背及ヒ候様子相見候

節ハ、開港場ハ其国々コンシユルヘ掛合差止可申、
若シ不服ノ節ハ其港軍艦ニ相達シ、兵部ノ処置可有
之候事、

但不開港場其外海岸ニテ右様ノ儀有之候ハ、於
地方官近傍開港地ノ庁、並滯泊ノ御軍艦ヘ可相
達、懸隔之場所ハ、其顛末速ニ兵部省並外務省
ヘ可届出候事、

右条々開港場並府藩県諸要区屹度可相心得候事、

七三六 府藩県ニ管内寺院本末寺号等ヲ録上セシ

ム

七月廿八日

府藩県ヲシテ、其管内寺院本末寺号等ヲ録上セシム、

〔第四百九十三〕 七月廿八日(布) (太政官)

府藩県管轄内寺院本末寺号等、別紙雛形之通取調、来
九月中民部省ヘ無遅滞可差出事、

別紙雛形

表紙

(△印ハ朱書)

用紙美濃紙 縦九寸三分 横六寸三分

天浄古新五大曹黄一日時
台土真義義
言言言
宗宗宗宗宗宗宗宗宗宗
宗宗宗宗宗宗宗宗宗宗

本末寺号其外明細帳

何府 何藩 何県

何宗何派

一本山

何国何郡何町何村

何寺

住職誰

△無住ニテ他ヨリ兼帯ニ候ハ、如斯但書ニ認ムヘシ、

〔但住職無之、何藩管轄所欵、当藩管轄所欵、何国何郡何

村右何寺末何寺住職誰兼帯罷在候、

一 境内何坪欵 反別何程

一 滅罪檀家何軒 無之欵

一元朱印地高何程

此反別何程

△朱印地高ノ内ニ境内籠リ居候ハ、如斯内書ニ認ムヘシ、
余之寺院モ准之、

〔内高何程
此反別何程
境内

一 除地高何程
此反別何程

△前同断

〔内高何程
此反別何程

境内

一 除地反別何程
但先前ヨリ高入無之

一 除地山林反別何程
何ヶ所

一 除地山林無反別
何ヶ所

△寺祿無之候ハ、如斯認ムヘシ、

一 元朱印地除地山林等無之、

外

庵室一ヶ所

但庵号何々ト称年号十支年
中年曆不詳欵、境内或ハ村内字何所ニ造

立、庵主差置又ハ空庵ニテ寺持ニ有之候欵、

同 一ヶ所

但書認方前同断、

何国何郡何町

中本寺
小本寺欵

右 右本山

一 何寺末 觸頭欵 何寺

住職誰

△觸頭其外之役寺ニ候ハ、其訳如斯此処ヘ認ム
ヘシ、余之寺院モ准之、

腹書住職有無、寺祿有無等ノ認方前振合之通、

右

一 何寺塔中

何寺

住職誰

腹書其外前同断、

△中小本寺他之管轄ニ候ハ、如斯朱書ニテ認ムヘシ、
余モ准之、

△何藩管轄所
府 縣

何国何郡何町

中本寺 何国何郡何町
小本寺 何村

一 何寺末 何寺

住職誰

腹書其外前同断

何国何郡何町

一 無本寺

何寺

腹書其外前同断

住職誰

(別紙)

何宗何派

△何藩管轄所
府

何国何郡何町
何村

何国何郡何村

中本寺
小本寺

本山

一何寺末

何寺

住職誰

腹書其外前同断

何国何郡何村

中本寺
小本寺

一何寺末

何国何郡何町
何村

何寺

住職誰

腹書其外前同断

△右之通一宗一派限、表紙順席ニ倣區別ヲ立認ムヘ

シ、

右ハ当藩管内寺院本末其外取調候処、書面之通相違無
府
県

之候也、

明治三庚午年 月

民部省

府
藩
県
印

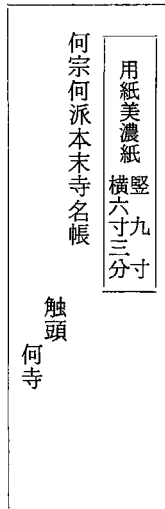
【参照】

〔第四百九十四〕七月二十八日(大政官)

其本山並触下本末寺名帳別紙雛形之通取調、至急可差
出事、

(別紙雛形)

(△印ハ朱書)



何宗何派

府
藩
管
轄
所
県

何国何郡何町
何村

何山

一本山

何寺

住職誰

府
何藩管轄所

何国何郡何村

一本山直末

何寺

住職誰

△無住ニテ他ヨリ兼帯ニ候ハ、如斯認ムヘシ、
住職無之、何国何郡何村
候、
同宗同派何寺住職誰兼帯罷在

府
何藩管轄所

何国何郡何村

一 同末
中本寺

触頭欽

住職誰

△触頭其外役寺ニ候ハ、其訳如斯此処ヘ認ヘ
シ、余ノ寺院モ准之、

肩書前同断

一 同末
小本寺

何寺

住職誰

△前同断

一 右何寺塔中

何寺

住職誰

△前同断

中
小本寺

何国何郡何村

一何寺末

何寺

住職誰

△前同断

肩書前同断

肩書前同断

何寺

一何寺末

住職誰

△前同断

肩書前同断

一無本寺

何寺

△前同断

住職誰

右ハ何宗何派本末其外寺号書面之通御座候、右之外同
宗同派之寺院無御座候、以上、

何宗何派触頭

府
何藩管轄所

何国何郡何村

何寺

住職誰

明治三庚午年 月

住職誰印判花押

民部省

御役所

七三七 永山盛輝ヲ伊那県少参事ト為ス

七月廿九日

永山盛輝正藏ヲ伊那県少参事ト為ス、

鹿兒島県士族

永山盛輝

正藏
文政九年丙戌八月生

○中略

同月明治三年三月廿九日

一 任租税大佑、

民部省

同日

一 伊那県少参事ノ心得ヲ以出張可致事、

民部省

〔采〕
同年七月十日

一 大蔵省管租税司」

同月廿九日

一 免本官、

大蔵省

同日

一 任伊那県少参事、

○以下略ス

七三八 西郷隆盛福岡ニ出張シ、同藩贖札事件ヲ

周旋尽力ス

七月晦日

福岡藩贖札事件ノ為メ、其藩ノ依頼ニヨリ、西郷隆盛同
地ニ出張シ、八月十三日帰藩ス、

○上略

此年明治三年 福岡藩に於ても一大事件を顕出せり、即ち彼

の贖札製造の一举なり、福岡藩知事黒田齊溥は大に之
を憂へ、使を薩藩に派遣して其救済を依頼せり、元來

齊溥は島津家の出身なるを以て、従うて薩筑の間は交
情尤も親密なりき、加ふるに嘉永二年の内訌以來、薩

藩志士の救助せられしもの多く、西郷・大久保等の其
驥足を伸ばすを得たるも、亦齊溥の周旋多きに居れり

〔第一編第三章・第
四章に参照すべし〕、故に隆盛等常に之を其脳裡に刻して
敢て忘れざりしが、偶此変報に接して亦深く之を憂へ、

八月藩命を奉じて福岡に至り、大に救済尽力する所ア

り、当時隆盛が福岡より大久保に贈りたる書に曰く、

暫ハ不奉伺御安否候処、弥以御安康可被成御奉職、
奉珍賀候、随て少弟福岡藩禮札一条ニ付、御使者御
国元江相達歎願有之候処、

御両殿様被聞召上、御使者にて福岡表江罷越候仕合
ニ御座候処、落中ハ悉ク恐懼之事にて何共無致方、
手を空して罷在候時機ニ御座候、殊ニ美濃守様ニハ
格別之御鴻恩を戴居候事にて、死を以可尽我々共ニ
御座候得は、此急難をよそにいたし候訳ニハ不參、
至極心痛罷在候事ニ御座候、然るに岸良君幸御出張
相成居候故、早速より歎願いたし候次第にて御座候
間、細事ハ岸良君より御聞取可被下候、扱此度之一
条ニ付てハ、小河愛四郎と申者一己之計を以取企候
旨及自訴候付、何卒此人迄にて相止候様、乍此上君
公迄醜辱を蒙らせ候てハ、頓と是限り之事御座候間、
臣子之不可忍処、国人一同死ニ就候ても不足仕合ニ
御座候間、此処ニおひてハ情実も御汲取被成下度、
畢竟此大法を犯候義を取組候付てハ、必一人魁首と
成り候覚悟無之候てハ被相初候義にてハ無之、如何
ニあはふな筑前にて是丈々は相決し居候訳ニ御座

候間、何卒此上之処專一ニ歎願仕候事ニ御座候、次
ニハ罪人之者ハ都て隣藩江御預相成居候付、江戸表
江御引廻し相成候様にてハ、頓と醜体を極め候付、
此節御刑法相定候通、藩内ニおいて所置いたし候処、
幾重ニも相願置候間、何卒此此兩条ハ御尽力被成下
度奉合掌候、只私情を以申上候訳にてハ無之、条理
を立相願候事にて御座候間、偏奉歎願候、一説ニハ
城内にて相拵候上ハ場所柄不宜、君公も知らぬとハ
言われぬと申事も御座候得共、是ハ誠ニ事実を明メ
ぬ論にて、福岡之城内ハ至て手広ク、入海迄も有之
候所にて、廊中之事決て御存しない所多く、只城内
と言ふを以理を推し候得は、国中之人ハ不殘刑に不
就候てハ不相濟場ニ立至り可申候間、不差入事なか
ら余り心配いたし候故、是迄も弁明仕候付、何卒御
救ひ被下度奉合掌候、此旨福岡藩より歎願之為登京
仕候付、乍略義以書中奉願候、頓首々々、

八月三日

西郷吉之助

大久保一藏様

追啓上、野生ニも先月初又々政府江罷出候様被仰
付、其段ハ疾中村より御聞取被下候半、実ニ難渋

之場合行廻候時機にて、只一人にて御疑惑ヲ積ミ、夫故御悪も一人ニ止り候次第ニ御座候、いつれ此上は御疑惑を解き候欤、又ハ斃候欤之両様ニ相決し、毎日死を極め、今日限と定候て出初仕候処、頓と苦勞も無之、御存通之疎暴者も余程每物念を入候故、都て仕へ安く覚候事ニ御座候、いまた一事も不成、直様他出いたし候義心外之至御座候得共、難事ヲ分ち候人も無之、一方ハ手抜相成候次第残念と可申欤、何と申て宜敷候哉、困難之仕合少しハ御憐察可被下候、

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

【参照一】

大久保利通日記

十二月六日

一八字参朝、議事毎之通、退出后訪吉井子、黒田・川村子入来、今日岩倉家へ集会、筑(福岡) 廣札御処分之儀有之、種々ノ論有之候得共、小夫見込豪然相立候、

(廣札事件石室秘稿参看)

【参照二】

木戸孝允日記

六月十二日

八字参朝、日田知県事松方助左衛門[○]正 出京、北筑廣札之証ヲ訴フ、依テ今日大ニ此所致ヲ論ス、二字退出、又岩卿ニ至リ又論ス^{略下}

【参照三】

寺師宗道日記

七月晦日 晴

西郷吉之助事、今度筑前江被差越候由、彼国ニおるて偽金札製候一件ニ付、朝廷より監察入込糺弾ニ付、其為ニ西郷被遣候由也、

【参照四】

岩倉具視書翰

封状

大久保殿

具視

前略、永々不参無申条候、最早近々ニハ出仕と存候、扱別紙ニ通御廻シ申入候、明日早々條公江御返達可給候、小生所存無之旨ハ、則返事申入置候、早々以上、

六 十四

大久保殿

具視

(同封別紙)

岩倉亞相公

實美

一 贖札罪人処刑之義、新律御取調中ニ候得共、此度之義

ハ実ニ非常之御処分無之テハ、決テ懲艾ノ実功も無覺
束事ニ付、先旧幕律ニヨリ、別紙仮律ノ通御定可然候
軟、唯今德卿・廣澤・佐々木等集会評議仕候間、早々
御談申候、御覽之上賢考示給度、猶明日ハ御発表相成
度候間、御所存無之候ハ、今日中大久保方へ御廻達
希上候、

一 邊渡書状相達候間、御廻覽可給候、

大久保利護氏所藏本にて校訂

七三九 藩庁聴許ヲ得スシテ神社ノ營造ヲ許サス

是月(七月)

藩庁ニテハ聴許ヲ得スシテ神社ノ營造ヲ許サス、

御当地ハ勿論諸郷ニ至リ、神社之儀ハ夫々祭崇ノ次第
有之事候間、尔后假令少社ナリ共、官許ヲ不請私ニ致
建立候儀、屹不相成候条面々へ申渡、地頭へモ可申渡
候、

七月

知政所

七四〇 藩庁諸郷寄留者土着転籍取扱方ヲ達ス

是月(七月)

藩庁諸郷寄留者土着転籍取扱方ヲ達ス、

此節御一新ニ付テハ、諸郷へ致中宿候家来・下人ノ儀
致吟味、可申出旨致承知候ニ付、篤ト涉評議候処、諸
郷中宿ノ者共数多罷在、田畠山野地等過分ニ相円、百
姓別テ難渋ノ場所モ有之、殊ニ中宿ノ者ハ公役等モ不
致、只其処ノ作職ニテ豪富ノ者モ不少、或ハ浦稼売買
等ニテ致渡世、其土地へ染付居候者有之筋相見得申候
間、此節人別御改ニ付テハ、諸郷中宿家来・下人株、
都テ土着ノ百姓成亦ハ野町人・浦人成被仰付、夫々職
分相守候様被仰付度候、万一主人方差支ノ者モ有之候
ハ、其分ハ追々主人方へ引取、以後不致中宿様被仰
付度、乍然真幸表其外肝付表人少ノ郷内、累年百姓手
ニ余リ、中宿共へ押々割付為致作職、乍漸御年貢相遂
来候場所モ可有之、右ハ碓ト主人方へ引取候テハ、跡
差支可罷成軟モ難計候ニ付、右様ノ所ハ尚亦地頭俱ニ
取シラへ、何分可申出候間、先ツ前件通被仰付可然儀
ト地頭方へモ申談、此段申出候、以上、

五月四日

民事局

右ノ通被仰付候条、向々へ可申渡候、

七月

知政所

七四一 田尻務ヲ監察總裁ト為ス

是月(七月)

田尻務ヲ監察總裁ト為ス、

田尻(種賢)務

監察總裁

右ノ通被 仰付候条、向々へ可申渡候、

七月

知政所

七四二 知藩事並隠居・嫡子ヲ七節ニ参賀セシム

後ニ隠居・嫡子ノ参賀ヲ停ム

是月(七月)

知藩事並隠居・嫡子ヲシテ、七節ニ参賀セシム、仍テ更

ニ隠居・嫡子ノ参賀ヲ停ム、

〔第四百九十九〕七月(口達)

〔頭註〕五年太政官第二十六号及六年第一号ニ依リ消滅一人日 上元 上巳 端午 七夕 中元 重陽

右七節ト相唱候ニ付テハ、此表知藩事並隠居・嫡子参

賀可致旨被相達候事、

〔第五百〕七月(口達)

七節当表在住之知事参賀、隠居・嫡子其儀不及旨更ニ被達候事、

七四三 諸藩ヲシテ願伺届等署名調印方ヲ定ム

是月(七月)

諸藩ヲシテ願伺届等署名調印方ヲ定ム、

〔頭註〕四年太政官第三百五十三ヲ以テ廢藩〔第五百〕七月(民部省) 諸藩

諸藩願伺届等、是迄公用人又ハ其筋ノ官員名前ヲ以差出来り候処、自今府県同様其藩名ヲ記載シ、調印致シ可差出事、

但事柄ニヨリ知事名前ニテ差出候儀ハ、時宜ニ從ヒ可致押印、且東京詰合官員限リ心付キ差出候願伺届書等ハ、何藩何役何某ト記載シ、其者ノ調印ヲ以可差出候事、